

基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	大学院の研究科の設置							
フリガナ設置者	ガッコウオツマ オツマカクイン 学校法人 大妻学院							
フリガナ大学の名称	オツマジョシヤカクガクイン 大妻女子大学大学院（The Graduate School of Otsuma Women's University）							
大学本部の位置	〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地							
大学の目的	本大学院は、建学の精神にのっとり学術の理論及び応用を教授研究し、精深な学識と研究能力を養い、文化の発展に寄与することを目的とする。							
新設学部等の目的	修士課程は、学部における一般的な並びに専門的な教養の基礎の上に、広い視野に立って、精深な学識を授け、その専門分野における研究能力を養い、社会に貢献できる高度な専門職業人の育成を目的とする。 博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、またはその他の高度に専門的な業務に従事するために必要な研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	人間文化研究科 [Graduate School of Studies in Human Culture]	年	人	年次人	人		年 月 第 年次	
	人間生活科学専攻 [Doctoral Program for Studies in Human Life Sciences]	3	3	—	9	博士 (生活科学)	平成22年 4月 第 1 年次	東京都千代田区三番町12番地
	言語文化学専攻 [Doctoral Program for Studies in Language and Culture]	3	3	—	9	博士 (文学)	平成22年 4月 第 1 年次	東京都千代田区三番町12番地
	人間生活科学専攻 [Master's Program for Studies in Human Life Sciences]	2	12	—	24	修士 (生活科学)	平成22年 4月 第 1 年次	東京都千代田区三番町12番地 東京都多摩市唐木田2丁目7番地1
	言語文化学専攻 [Master's Program for Studies in Language and Culture]	2	8	—	16	修士 (文学)	平成22年 4月 第 1 年次	東京都千代田区三番町12番地 東京都多摩市唐木田2丁目7番地1
	現代社会研究専攻 [Master's Program for Studies in Contemporary Society]	2	6	—	12	修士 (社会学)	平成22年 4月 第 1 年次	東京都多摩市唐木田2丁目7番地1 東京都千代田区三番町12番地
	臨床心理学専攻 [Master's Program for Studies in Clinical Psychology]	2	6	—	12	修士 (心理学)	平成22年 4月 第 1 年次	東京都多摩市唐木田2丁目7番地1
計		38		82				
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）	①家政学研究科（廃止） 人間生活学専攻（博士後期課程）（△3） 被服学専攻（修士課程）（△6） 食物学専攻（修士課程）（△6） 児童学専攻（修士課程）（△6） 文学研究科（廃止） 国文学専攻（博士後期課程）（△2） 英文学専攻（博士後期課程）（△2） 国文学専攻（修士課程）（△6） 英文学専攻（修士課程）（△6） 社会情報研究科（廃止） 社会生活情報専攻（修士課程）（△6） 人間関係学研究科（廃止） 社会学専攻（修士課程）（△6） 臨床心理学専攻（修士課程）（△6） ※平成22年度から学生募集を停止。 ②5女子大学（大妻女子大学、昭和女子大学、実践女子大学、東京家政大学、日本女子大学）共同による教職大学院の共同教職研究科を平成22年4月に開設予定【平成21年5月末日設置認可申請書提出予定】							

	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
		講義	演習	実験・実習	計				
教育課程	人間文化研究科 人間生活科学専攻 (博士後期課程)	18科目	4科目	0科目	20科目	6単位			
	人間文化研究科 言語文化学専攻 (博士後期課程)	18科目	26科目	0科目	44科目	12単位			
	人間文化研究科 人間生活科学専攻 (修士課程)	52科目	29科目	2科目	83科目	30単位			
	人間文化研究科 言語文化学専攻 (修士課程)	44科目	49科目	0科目	93科目	30単位			
	人間文化研究科 現代社会研究専攻 (修士課程)	39科目	8科目	2科目	49科目	30単位			
	人間文化研究科 臨床心理学専攻 (修士課程)	15科目	9科目	3科目	27科目	30単位			
教員	学部等の名称		専任教員等					兼任教員	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	
新設	人間文化研究科 人間生活科学専攻 (博士後期課程)	人間文化研究科 人間生活科学専攻 (博士後期課程)	13人 (13)	1人 (1)	0人 (0)	0人 (0)	14人 (14)	0人 (0)	3人 (3)
	人間文化研究科 言語文化学専攻 (博士後期課程)	人間文化研究科 言語文化学専攻 (博士後期課程)	12 (12)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	0 (0)
	人間文化研究科 人間生活科学専攻 (修士課程)	人間文化研究科 人間生活科学専攻 (修士課程)	28 (28)	10 (10)	1 (1)	0 (0)	39 (39)	0 (0)	11 (11)
	人間文化研究科 言語文化学専攻 (修士課程)	人間文化研究科 言語文化学専攻 (修士課程)	30 (30)	3 (3)	2 (2)	2 (2)	37 (37)	0 (0)	2 (2)
	人間文化研究科 現代社会研究専攻 (修士課程)	人間文化研究科 現代社会研究専攻 (修士課程)	22 (22)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	28 (28)	0 (0)	8 (8)
	人間文化研究科 臨床心理学専攻 (修士課程)	人間文化研究科 臨床心理学専攻 (修士課程)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	8 (8)	0 (0)	9 (9)
計	計	85 (85)	21 (21)	4 (4)	3 (3)	113 (113)	0 (0)	32 (32)	
既設	家政学研究科 人間生活学専攻 (博士後期課程) (廃止)	家政学研究科 人間生活学専攻 (博士後期課程) (廃止)	0 (15)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (16)	0 (0)	0 (4)
	家政学研究科 被服学専攻 (修士課程) (廃止)	家政学研究科 被服学専攻 (修士課程) (廃止)	0 (7)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (8)	0 (0)	0 (10)
	家政学研究科 食物学専攻 (修士課程) (廃止)	家政学研究科 食物学専攻 (修士課程) (廃止)	0 (12)	0 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (14)	0 (0)	0 (3)
	家政学研究科 児童学専攻 (修士課程) (廃止)	家政学研究科 児童学専攻 (修士課程) (廃止)	0 (5)	0 (6)	0 (0)	0 (0)	0 (11)	0 (0)	0 (5)
	文学研究科 国文学専攻 (博士後期課程) (廃止)	文学研究科 国文学専攻 (博士後期課程) (廃止)	0 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (5)	0 (0)	0 (1)
	文学研究科 英文学専攻 (博士後期課程) (廃止)	文学研究科 英文学専攻 (博士後期課程) (廃止)	0 (6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (6)	0 (0)	0 (0)
	文学研究科 国文学専攻 (修士課程) (廃止)	文学研究科 国文学専攻 (修士課程) (廃止)	0 (8)	0 (0)	0 (1)	0 (0)	0 (9)	0 (0)	0 (1)
	文学研究科 英文学専攻 (修士課程) (廃止)	文学研究科 英文学専攻 (修士課程) (廃止)	0 (11)	0 (0)	0 (0)	0 (1)	0 (12)	0 (0)	0 (1)
	社会情報研究科 社会生活情報専攻 (修士課程) (廃止)	社会情報研究科 社会生活情報専攻 (修士課程) (廃止)	0 (7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (7)	0 (0)	0 (1)
	人間関係学研究科 社会学専攻 (修士課程) (廃止)	人間関係学研究科 社会学専攻 (修士課程) (廃止)	0 (5)	0 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (7)	0 (0)	0 (6)
	人間関係学研究科 臨床心理学専攻 (修士課程) (廃止)	人間関係学研究科 臨床心理学専攻 (修士課程) (廃止)	0 (4)	0 (3)	0 (0)	0 (1)	0 (8)	0 (0)	0 (9)
計	計	0 (59)	0 (14)	0 (1)	0 (2)	0 (76)	0 (0)	0 (38)	
合計	合計	85 (91)	21 (21)	4 (4)	3 (3)	113 (119)	0 (0)	32 (54)	
教員以外の職員の概要	職種		専任		兼任		計		
	事務職員	職員	134人 (134)		116人 (116)		250人 (250)	事務職員：事務局職員 (教務・学生・入試・総務・財務・メディア等)、カウンセラー(学生相談室)、寮監、実験室助手・事務助手	
	技術職員	職員	2 (2)		6 (6)		8 (8)	技術職員：看護師	
	図書館専門職員	職員	8 (8)		11 (11)		19 (19)	図書館専門職員：図書館職員(司書)	
	その他の職員	職員	2 (2)		0 (0)		2 (2)	その他の職員：守衛・学療給食係	
計	計	146 (146)		133 (133)		279 (279)			

平成22年度から学生募集を停止する。

校 地 等	区 分		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計		大妻女子大学及び大妻女子大学短期大学部と共用 大妻女子大学及び大妻女子大学短期大学部と共用			
	校 舎 敷 地		29,350.00㎡	10,200.37㎡	0㎡	39,550.37㎡					
	運 動 場 用 地		54,452.00㎡	363.61㎡	0㎡	54,815.61㎡					
	小 計		83,802.00㎡	10,563.98㎡	0㎡	94,365.98㎡					
	そ の 他		0㎡	3,490.30㎡	0㎡	3,490.30㎡					
	合 計		83,802.00㎡	14,054.28㎡	0㎡	97,856.28㎡					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計		大妻女子大学及び大妻女子大学短期大学部と共用				
		484.29㎡ (484.29㎡)	59,090.33㎡ (59,090.33㎡)	9,963.58㎡ (9,963.58㎡)	69,538.20㎡ (69,538.20㎡)						
教 室 等	講義室		演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設		大学全体			
	92室		40室	97室	16室 (補助職員52人)	7室 (補助職員6人)					
専 任 教 員 研 究 室			新設学部等の名称		室 数		111室				
			人間文化研究科								
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称		図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	全て大学全体で共有		
	人間文化研究科		400,925〔83,000〕 400,605〔82,667〕	7,433〔1,657〕 7,433〔1,657〕	1,810〔1,197〕 1,810〔1,197〕	8,596 (8,596)	0 (0)	0 (0)			
	計		400,925〔83,000〕 400,605〔82,667〕	7,433〔1,657〕 7,433〔1,657〕	1,810〔1,197〕 1,810〔1,197〕	8,596 (8,596)	0 (0)	0 (0)			
図 書 館		面 積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数					
		6,928.00㎡		751席		680,000冊					
体 育 館		面 積		体育館以外のスポーツ施設の概要							
		3,247.09㎡		テニスコート7面		グラウンド他					
経 費 の 見 積 り 及 び 持 続 的 維 持 方 法 の 概 要	経費の見積り	区 分		開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	届出研究科全体
		教員1人当り研究費等	実験系		995千円	995千円	995千円	-千円	-千円	-千円	
			非実験系		918千円	918千円	918千円	-千円	-千円	-千円	
		共同研究費等	助手		170千円	170千円	170千円	-千円	-千円	-千円	
					0千円	0千円	0千円	-千円	-千円	-千円	
		図書購入費		2,200千円	2,200千円	2,200千円	2,200千円	-千円	-千円	-千円	
	設備購入費		1,227千円	1,227千円	1,227千円	1,227千円	-千円	-千円	-千円		
	学生1人当り納付金の見積り	区 分		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	第1学年次 本学卒業 (見込)者 290千円減免	
		人間生活科学専攻 (博士後期課程)		1,245千円	975千円	995千円	-千円	-千円	-千円		
		言語文化学専攻 (博士後期課程)		1,205千円	935千円	955千円	-千円	-千円	-千円		
		人間生活科学専攻 (修士課程)		1,245千円	975千円	-千円	-千円	-千円	-千円		
		言語文化学専攻 (修士課程)		1,204千円	934千円	-千円	-千円	-千円	-千円		
現代社会研究専攻 (修士課程)		1,224千円	954千円	-千円	-千円	-千円	-千円				
臨床心理学専攻 (修士課程)		1,225千円	955千円	-千円	-千円	-千円	-千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金、資産運用収入、雑収入等								
大 学 の 名 称		大妻女子大学大学院									
学 部 等 の 名 称		修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
家政学研究科 (博士後期課程) 人間生活学専攻		3年	3人	-人	9人	博士(学術)	0.33 0.33	平成8年度	東京都千代田区三番町12番地		
(修士課程) 被服学専攻		2年	6人	-人	12人	修士 (家政学)	0.47 0.33	昭和55年度	同上		
食物学専攻		2年	6人	-人	12人	修士 (家政学)	0.66	昭和47年度	同上		
児童学専攻		2年	6人	-人	12人	修士 (家政学)	0.41	昭和52年度	同上		

既設大学等の状況	文学研究科 (博士後期課程) 国文学専攻	3	2	-	6	博士(文学)	0.37 0.88	平成8年度	同上
	英文学専攻	3	2	-	6	博士(文学)	0.00	平成8年度	同上
	(修士課程) 国文学専攻	2	6	-	12	修士(文学)	0.37 0.16	昭和47年度	同上
	英文学専攻	2	6	-	12	修士(文学)	0.58	昭和47年度	同上
	社会情報研究科 (修士課程) 社会生活情報専攻	2	6	-	12	修士 (社会情報)	0.33 0.33	平成8年度	東京都多摩市唐木田2丁目7番地1
	人間関係学研究科 (修士課程) 社会学専攻	2	6	-	12	修士 (社会学)	0.66 0.08	平成15年度	同上
	臨床心理学専攻	2	6	-	12	修士 (心理学)	1.25	平成15年度	同上
大学の名称	大妻女子大学								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
家政学部						1.13			
被服学科	4	100	-	400	学士 (家政学)	1.11	昭和43年度	東京都千代田区三番町12番地	
食物学科	4	100	-	400	学士 (家政学)	1.06	昭和24年度	同上	
児童学科	4	100	-	400	学士 (家政学)	1.14	昭和43年度	同上	
ライフデザイン学科	4	100	-	400	学士 (家政学)	1.24	平成14年度	同上	
文学部						1.25			
日本文学科	4	100	-	400	学士 (文学)	1.28	昭和42年度	同上	
英文学科	4	100	-	400	学士 (文学)	1.23	昭和42年度	同上	
コミュニケーション文化学科	4	100	-	400	学士 (文学)	1.24	平成14年度	同上	
社会情報学部						1.19			
社会情報学科	4	300	-	1200	学士(社会情報学)	1.19	平成4年度	東京都多摩市唐木田2丁目7番地1	
人間関係学部						1.22			
人間関係学科	4	150	-	600	学士(人間関係学)	1.27	平成11年度	同上	
人間福祉学科	4	100	-	400	学士(人間関係学)	1.13	平成11年度	同上	
比較文化学部						1.23			
比較文化学科	4	150	-	600	学士(比較文化学)	1.23	平成11年度	同上	
大学の名称	大妻女子大学短期大学部								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
家政科						1.10			
家政専攻	2	200	-	400	短期大学士 (家政学)	1.25	昭和25年度	東京都千代田区三番町12番地	
食物栄養専攻	2	200	-	400	短期大学士 (家政学)	0.95	昭和25年度	同上	
国文科	2	150	-	300	短期大学士 (文学)	1.26	昭和42年度	同上	
英文科	2	150	-	300	短期大学士 (文学)	1.22	昭和42年度	同上	

附属施設の概要	<p>名称：大妻女子大学人間生活文化研究所 目的：大妻女子大学の社会的貢献の一環として、本学が有する優れた諸々の知的資源を活用し、人間の生活文化全般にかかわる諸問題の基礎的研究及びその結果の応用発展について、広く国際的・学際の見地から総合的に研究、調査を行い、これらの成果を広く社会に提供する。 所在地：東京都千代田区三番町12番地 設置年月：平成20年4月1日 規模等：図書館棟5階～6階に設置、述べ床面積506.70㎡</p>
	<p>名称：大妻女子大学総合情報センター 目的：大妻女子大学及び大妻女子大学短期大学部共通の施設として、教育・研究に必要な図書、電子情報、その他各資料を収集、所蔵し、教職員、学生等の利用に供するとともに、情報メディア環境を活用した教育・学習活動等への支援と、そのために必要な開発業務を行うことをもって、本学の教育・研究の充実発展に寄与することを目的とする。 所在地：東京都千代田区三番町12番地 東京都多摩市唐木田2丁目7番地1 埼玉県入間市狭山台234番地 設置年月：平成20年4月1日 規模等：(千代田キャンパス) 本館8階・大学校舎C棟3階・図書館棟地下2階～4階に設置、 述べ床面積4241.93㎡ (多摩キャンパス) 図書館棟3階～4階に設置、述べ床面積2467.72㎡ (狭山台キャンパス) 2号館4階・図書館棟1～3階に設置、述べ床面積1759.53㎡</p>
	<p>名称：大妻女子大学生生活科学資料館 目的：人間生活に係わる諸資料を収集、展示し、あわせてこれらの研究を行い、もって人間生活科学等の向上に資することを目的とする。 所在地：東京都千代田区三番町12番地 設置年月：平成18年12月19日 規模等：図書館棟地下1階・地下3階に設置、述べ床面積677.70㎡</p>
	<p>名称：大妻女子大学心理相談センター 目的：本学大学院に在籍する大学院生を対象として、臨床心理士を養成するための教育・訓練の実習施設としての役割を有するとともに来談者に対する心理相談サービスの提供及び調査研究活動を行うことを目的とする。 所在地：東京都多摩市唐木田2丁目7番地1 設置年月：平成15年4月1日 規模等：大妻文化センター1階に設置、延べ床面積345.87㎡</p>
	<p>名称：大妻女子大学草稿・テキスト研究所 目的：主として文芸に関わる草稿・テキスト等の基礎的研究及びその成果の文学研究・文学教育への応用についての総合的研究を行うことを目的とする。 所在地：東京都千代田区三番町12番地 設置年月：平成11年4月1日 規模等：図書館棟5階に設置、述べ床面積100.00㎡</p>
	<p>名称：大妻女子大学家政学部児童臨床センター 目的：本学家政学部児童学科学生及び大学院生の実習施設としての役割を有するとともに、児童学における臨床研究の推進とその成果を社会に還元することを目的とする。 所在地：東京都千代田区三番町12番地 設置年月：平成4年4月1日 規模等：大学校舎B棟地下1階に設置、述べ床面積230.00㎡</p>

様式2号(その2の1)

教育課程等の概要														
(人間文化研究科人間生活科学専攻(博士後期課程))														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
生活人間学専修	発達環境学演習	1・2・3前		2			○		1					
	老年学特論	1・2・3後		2		○		1						
	行動疫学特論	1・2・3後		2		○		1						
	生物環境学特論	1・2・3前		2		○		1						
	運動生理学特論	1・2・3前		2		○		1						
	小計(5科目)	—	0	10	0	—	—	3	0	0	0	0	0	—
臨床人間学専修	発達臨床学特論	1・2・3前		2		○			1				兼1	
	保育臨床学特論	1・2・3後		2		○							兼1	
	乳幼児保育学特論	1・2・3前		2		○		1						
	子ども家庭福祉学特論	1・2・3後		2		○		1						
	比較子ども文化論演習	1・2・3後		2			○		1					
	小計(5科目)	—	0	10	0	—	—	3	1	0	0	0	兼1	—
生活計画学専修	生活環境機能学特論	1・2・3後		2		○		1						
	病態栄養学特論	1・2・3後		2		○		1						
	被服設計学演習	1・2・3後		2			○	1						
	食生活安全学特論	1・2・3後		2		○		1						
	調理学特論	1・2・3前		2		○		1					兼1	
	小計(5科目)	—	0	10	0	—	—	3	0	0	0	0	兼1	—
生活素材学専修	生活材料学特論	1・2・3前		2		○							兼1	
	生体機能材料学特論	1・2・3前		2		○		1						
	食品機能学特論	1・2・3前		2		○		1						
	栄養素機能学演習	1・2・3前		2			○	1						
	調理素材学特論	1・2・3前		2		○		1						
	小計(5科目)	—	0	10	0	—	—	4	0	0	0	0	兼1	—
合計(20科目)		—	0	40	0	—	—	13	1	0	0	0	兼3	—
学位又は称号	博士(生活科学)		学位又は専攻の分野			家政関係								
修了要件及び履修方法										授業期間等				
<p>(1) 修了要件</p> <p>博士後期課程に3年以上在学し、所定の授業科目について3科目6単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う博士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し博士(生活科学)の学位を授与する。</p> <p>博士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会が選出した審査委員会が行う。審査委員会は、指導教員を主査として、当該論文に関連する授業科目の担当教員2名の副査、および他大学等の専門家1名の委員をもって構成する。最終試験は、所定の単位を修得し、かつ博士論文の審査に合格した者に、博士論文及び関連する研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の評語をもって表す。</p> <p>(2) 履修方法及び研究指導</p> <p>履修にあたっては、学生ごとに、その研究課題に対応した指導教員1名と、専門を異にする副指導教員2名からなる研究指導チームを入学時のガイダンスにおいて定める。研究指導チームは、学位取得に向けた多角的・総合的な研究を促進させるため、学生の研究課題に即した適切なカリキュラム選択などの履修指導及び研究指導を担当する。</p> <p>研究指導は、年度当初において、指導教員が中心となって、学生の研究課題に即した研究計画を定めるための指導を行い、研究計画書と研究指導計画書を作成する。論文主題の決定・研究資料調査と研究方法の確立・論文内容の吟味などを行い、学位論文作成、学位論文の公开发表に連繋させる。また、博士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻や他大学院で指導が受けられるものとする。</p> <p>また、論文作成のための調査研究や学会発表等の教育費(旅費・図書費等)が予算化(学生1人に対し年間30万円)されており、授業時間外の研究をサポートしている。</p>										1 学年の学期区分	2 学期			
										1 学期の授業期間	1 5 週			
										1 時限の授業時間	9 0 分			

教 育 課 程 等 の 概 要

設置する研究科等の学位等と同じ分野の学位を授与している既設の研究科等
(家政学研究科人間生活学専攻(博士後期課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
生活人間学領域	成長学特論	1・2・3前		2		○			1						兼1 集中
	老年学特論	1・2・3後		2		○									
	行動疫学特論	1・2・3後		2		○			1						
	生物環境学特論	1・2・3前		2		○			1						
	運動生理学特論	1・2・3前		2		○			1						
	小計(5科目)	—	0	10	0	—	—	—	4	0	0	0	0	兼1	—
臨床人間学領域	発達臨床学特論	1・2・3前		2		○				1					兼1
	保育臨床学特論	1・2・3後		2		○									
	乳幼児保育学特論	1・2・3前		2		○			1						
	子ども家庭福祉学特論	1・2・3後		2		○			1						
	比較子ども文化論	1・2・3後		2		○			1						
	小計(5科目)	—	0	10	0	—	—	—	3	1	0	0	0	兼1	—
生活計画学領域	生活環境機能学特論	1・2・3後		2		○			1						兼1
	病態栄養学特論	1・2・3前		2		○			1						
	被服設計学特論	1・2・3後		2		○									
	食生活安全学特論	1・2・3前		2		○			1						
	調理科学特論	1・2・3前		2		○			1						
	健康管理学特論	1・2・3前		2		○			1						
	小計(6科目)	—	0	12	0	—	—	—	5	0	0	0	0	兼1	—
生活素材学領域	生活材料学特論	1・2・3前		2		○									兼1
	生体機能材料学特論	1・2・3前		2		○			1						
	食品機能学特論	1・2・3前		2		○			1						
	栄養素機能学特論	1・2・3前		2		○			1						
	調理素材学特論	1・2・3前		2		○			1						
	小計(5科目)	—	0	10	0	—	—	—	4	0	0	0	0	兼1	—
合計(21科目)			—	0	42	0	—	—	16	1	0	0	0	兼4	—
学位又は称号	博士(学術)		学位又は専攻の分野				家政関係								
修了要件及び履修方法										授業期間等					
博士後期課程に3年以上在学し、所定の授業科目について3科目6単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う博士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し博士(学術)の学位を授与する。										1学年の学期区分	2学期				
										1学期の授業期間	15週				
										1時限の授業時間	90分				

教育課程等の概要																
(人間文化研究科言語文化学専攻(博士後期課程))																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
日本文学専修	古典文学分野	古代文学特論Ⅰ	1・2・3前		2		○			1						
		古代文学特論Ⅱ	1・2・3後		2		○			1						
		中世文学特論Ⅰ	1・2・3前		2		○			1						
		中世文学特論Ⅱ	1・2・3後		2		○			1						
		近世文学特論Ⅰ	1・2・3前		2		○			1						
		近世文学特論Ⅱ	1・2・3後		2		○			1						
		研究指導(古代)Ⅰ	1・2・3前		2			○		1						
		研究指導(古代)Ⅱ	1・2・3後		2			○		1						
		研究指導(中世)Ⅰ	1・2・3前		2			○		1						
		研究指導(中世)Ⅱ	1・2・3後		2			○		1						
	研究指導(近世)Ⅰ	1・2・3前		2			○		1							
	研究指導(近世)Ⅱ	1・2・3後		2			○		1							
	小計(12科目)	—		0	24	0				3	0	0	0	0	0	—
	近代現代文学分野	近代現代文学特論Ⅰ	1・2・3前		2		○			1						
		近代現代文学特論Ⅱ	1・2・3後		2		○			1						
		近代現代文学特論Ⅲ	1・2・3前		2		○			1						
		近代現代文学特論Ⅳ	1・2・3後		2		○			1						
		研究指導(近代現代Ⅰ)	1・2・3前		2			○		1						
		研究指導(近代現代Ⅱ)	1・2・3後		2			○		1						
研究指導(近代現代Ⅲ)		1・2・3前		2			○		1							
研究指導(近代現代Ⅳ)		1・2・3後		2			○		1							
小計(8科目)	—		0	16	0				2	0	0	0	0	0	—	
英語文学・英語教育専修	英語文学分野	英文学特論Ⅰ	1・2・3前		2		○			1						
		英文学特論Ⅱ	1・2・3後		2		○			1						
		英文学特殊研究Ⅰ	1・2・3前		2			○		1						
		英文学特殊研究Ⅱ	1・2・3後		2			○		1						
		米文学特論Ⅰ	1・2・3前		2		○			1						
		米文学特論Ⅱ	1・2・3後		2		○			1						
		米文学特殊研究Ⅰ	1・2・3前		2			○		1						
		米文学特殊研究Ⅱ	1・2・3後		2			○		1						
		研究指導(英文学)Ⅰ	1・2・3前		2			○		1						
		研究指導(英文学)Ⅱ	1・2・3後		2			○		1						
	研究指導(米文学)Ⅰ	1・2・3前		2			○		2							
	研究指導(米文学)Ⅱ	1・2・3後		2			○		2							
	小計(12科目)	—		0	24	0				4	0	0	0	0	0	—
	英語教育分野	英語教育学特論Ⅰ	1・2・3前		2		○			1						
		英語教育学特論Ⅱ	1・2・3後		2		○			1						
		英語教育学特殊研究Ⅰ	1・2・3前		2			○		1						
英語教育学特殊研究Ⅱ		1・2・3後		2			○		1							
研究指導(英語教育学)Ⅰ		1・2・3前		2			○		1							
研究指導(英語教育学)Ⅱ		1・2・3後		2			○		1							
小計(6科目)	—		0	12	0				1	0	0	0	0	0	—	
英語学分野	英語学特論Ⅰ	1・2・3前		2		○			1							
	英語学特論Ⅱ	1・2・3後		2		○			1							
	英語学特殊研究Ⅰ	1・2・3前		2			○		1							
	英語学特殊研究Ⅱ	1・2・3後		2			○		1							
	研究指導(英語学)Ⅰ	1・2・3前		2			○		2							
	研究指導(英語学)Ⅱ	1・2・3後		2			○		2							
小計(6科目)	—		0	12	0				2	0	0	0	0	0	—	
合計(44科目)			—		0	88	0			12	0	0	0	0	0	—
学位又は称号	博士(文学)		学位又は専攻の分野			文学関係										

修了要件及び履修方法	授業期間等	
<p>(1) 修了要件 博士後期課程に3年以上在学し、所定の授業科目について6科目12単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う博士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し博士（文学）の学位を授与する。</p> <p>博士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会が選出した審査委員会が行う。審査委員会は、指導教員を主査として、当該論文に関連する授業科目の担当教員2名の副査、および他大学等の専門家1名の委員をもって構成する。最終試験は、所定の単位を修得し、かつ博士論文の審査に合格した者に、博士論文及び関連する研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の評語をもって表す。</p>	1学年の学期区分	2学期
<p>(2) 履修方法及び研究指導 履修にあたっては、学生ごとに、その研究課題に対応した指導教員1名と、専門を異にする副指導教員2名からなる研究指導チームを入学時のガイダンスにおいて定める。研究指導チームは、学位取得に向けた多角的・総合的な研究を促進させるため、学生の研究課題に即した適切なカリキュラム選択などの履修指導及び研究指導を担当する。</p>	1学期の授業期間	15週
<p>研究指導は、年度当初において、指導教員が中心となって、学生の研究課題に即した研究計画を定めるための指導を行い、研究計画書と研究指導計画書を作成する。実際の研究指導は、授業科目の「研究指導」において、論文主題の決定・研究資料調査と研究方法の確立・論文内容の吟味などを行い、学位論文作成、学位論文の公开发表に連繋させる。また、博士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻や他大学院でも指導が受けられるものとする。</p> <p>また、論文作成のための調査研究や学会発表等の教育費（旅費・図書費等）が予算化（学生1人に対し年間30万円）されており、授業時間外の研究をサポートしている。</p>	1時限の授業時間	90分

教 育 課 程 等 の 概 要

設置する研究科等の学位等と同じ分野の学位を授与している既設の研究科等
(文学研究科国文学専攻(博士後期課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
古典文学領域	古代文学特殊研究	1・2・3通		4			○		1						
	中世文学特殊研究	1・2・3通		4			○		1						
	近世文学特殊研究	1・2・3通		4			○		1						
	研究指導(古代)	1・2・3通		4			○		1						
	研究指導(中世)	1・2・3通		4			○		1						
	研究指導(近世)	1・2・3通		4			○		1						
小計(6科目)		—	0	24	0	—	—	—	3	0	0	0	0	0	—
近代文学領域	近代文学特殊研究Ⅰ	1・2・3通		4			○		1						
	近代文学特殊研究Ⅱ	1・2・3通		4			○		1						
	研究指導(近代Ⅰ)	1・2・3通		4			○		1						
	研究指導(近代Ⅱ)	1・2・3通		4			○		1						
	小計(4科目)		—	0	16	0	—	—	—	2	0	0	0	0	0
国語学領域	国語学特殊研究	1・2・3通		4			○							兼1	
	研究指導(国語学)	1・2・3通		4			○							兼1	
	小計(2科目)		—	0	8	0	—	—	—	0	0	0	0	0	兼1
合計(12科目)		—	0	48	0	—	—	—	5	0	0	0	0	兼1	—
学位又は称号	博士(文学)		学位又は専攻の分野			文学関係									
修了要件及び履修方法										授業期間等					
博士後期課程に3年以上在学し、所定の授業科目について3科目12単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う博士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し博士(文学)の学位を授与する。										1学年の学期区分	2学期				
										1学期の授業期間	15週				
										1時限の授業時間	90分				

教 育 課 程 等 の 概 要

設置する研究科等の学位等と同じ分野の学位を授与している既設の研究科等
(文学研究科英文学専攻(博士後期課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
英文学・米文学領域	英米文学特殊研究Ⅰ	1・2・3通		4			○		1						
	英米文学特殊研究Ⅱ	1・2・3通		4			○		2						
	英米文学特殊研究Ⅲ	1・2・3通		4			○		1						
	研究指導(英文学)	1・2・3通		4			○		1						
	研究指導(英米文学)	1・2・3通		4			○		2						
	研究指導(米文学)	1・2・3通		4			○		1						
小計(6科目)		—	0	24	0	—	—	—	4	0	0	0	0	0	—
英語学領域	英語学特殊研究Ⅰ	1・2・3通		4			○		1						
	英語学特殊研究Ⅱ	1・2・3通		4			○		1						
	研究指導(英語学Ⅰ)	1・2・3通		4			○		1						
	研究指導(英語学Ⅱ)	1・2・3通		4			○		1						
	小計(4科目)		—	0	16	0	—	—	—	2	0	0	0	0	0
合計(10科目)		—	0	40	0	—	—	—	6	0	0	0	0	0	—
学位又は称号	博士(文学)		学位又は専攻の分野			文学関係									
修了要件及び履修方法										授業期間等					
博士後期課程に3年以上在学し、所定の授業科目について3科目12単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う博士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し博士(文学)の学位を授与する。										1学年の学期区分	2学期				
										1学期の授業期間	15週				
										1時限の授業時間	90分				

様式2号(その2の1)

教 育 課 程 等 の 概 要															
(人間文化研究科人間生活科学専攻(修士課程))															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験	教授	准教授	講師	助教	助手		
基礎科目	Developing Critical Thinking Skills	1前		1			○							兼担1	
	Critical Reading and Writing	1前		1			○							兼担1	
	小計(2科目)	—	0	2	0	—	—	0	0	0	0	0	0	兼1	
共通科目	家族関係論	1・2前		2			○				1				
	ヒトと環境	1・2前		2			○			1					
	健康科学	1・2前		2			○			1					
	環境成長学	1・2後		2			○			1					
	生活情報論	1・2後		2			○			1					
	統計的調査方法論	1・2後		2			○			1					
	研究方法論Ⅰ(事例研究)	1・2前		2				○		2				オムニバス	
	研究方法論Ⅱ(フィールド研究)	1・2後		2				○		2				オムニバス	
	生涯学習の教育方法論	1・2前		2				○		1					
小計(9科目)	—	0	18	0	—	—	1	1	0	0	0	0	—		
健康・栄養科学専修	栄養化学分野	栄養生化学特論	1・2後		2			○			1				
		栄養生化学・細胞学実験	1・2後		1				○		2				オムニバス
		分子細胞学	1・2前		2			○			1				
		小計(3科目)	—	0	5	0	—	—	2	0	0	0	0	0	—
	食品・機能学分野	食品機能学特論	1・2前		2			○			1				
		材料機能学特論	1・2前		2			○			1				
		食生活安全学	1・2後		2			○			1				
		食品微生物学特論	1・2後		2			○			1				
		食品・機能学領域実験	1・2後		1				○		2				オムニバス
	小計(5科目)	—	0	9	0	—	—	3	0	0	0	0	0	—	
	調理科学・食嗜好学分野	調理科学特論	1・2前		2			○			1				
		調理科学特論演習	1・2後		2				○		1				
		食嗜好学特論	1・2前		2			○			1				
		食嗜好学特論演習	1・2後		2				○		1				
	小計(4科目)	—	0	8	0	—	—	2	0	0	0	0	0	—	
	医療・保健栄養学分野	病態・高齢者代謝学	1・2前		2			○			1				
		栄養疫学特論	1・2前		2			○				1			
		栄養疫学特論演習	1・2後		2				○			1			
		公衆衛生学特論	1・2前		2			○			1				
小計(4科目)	—	0	8	0	—	—	2	1	0	0	0	0	—		
環境サイエンス分野	生命環境特論	1・2前		2			○			1					
	生命環境特論演習	1・2後		2				○		1					
	生活環境特論	1・2前		2			○			1					
	生活環境特論演習	1・2後		2				○		1					
	環境衛生学特論	1・2前		2			○			1					
	地球環境特論Ⅰ	1・2前		2			○			1					
	地球環境特論Ⅱ	1・2後		2			○			1					
	地球環境特論演習Ⅰ	1・2前		2				○		1					
	地球環境特論演習Ⅱ	1・2後		2				○		1					
	小計(9科目)	—	0	18	0	—	—	5	0	0	0	0	0	—	
生活環境学専修	環境教育特論	1・2前		2			○			1					
	環境教育特論演習	1・2後		2				○		1					
	環境アセスメント特論	1・2前		2			○			1					
	環境アセスメント特論演習	1・2後		2				○		1					
	環境政策特論	1・2前		2			○			1					
	環境政策特論演習	1・2後		2				○		1					
	環境思想史特論	1・2前		2			○							兼1	
	自然学校特論	1・2後		2				○						兼1	
	野外教育特論	1・2前		2			○							兼1	
小計(9科目)	—	0	18	0	—	—	3	0	0	0	0	0	兼2		

生活環境デザイン分野	衣生活材料特論	1・2前	2	○	○							兼1		
	衣生活材料特論演習	1・2後	2									兼1		
	生活環境機能学特論	1・2前	2	○			1							
	生活環境機能学特論演習	1・2後	2	○	○		1							
	被服管理学特論	1・2前	2	○	○			1						
	被服管理学特論演習	1・2後	2	○	○			1						
	住居学特論Ⅰ	1・2前	2	○			1							
	住居学特論Ⅱ	1・2後	2	○					1					
	住居学特論演習	1・2後	2	○	○		1							
	住環境特論	1・2前	2	○	○				1					
	住環境特論演習	1・2後	2	○	○				1					
	生活環境学特別講義	1・2後	2	○									兼1	
	小計（12科目）	—	0	24	0	—	2	2	1	0	0	0	兼2	—
基礎教育分野	児童発達臨床学基礎理論	1・2前	2	○								兼1		
	乳幼児発達臨床特論	1・2前	2	○			1							
	臨床教育学特論	1・2前	2	○			1							
	生涯発達心理学特論	1・2前	2	○				1						
	小計（4科目）	—	0	8	0	—	2	0	0	0	0	兼1	—	
児童発達臨床学専修	保育臨床特論	1・2前	2	○				1						
	乳幼児発達保育研究特論	1・2後	2	○			1							
	幼児教育実践演習	1・2後	2	○	○		1							
	学校教育実践研究特論	1・2後	2	○	○			1						
	小学校教育実践演習	1・2後	2	○	○			1						
	初等理科教育演習	1・2後	2	○	○			1						
	子育て・子育て支援演習	1・2後	2	○	○			1						
	学校保健学特論	1・2前	2	○			1							
	芸術教育研究特論	1・2前	2	○			1							
	特別支援教育研究特論	1・2前	2	○								兼1		
	子どもに関する公共政策論	1・2前	2	○								兼1		
	保育マネジメント特論	1・2後	2	○								兼1		
	保育アセスメント特論	1・2後	2	○								兼1		
	小計（13科目）	—	0	26	0	—	3	4	0	0	0	兼4	—	
心理・社会・文化分野	教育心理学特論	1・2後	2	○								兼1		
	臨床発達心理学演習	1・2後	2	○	○			1						
	子ども家庭福祉学特論	1・2前	2	○			1							
	社会学的臨床実践演習	1・2前	2	○	○		1							
	子ども史研究基礎演習	1・2前	2	○	○			1						
	音楽表現演習	1・2前	2	○	○		1							
	社会精神医学特論	1・2前	2	○								兼1		
小計（7科目）	—	0	14	0	—	3	2	0	0	0	兼2	—		
高度な専門性を目指す分野	インディペンデントスタディ	1・2後	2	○			5	1						
小計（1科目）	—	0	2	0	—	0	0	0	0	0	0	—		
研究指導	人間生活科学特別研究	1・2通	10		○		22	3						
	小計（1科目）	—	10	0	0	—	0	0	0	0	0	0	—	
合計（83科目）			—	10	##	0	—	28	10	1	0	0	兼12	—
学位又は称号	修士(生活科学)		学位又は専攻の分野				家政関係							

修了要件及び履修方法	授業期間等	
<p>(1) 修了要件</p> <p>修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士（生活科学）の学位を授与する。なお、試験の実施及び修士論文の審査等については、以下のとおりである。</p> <p>履修した授業科目については試験を実施する。試験は、筆記、口述又は研究報告等により授業担当者が行う。各授業科目の成績評価は、S(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)及びD(59点以下)をもって表し、S、A、B、Cを合格とし、Dを不合格とする。合格した授業科目に所定の単位を与える。</p> <p>修士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会の選出した審査委員が行う。審査委員は、指導教員を主査とし、これに当該論文に関連のある授業科目の担当教員2名以上を副査として加え、審査委員会を構成する。最終試験は所定の単位を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者に、修士論文及びこれに関連のある研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の標語をもって表す。審査委員会は、論文審査及び最終試験の結果に学位授与についての意見を付した審査報告書を研究科委員会に提出し、研究科委員会が学位授与の可否を判定する。</p>	1 学年の学期区分	2 学期
<p>(2) 履修方法及び研究指導</p> <p>学生の研究課題に対応した指導教員1名と関連分野を担当する副指導教員1名を入学時のガイダンスにおいて定める。指導教員及び副指導教員は、学生の学位取得に向けて、履修指導及び研究指導を担当する。履修指導にあたっては、学生の研究課題・学力・能力等に応じて、主となる専修の科目を中心に、基礎科目、共通科目の履修及び必要に応じて他専修、他専攻の科目の履修についても指導・助言を行う。学生は選択科目20単位以上と必修科目の人間生活科学特別研究10単位を履修することになる。</p> <p>研究指導は、授業科目の「人間生活科学特別研究」において、研究方法の確立、研究計画の立案、論文主題提示の方法、論文構成の仕方、発表方法等の指導を行い、研究者としての能力を養う。論文題目提出、題目変更届、論文提出の日程に合わせて指導するとともに、進捗状況を把握するために院生研究発表会の場を有効に活用する。この場では、研究主題、研究内容、研究方法などの妥当性や関連文献とのかかわりなどについて討議し、今後の研究への取り組みについての方向性を指導する。研究発表会の成果によっては、学内外の研究会や学会での発表を行わせ、学位論文の作成と学位取得、及び研究成果公開、学位論文の公開発表へと繋げていくことになる。</p>	1 学期の授業期間	1 5 週
<p>入学定員が12名に対して研究指導担当教員が25名いるため、入学から学位取得まで、きめ細かな指導を行うことが可能となる。</p> <p>修士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻の授業科目の履修を8単位まで認めるとともに、他大学院で修得した単位及び入学前の既修得単位についても、本学の大学院における授業科目の履修により修得したのものとして、合わせて10単位を超えない範囲で単位の認定を行うことができるものとする。</p> <p>また、社会人に対しては、大学院設置基準第14条の特例を適用し、土日夜間や長期休暇を利用し、授業・研究指導も実施するとともに長期履修生制度も利用できる。</p> <p>授業科目は千代田校地での開講が主であるが、多摩校地で開講する授業科目も一部開設する。学生及び教員に負担がかからないよう、多摩校地で開講する授業科目の開講曜日・時限、研究指導日を特定する等、授業時間割編成の際に配慮する。</p>	1 時限の授業時間	9 0 分

教 育 課 程 等 の 概 要

(人間文化研究科人間生活科学専攻(修士課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験	教授	准教授	講師	助教	助手			
基礎科目	Developing Critical Thinking Skills	1前		1			○								兼担1	
	Critical Reading and Writing	1前		1			○								兼担1	
	小計(2科目)	—	0	2	0		—		0	0	0	0	0	0	兼1	
共通科目	家族関係論	1・2前		2			○									
	ヒトと環境	1・2前		2			○		1							
	健康科学	1・2前		2			○		1							
	環境成長学	1・2後		2			○		1							
	生活情報論	1・2後		2			○		1							
	統計的調査方法論	1・2後		2			○		1							
	研究方法論Ⅰ(事例研究)	1・2前		2				○	2						オムニバス	
	研究方法論Ⅱ(フィールド研究)	1・2後		2				○	2						オムニバス	
	生涯学習の教育方法論	1・2前		2				○	1							
小計(9科目)	—	0	18	0		—		1	1	0	0	0	0	0	—	
健康・栄養科学専修	栄養化学分野	栄養生化学特論	1・2後		2		○		1							
		栄養生化学・細胞学実験	1・2後		1				2							オムニバス
		分子細胞学	1・2前		2			○		1						
		小計(3科目)	—	0	5	0		—		2	0	0	0	0	0	—
	食品・機能学分野	食品機能学特論	1・2前		2			○		1						
		材料機能学特論	1・2前		2			○		1						
		食生活安全学	1・2後		2			○		1						
		食品微生物学特論	1・2後		2			○		1						
		食品・機能学領域実験	1・2後		1					2						オムニバス
		小計(5科目)	—	0	9	0		—		3	0	0	0	0	0	—
	調理科学・食嗜好学分野	調理科学特論	1・2前		2			○		1						
		調理科学特論演習	1・2後		2				○	1						
		食嗜好学特論	1・2前		2				○	1						
		食嗜好学特論演習	1・2後		2					1						
	小計(4科目)	—	0	8	0		—		2	0	0	0	0	0	—	
医療・保健栄養学分野	病態・高齢者代謝学	1・2前		2			○		1							
	栄養疫学特論	1・2前		2			○			1						
	栄養疫学特論演習	1・2後		2				○		1						
	公衆衛生学特論	1・2前		2			○		1							
小計(4科目)	—	0	8	0		—		2	1	0	0	0	0	—		
生活環境学専修	環境サイエンス分野	生活環境特論	1・2前		2			○		1						
		生活環境特論演習	1・2後		2				○	1						
		小計(2科目)	—	0	4	0		—		1	0	0	0	0	0	—
	環境マネジメント分野	環境教育特論	1・2前		2			○		1						
		環境教育特論演習	1・2後		2				○	1						
		環境思想史特論	1・2前		2				○							兼1
		自然学校特論	1・2後		2				○							兼1
		野外教育特論	1・2前		2				○							兼1
	小計(5科目)	—	0	10	0		—		1	0	0	0	0	0	兼2	
	生活環境デザイン分野	衣生活材料特論	1・2前		2			○								兼1
		衣生活材料特論演習	1・2後		2				○							兼1
		生活環境機能学特論	1・2前		2			○		1						
		生活環境機能学特論演習	1・2後		2				○	1						
		被服管理学特論	1・2前		2				○		1					
		被服管理学特論演習	1・2後		2					1						
住環境特論		1・2前		2				○		1						
住環境特論演習		1・2後		2					1							
生活環境学特別講義	1・2後		2				○							兼1		
小計(9科目)	—	0	18	0		—		1	2	0	0	0	0	兼2		

児童発達臨床学専修	基礎教育分野	児童発達臨床学基礎理論	1・2前		2	○								兼1		
		乳幼児発達臨床特論	1・2前		2	○				1						
		臨床教育学特論	1・2前		2	○				1						
		生涯発達心理学特論	1・2前		2	○					1					
	小計（4科目）		—	0	8	0	—			2	0	0	0	0	兼1	—
	保育・教育分野	保育臨床特論	1・2前		2	○					1					
		乳幼児発達保育研究特論	1・2後		2	○				1						
		幼児教育実践演習	1・2後		2		○			1						
		学校教育実践研究特論	1・2後		2		○				1					
		小学校教育実践演習	1・2後		2		○				1					
		初等理科教育演習	1・2後		2		○				1					
		子育て・子育て支援演習	1・2後		2		○				1					
		学校保健学特論	1・2前		2		○			1						
		芸術教育研究特論	1・2前		2		○			1						
特別支援教育研究特論		1・2前		2		○								兼1		
子どもに関する公共政策論		1・2前		2		○								兼1		
保育マネジメント特論		1・2後		2		○								兼1		
保育アセスメント特論		1・2後		2		○								兼1		
小計（13科目）		—	0	26	0	—			3	4	0	0	0	兼4	—	
心理・社会・文化分野	教育心理学特論	1・2後		2	○									兼1		
	臨床発達心理学演習	1・2後		2		○				1						
	子ども家庭福祉学特論	1・2前		2		○			1							
	社会学的臨床実践演習	1・2前		2		○			1							
	子ども史研究基礎演習	1・2前		2		○				1						
	音楽表現演習	1・2前		2		○										
	社会精神医学特論	1・2前		2		○								兼1		
小計（7科目）		—	0	14	0	—			3	2	0	0	0	兼2	—	
高度な専門性を目指す分野	インディペンデントスタディ	1・2後		2		○			5	1						
	小計（1科目）		—	0	2	0	—		0	0	0	0	0	0	—	
研究指導	人間生活科学特別研究	1・2通	10				○		16	3						
	小計（1科目）		—	10	0	0	—		0	0	0	0	0	0	—	
合計（83科目）			—	10	##	0	—		21	10	0	0	0	兼12	—	
学位又は称号		修士(生活科学)			学位又は専攻の分野				家政関係							

修了要件及び履修方法	授業期間等	
<p>(1) 修了要件</p> <p>修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士（生活科学）の学位を授与する。なお、試験の実施及び修士論文の審査等については、以下のとおりである。</p> <p>履修した授業科目については試験を実施する。試験は、筆記、口述又は研究報告等により授業担当者が行う。各授業科目の成績評価は、S(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)及びD(59点以下)をもって表し、S、A、B、Cを合格とし、Dを不合格とする。合格した授業科目に所定の単位を与える。</p> <p>修士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会の選出した審査委員が行う。審査委員は、指導教員を主査とし、これに当該論文に関連のある授業科目の担当教員2名以上を副査として加え、審査委員会を構成する。最終試験は所定の単位を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者に、修士論文及びこれに関連のある研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の標語をもって表す。審査委員会は、論文審査及び最終試験の結果に学位授与についての意見を付した審査報告書を研究科委員会に提出し、研究科委員会が学位授与の可否を判定する。</p>	1 学年の学期区分	2 学期
<p>(2) 履修方法及び研究指導</p> <p>学生の研究課題に対応した指導教員1名と関連分野を担当する副指導教員1名を入学時のガイダンスにおいて定める。指導教員及び副指導教員は、学生の学位取得に向けて、履修指導及び研究指導を担当する。履修指導にあたっては、学生の研究課題・学力・能力等に応じて、主となる専修の科目を中心に、基礎科目、共通科目の履修及び必要に応じて他専修、他専攻の科目の履修についても指導・助言を行う。学生は選択科目20単位以上と必修科目の人間生活科学特別研究10単位を履修することになる。</p> <p>研究指導は、授業科目の「人間生活科学特別研究」において、研究方法の確立、研究計画の立案、論文主題提示の方法、論文構成の仕方、発表方法等の指導を行い、研究者としての能力を養う。論文題目提出、題目変更届、論文提出の日程に合わせて指導するとともに、進捗状況を把握するために院生研究発表会の場を有効に活用する。この場では、研究主題、研究内容、研究方法などの妥当性や関連文献とのかかわりなどについて討議し、今後の研究への取り組みについての方向性を指導する。研究発表会の成果によっては、学内外の研究会や学会での発表を行わせ、学位論文の作成と学位取得、及び研究成果公開、学位論文の公開発表へと繋げていくことになる。</p>	1 学期の授業期間	1 5 週
<p>入学定員が12名に対して研究指導担当教員が25名いるため、入学から学位取得まで、きめ細かな指導を行うことが可能となる。</p> <p>修士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻の授業科目の履修を8単位まで認めるとともに、他大学院で修得した単位及び入学前の既修得単位についても、本学の大学院における授業科目の履修により修得したのものとして、合わせて10単位を超えない範囲で単位の認定を行うことができるものとする。</p> <p>また、社会人に対しては、大学院設置基準第14条の特例を適用し、土日夜間や長期休暇を利用し、授業・研究指導も実施するとともに長期履修生制度も利用できる。</p> <p>授業科目は千代田校地での開講が主であるが、多摩校地で開講する授業科目も一部開設する。学生及び教員に負担がかからないよう、多摩校地で開講する授業科目の開講曜日・時限、研究指導日を特定する等、授業時間割編成の際に配慮する。</p>	1 時限の授業時間	9 0 分

教育課程等の概要															
(人間文化研究科人間生活科学専攻(修士課程))															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験	教授	准教授	講師	助教	助手		
生活環境学専修	環境サイエンス分野	生命環境特論	1・2前		2		○			1					
		生命環境特論演習	1・2後		2			○		1					
		環境衛生学特論	1・2前		2		○			1					
		地球環境特論Ⅰ	1・2前		2		○			1					
		地球環境特論Ⅱ	1・2後		2		○			1					
		地球環境特論演習Ⅰ	1・2前		2			○		1					
		地球環境特論演習Ⅱ	1・2後		2			○		1					
	小計(7科目)	—	0	14	0		—		4	0	0	0	0	0	—
	環境マネジメント分野	環境アセスメント特論	1・2前		2		○			1					
		環境アセスメント特論演習	1・2後		2			○		1					
環境政策特論		1・2前		2		○			1						
環境政策特論演習		1・2後		2			○		1						
小計(4科目)	—	0	8	0		—		2	0	0	0	0	0	—	
生活環境デザイン分野	住居学特論Ⅰ	1・2前		2		○			1						
	住居学特論Ⅱ	1・2後		2		○				1					
	住居学特論演習	1・2後		2			○		1						
	小計(3科目)	—	0	6	0		—		1	0	1	0	0	0	—
研究指導	人間生活科学特別研究	1・2通	10				○		6						
	小計(1科目)	—	10	0	0		—		0	0	0	0	0	0	—
合計(15科目)		—	10	28	0		—		7	0	1	0	0	0	—
学位又は称号	修士(生活科学)	学位又は専攻の分野			家政関係										

修了要件及び履修方法	授業期間等	
<p>(1) 修了要件</p> <p>修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士（生活科学）の学位を授与する。なお、試験の実施及び修士論文の審査等については、以下のとおりである。</p> <p>履修した授業科目については試験を実施する。試験は、筆記、口述又は研究報告等により授業担当者が行う。各授業科目の成績評価は、S(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)及びD(59点以下)をもって表し、S、A、B、Cを合格とし、Dを不合格とする。合格した授業科目に所定の単位を与える。</p> <p>修士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会の選出した審査委員が行う。審査委員は、指導教員を主査とし、これに当該論文に関連のある授業科目の担当教員2名以上を副査として加え、審査委員会を構成する。最終試験は所定の単位を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者に、修士論文及びこれに関連のある研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の標語をもって表す。審査委員会は、論文審査及び最終試験の結果に学位授与についての意見を付した審査報告書を研究科委員会に提出し、研究科委員会が学位授与の可否を判定する。</p>	1 学年の学期区分	2 学期
<p>(2) 履修方法及び研究指導</p> <p>学生の研究課題に対応した指導教員1名と関連分野を担当する副指導教員1名を入学時のガイダンスにおいて定める。指導教員及び副指導教員は、学生の学位取得に向けて、履修指導及び研究指導を担当する。履修指導にあたっては、学生の研究課題・学力・能力等に応じて、主となる専修の科目を中心に、基礎科目、共通科目の履修及び必要に応じて他専修、他専攻の科目の履修についても指導・助言を行う。学生は選択科目20単位以上と必修科目の人間生活科学特別研究10単位を履修することになる。</p> <p>研究指導は、授業科目の「人間生活科学特別研究」において、研究方法の確立、研究計画の立案、論文主題提示の方法、論文構成の仕方、発表方法等の指導を行い、研究者としての能力を養う。論文題目提出、題目変更届、論文提出の日程に合わせて指導するとともに、進捗状況を把握するために院生研究発表会の場を有効に活用する。この場では、研究主題、研究内容、研究方法などの妥当性や関連文献とのかかわりなどについて討議し、今後の研究への取り組みについての方向性を指導する。研究発表会の成果によっては、学内外の研究会や学会での発表を行わせ、学位論文の作成と学位取得、及び研究成果公開、学位論文の公開発表へと繋げていくことになる。</p>	1 学期の授業期間	1 5 週
<p>入学定員が12名に対して研究指導担当教員が25名いるため、入学から学位取得まで、きめ細かな指導を行うことが可能となる。</p> <p>修士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻の授業科目の履修を8単位まで認めるとともに、他大学院で修得した単位及び入学前の既修得単位についても、本学の大学院における授業科目の履修により修得したのものとして、合わせて10単位を超えない範囲で単位の認定を行うことができるものとする。</p> <p>また、社会人に対しては、大学院設置基準第14条の特例を適用し、土日夜間や長期休暇を利用し、授業・研究指導も実施するとともに長期履修生制度も利用できる。</p> <p>授業科目は千代田校地での開講が主であるが、多摩校地で開講する授業科目も一部開設する。学生及び教員に負担がかからないよう、多摩校地で開講する授業科目の開講曜日・時限、研究指導日を特定する等、授業時間割編成の際に配慮する。</p>	1 時限の授業時間	9 0 分

教 育 課 程 等 の 概 要

設置する研究科等の学位等と同じ分野の学位を授与している既設の研究科等
(家政学研究科被服学専攻(修士課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
被服材料学分野	衣生活材料学特論	1・2前		2		○								兼1	集中
	衣生活材料学特論演習	1・2後		1			○							兼1	集中
	衣生活材料学特論実験	1・2前		1				○						兼1	集中
	繊維科学特論	1・2後		2		○								兼1	
	繊維科学特論演習	1・2後		1			○							兼1	
	繊維構造特論	1・2後		2		○								兼1	集中
	小計(6科目)	—	0	9	0	—	—	—	0	0	0	0	0	兼3	—
被服管理学分野	被服管理学特論	1・2前		2		○				1					
	被服管理学特論演習	1・2後		1			○			1					
	被服管理学特論実験	1・2前		1				○		1					
	機能材料学特論	1・2前		2		○			1						
	機能材料学特論演習	1・2前		1			○		1						
	機能材料学特論実験	1・2後		1				○	1						
	高分子物性特論	1・2前		2		○								兼1	
	小計(7科目)	—	0	10	0	—	—	—	1	1	0	0	0	兼1	—
被服意匠学分野	衣生活環境機能学特論	1・2前		2		○			1						
	衣生活環境機能学特論演習	1・2後		1			○		1						
	衣生活環境機能学特論実験	1・2前		1				○	1						
	服飾文化史特論	1・2後		2		○								兼1	
	服飾文化史特論演習	1・2後		1			○							兼1	
	服飾美学特論	1・2前		2		○								兼1	
	衣生活情報特論	1・2前		2		○								兼1	
	小計(7科目)	—	0	11	0	—	—	—	1	0	0	0	0	兼3	—
被服構成学分野	被服造形学特論	1・2前		2		○								兼1	集中
	被服造形学特論演習	1・2前		1			○							兼1	集中
	生体学特論	1・2前		2		○			1						
	生体学特論演習	1・2後		1			○		1						
	生体学特論実験	1・2後		1				○	1						
	小計(5科目)	—	0	7	0	—	—	—	1	0	0	0	0	兼1	—
その他	被服整理学特論	1・2後		2		○								兼1	
	被服学特別講義	1・2後		2		○								兼1	
	小計(2科目)	—	0	4	0	—	—	—	0	0	0	0	0	兼1	—
関連分野	家庭経営学特論	1・2後		2		○								兼1	
	家族関係特論	1・2前		2			○							兼担1	
	地球環境特論	1・2後		2				○						兼担1	
	資源経済特論	1・2前		2		○								兼1	
	生活情報特論	1・2前		2			○		1						
	生物統計学特論	1・2前		2				○	1						
	生物統計学特論演習	1・2後		1			○		1						
	環境教育特論	1・2前		2				○	1						
	ヒトと環境	1・2前		2		○			1						
	小計(9科目)	—	0	17	0	—	—	—	4	0	0	0	0	兼4	—
特別研究	被服学特別研究	1・2通	10					○	7	1					
	小計(1科目)	—	10	0	0	—	—	—	0	0	0	0	0	0	—
合計(37科目)		—	10	54	0	—	—	—	7	1	0	0	0	兼13	—
学位又は称号	修士(家政学)		学位又は専攻の分野			家政関係									
修了要件及び履修方法										授業期間等					
修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士(家政学)の学位を授与する。										1学年の学期区分2学期 1学期の授業期間15週 1時限の授業時間90分					

教 育 課 程 等 の 概 要

設置する研究科等の学位等と同じ分野の学位を授与している既設の研究科等
(家政学研究科食物学専攻(修士課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
食品学分野	食品機能特論	1・2前		2		○			1						
	食品機能特論演習	1・2後		1			○		1						
	食品加工保藏学特論	1・2前		2		○			1						
	食品加工保藏学特論演習	1・2後		1			○		1						
	食品微生物学特論	1・2前		2		○			1						
	食品微生物学特論演習	1・2後		1			○		1						
	食品微生物学特論実験	1・2後		1				○	1						
	食品生化学特論	1・2前		2		○			1						
	食品生化学特論演習	1・2後		1			○		1						
小計(9科目)	—	—	0	13	0	—	—	—	3	0	0	0	0	0	—
調理学分野	調理学特論Ⅰ	1・2後		2		○			1						
	調理学特論Ⅰ演習	1・2後		1			○		1						
	調理学特論Ⅰ実験	1・2後		1				○	1						
	調理学特論Ⅱ	1・2前		2		○			1						
小計(4科目)	—	—	0	6	0	—	—	2	0	0	0	0	0	—	
栄養学分野	栄養生化学特論	1・2前		2		○			1						
	栄養生化学特論演習	1・2後		1			○		1						
	食品栄養学特論	1・2前		2		○			1						
	食品栄養学特論実験	1・2後		1				○	1						
	栄養生理学特論	1・2前		2		○			1						
	病態栄養学特論	1・2前		2		○			1						
	公衆栄養学特論	1・2前		2		○				1					
	公衆栄養学特論演習	1・2後		1			○			1					
小計(8科目)	—	—	0	13	0	—	—	4	1	0	0	0	0	—	
その他	生物化学特論	1・2前		2		○			1						
	健康科学特論	1・2後		2		○			1						
	食物学特別講義Ⅰ	1・2前		2		○								兼1	
	食物学特別講義Ⅱ	1・2前		2		○								兼1	
小計(4科目)	—	—	0	8	0	—	—	2	0	0	0	0	兼1	—	
関連分野	家庭経営学特論	1・2後		2		○				1				兼1	
	家族関係特論	1・2前		2			○			1					
	地球環境特論	1・2後		2				○		1					
	資源経済特論	1・2前		2		○			1						
	生活情報特論	1・2前		2			○							兼担1	
	生物統計学特論	1・2前		2				○						兼担1	
	生物統計学特論演習	1・2後		1		○								兼担1	
	環境教育特論	1・2前		2				○						兼担1	
	ヒトと環境	1・2前		2		○								兼担1	
小計(9科目)	—	—	0	17	0	—	—	2	1	0	0	0	兼5	—	
特別研究	食物学特別研究	1・2通		10				○	11	1					
	小計(1科目)	—	—	10	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	—
合計(35科目)		—	—	10	57	0	—	—	13	2	0	0	0	兼6	—
学位又は称号	修士(家政学)	学位又は専攻の分野	家政関係												
修了要件及び履修方法										授業期間等					
修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士(家政学)の学位を授与する。										1学年の学期区分2学期 1学期の授業期間1.5週 1時限の授業時間90分					

教 育 課 程 等 の 概 要

設置する研究科等の学位等と同じ分野の学位を授与している既設の研究科等
(家政学研究科児童学専攻(修士課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
児童発達分野	生涯発達心理学特論	1・2前		2		○			1					兼1		
	乳幼児保育方法論	1・2後		2		○										
	乳幼児教育学特論	1・2後		2		○			1							
	幼児教育実践演習	1・2前		2			○		1							
	学校教育実践学特論	1・2後		2		○				1						
	児童学研究法特論	1・2前		2		○				1						
	小学校教育実践演習Ⅰ	1・2前		2			○			1						
	小学校教育実践演習Ⅱ	1・2後		2			○			1						
	発達心理学特論	1・2後		2		○								兼1		
小計(9科目)	—		0	18	0	—	—	2	2	0	0	0	0	兼2	—	
児童文化分野	児童生活・文化演習	1・2前		2			○			1						
	教材文化心理学	1・2後		2		○			1							
	芸術教育論演習	1・2前		2			○		1							
	小計(3科目)	—		0	6	0	—	—	2	1	0	0	0	0	—	
児童臨床分野	保育臨床学特論	1・2前		2		○				1						
	学校保健学特論	1・2前		2		○								兼担1		
	社会学的臨床実践演習	1・2後		2			○		1							
	臨床発達心理学演習	1・2前		2			○			1						
小計(4科目)	—		0	8	0	—	—	0	2	0	0	0	0	兼1	—	
家族福祉分野	子ども家庭福祉学特論	1・2前		2		○			1							
	児童精神医学特論	1・2後		2		○								兼1		
	小計(2科目)	—		0	4	0	—	—	1	0	0	0	0	0	兼1	—
その他	児童学特別講義Ⅰ	1・2前		2		○				1						
	児童学特別講義Ⅱ	1・2通		2		○								兼1	集中	
	小計(2科目)	—		0	4	0	—	—	0	1	0	0	0	0	兼1	—
関連分野	家庭経営学特論	1・2後		2		○								兼1		
	家族関係特論	1・2前		2			○							兼担1		
	地球環境特論	1・2後		2				○						兼担1		
	資源経済特論	1・2前		2		○								兼担1		
	生活情報特論	1・2前		2			○							兼担1		
	生物統計学特論	1・2前		2				○						兼担1		
	生物統計学特論演習	1・2後		1		○								兼担1		
	環境教育特論	1・2前		2				○						兼担1		
	ヒトと環境	1・2前		2		○								兼担1		
小計(9科目)	—		0	17	0	—	—	0	0	0	0	0	0	兼8	—	
特別研究	児童学特別研究	1・2通		10			○		5	0						
	小計(1科目)	—		10	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	—	
合計(30科目)		—		10	57	0	—	—	5	6	0	0	0	0	兼13	—
学位又は称号	修士(家政学)		学位又は専攻の分野			家政関係										
修了要件及び履修方法										授業期間等						
修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士(家政学)の学位を授与する。										1学年の学期区分2学期						
										1学期の授業期間15週						
										1時限の授業時間90分						

様式2号(その2の1)

教育課程等の概要															
(人間文化研究科言語文化専攻(修士課程))															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
基礎科目	Developing Critical Thinking Skills	1前		1			○							兼担1	
	Critical Reading and Writing	1前		1			○							兼担1	
	Fundamentals of Reading I	1前		2			○		1						
	Fundamentals of Reading II	1後		2			○		1						
	Academic Writing I	1前		2			○					1			
	Academic Writing II	1後		2			○					1			
	Professional English	1・2後		2			○							兼1	
	日本文学研究方法論	1前		2			○				1				
	日本文学基礎演習	1後		2			○		1						
国際文化研究法	1前・後		2			○		1	1						
小計(10科目)		-	0	18	0		-	2	0	1	1	0	兼2	-	
共通科目	翻訳技術論	1・2前		2			○		1						
	児童文学論	1・2後		2			○		1						
	比較文学	1・2前		2			○		1						
	草稿・テキスト学	1・2後		2			○		1						
	文学と教育	1・2前		2			○				1				
小計(5科目)		-	0	10	0	-	3	0	0	0	0	0	-		
日本文学専修	古典文学分野	古代文学演習 I	1・2前	2			○		1						
		古代文学演習 II	1・2後	2			○		1						
		古代文学講義 I	1・2前	2			○		1						
		古代文学講義 II	1・2後	2			○		1						
		中世文学演習 I	1・2前	2			○	○	1						隔年開講
		中世文学演習 II	1・2後	2			○	○	1						隔年開講
		中世文学講義 I	1・2前	2			○		1						隔年開講
		中世文学講義 II	1・2後	2			○		1						隔年開講
		近世文学演習 I	1・2前	2			○	○	1						隔年開講
		近世文学演習 II	1・2後	2			○	○	1						隔年開講
		近世文学講義 I	1・2前	2			○		1						隔年開講
		近世文学講義 II	1・2後	2			○		1						隔年開講
	小計(12科目)		-	0	24	0	-	4	0	0	0	0	0	-	
	近代文学分野	近代文学演習 I	1・2前		2			○		1					
近代文学演習 II		1・2後		2			○		1						
近代文学講義 I		1・2前		2			○		1						
近代文学講義 II		1・2後		2			○				1				
現代文学講義 I		1・2前		2			○				1				
現代文学講義 II		1・2後		2			○				1				
小計(6科目)		-	0	12	0	-	2	0	1	0	0	0	-		
日本語学分野	日本語学演習 I	1・2前		2			○		1					隔年開講	
	日本語学演習 II	1・2後		2			○		1					隔年開講	
	日本語学講義 I	1・2前		2			○		1					隔年開講	
	日本語学講義 II	1・2後		2			○		1					隔年開講	
小計(4科目)		-	0	8	0	-	1	0	0	0	0	0	-		
関連分野	語学文学特論 I	1・2前		2			○						兼1		
	語学文学特論 II	1・2後		2			○						兼1		
	中国文学特論 I	1・2前		2			○		1						
	中国文学特論 II	1・2後		2			○		1						
小計(4科目)		-	0	8	0	-	1	0	0	0	0	兼1	-		

英語文学分野	文学と理論 (作者・テキスト・読者)	1・2前	2	○			1									
	文学と制度 (ジャンル・クラス・マイノリティ)	1・2後	2	○			1									
	文学と自然 (風土・人種・母語)	1・2前	2	○			1									
	英米詩	1・2後	2		○		1									
	英米小説Ⅰ	1・2前	2		○		1									
	英米小説Ⅱ	1・2後	2		○		1									
	英米演劇Ⅰ	1・2前	2		○		1									
	英米演劇Ⅱ	1・2後	2		○		1									
	英米散文	1・2後	2		○		1									
	小計 (9科目)	-	0	18	0	-	4	0	0	0	0	0	0	0	0	-
英語文学・英語教育専修	英語教授法研究	1・2前	2	○			1									
	英語教育リサーチ方法	1・2後	2	○			1									
	スピーキング・ライティング指導演習	1・2前	2		○		1									隔年開講
	リーディング・リスニング指導演習	1・2後	2		○		1									隔年開講
	児童英語教育方法	1・2前	2		○								兼担1			隔年開講
	児童英語コミュニケーション演習	1・2後	2		○								兼担1			隔年開講
	児童英語カリキュラム研究	1・2前	2		○								兼担1			隔年開講
	児童英語教材演習	1・2後	2		○								兼担1			隔年開講
小計 (8科目)	-	0	16	0	-	1	0	0	0	0	0	0	0	0	-	
英語学分野	英語の構造	1・2前	2	○			1									
	英語の意味	1・2後	2	○			1									隔年開講
	英語の音声	1・2前	2	○			1									
	発話の機能	1・2後	2	○			1									隔年開講
	語法文法研究	1・2前	2		○		1									
	談話分析研究	1・2後	2		○		1									
	コーパス言語学	1・2前	2		○		1									隔年開講
	テキスト言語学	1・2後	2		○		1									隔年開講
小計 (8科目)	-	0	16	0	-	2	0	0	0	0	0	0	0	0	-	
国際文化専修	アジア文化演習 (中国)Ⅰ	1・2前	2		○		2									
	アジア文化演習 (中国)Ⅱ	1・2後	2		○		2									
	アジア文化演習 (朝鮮半島)Ⅰ	1・2前	2		○					1						
	アジア文化演習 (朝鮮半島)Ⅱ	1・2後	2		○					1						
	太平洋文化演習Ⅰ	1・2前	2		○		1									
	太平洋文化演習Ⅱ	1・2後	2		○		1									
	ヨーロッパ文化演習 (イギリス)Ⅰ	1・2前	2		○		2									
	ヨーロッパ文化演習 (イギリス)Ⅱ	1・2後	2		○		2									
	ヨーロッパ文化演習 (フランス)Ⅰ	1・2前	2		○		1									
	ヨーロッパ文化演習 (フランス)Ⅱ	1・2後	2		○		1									
	ヨーロッパ文化演習 (ドイツ)Ⅰ	1・2前	2		○		1									
	ヨーロッパ文化演習 (ドイツ)Ⅱ	1・2後	2		○		1									
	ヨーロッパ文化演習 (東中欧・ロシア)Ⅰ	1・2前	2		○		1									
	ヨーロッパ文化演習 (東中欧・ロシア)Ⅱ	1・2後	2		○		1									
	アメリカ文化演習Ⅰ	1・2前	2		○						2					
	アメリカ文化演習Ⅱ	1・2後	2		○						2					
小計 (16科目)	-	0	32	0	-	4	3	0	0	0	0	0	0	0	-	
国際分野	国際交渉論	1・2前	2	○			1									
	国際教育論	1・2後	2	○			1									
	国際関係論	1・2前	2	○						1						
	国際交流論	1・2前・後	2	○			2									
	比較社会論	1・2前・後	2	○			2									
	比較思想論	1・2後	2	○			1									
	比較文化論	1・2前	2	○			1									
小計 (7科目)	-	0	14	0	-	5	0	0	1	0	0	0	0	-		
関連分野	民族共生論	1・2後	2	○			1	1								
	言語文化論	1・2前	2	○			1									
	表象文化論	1・2後	2	○			1									
小計 (3科目)	-	0	6	0	-	1	0	0	0	0	0	0	0	-		
研究指導	言語文化学特別研究	1・2通	8		○	29										
小計 (1科目)	-	8	0	0	-	0	0	0	0	0	0	0	0	-		
合計 (93科目)			-	8	182	0	-	30	3	2	2	0	兼3			
学位又は称号	修士 (文学)	学位又は専攻の分野	文学関係													

修了要件及び履修方法	授業期間等	
<p>(1)修了要件 修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士（文学）の学位を授与する。なお、試験の実施及び修士論文の審査等については、以下のとおりである。</p> <p>履修した授業科目については試験を実施する。試験は、筆記、口述又は研究報告等により授業担当者が行う。各授業科目の成績評価は、S(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)及びD(59点以下)をもって表し、S、A、B、Cを合格とし、Dを不合格とする。合格した授業科目に所定の単位を与える。</p> <p>修士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会の選出した審査委員が行う。審査委員は、指導教員を主査とし、これに当該論文に関連のある授業科目の担当教員2名以上を副査として加え、審査委員会を構成する。最終試験は所定の単位を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者に、修士論文及びこれに関連のある研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の標語をもって表す。審査委員会は、論文審査及び最終試験の結果に学位授与についての意見を付した審査報告書を研究科委員会に提出し、研究科委員会が学位授与の可否を判定する。</p>	1 学年の学期区分	2 学期
<p>(2)履修方法及び研究指導 学生の研究課題に対応した指導教員1名と関連分野を担当する副指導教員1名を入学時のガイダンスにおいて定める。指導教員及び副指導教員は、学生の学位取得に向けて、履修指導及び研究指導を担当する。履修指導にあたっては、学生の研究課題・学力・能力等に応じて、主となる専修の科目を中心に、基礎科目、共通科目の履修及び必要に応じて他専修、他専攻の科目の履修についても指導・助言を行う。学生は選択科目22単位以上と必修科目の言語文化学特別研究8単位を履修することになる。</p> <p>研究指導は、授業科目の「言語文化学特別研究」において、研究方法の確立、研究計画の立案、論文主題提示の方法、論文構成の仕方、発表方法等の指導を行い、研究者としての能力を養う。論文題目提出、題目変更届、論文提出の日程に合わせて指導するとともに、進捗状況を把握するために院生研究発表会の場を有効に活用する。この場では、研究主題、研究内容、研究方法などの妥当性や関連文献とのかかわりなどを討議し、今後の研究への取り組みについての方向性を指導する。研究発表会の成果によっては、学内外の研究会や学会での発表を行わせ、学位論文の作成と学位取得、及び研究成果公開、学位論文の公开发表へと繋げていくことになる。</p>	1 学期の授業期間	1 5 週
<p>入学定員が8名と少人数に対して、研究指導担当教員が29名いるため、入学から学位取得まで、きめ細かな指導を行うことが可能となる。</p> <p>修士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻の授業科目の履修を8単位まで認めるとともに、他大学院で修得した単位及び入学前の既修得単位についても、本学の大学院における授業科目の履修により修得したものととして、合わせて10単位を超えない範囲で単位の認定を行うことができるものとする。</p> <p>授業科目は千代田校地での開講が主であるが、千代田校地及び多摩校地で同時に開講する授業科目、多摩校地のみで開講する授業科目も一部開設する。学生及び教員に負担がかからないよう、多摩校地で開講する授業科目の開講曜日、研究指導日を特定する等、授業時間割編成の際に配慮する。</p>	1 時限の授業時間	9 0 分

教育課程等の概要

(人間文化研究科言語文化学専攻(修士課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
基礎科目	Developing Critical Thinking Skills	1前		1			○								兼担1	
	Critical Reading and Writing	1前		1			○								兼担1	
	Fundamentals of Reading I	1前		2			○		1							
	Fundamentals of Reading II	1後		2			○		1							
	Academic Writing I	1前		2			○					1				
	Academic Writing II	1後		2			○					1				
	Professional English	1・2後		2			○								兼1	
	日本文学研究方法論	1前		2			○				1					
	日本文学基礎演習	1後		2			○		1							
国際文化研究法	1後		2			○				1						
小計(10科目)		-	0	18	0		-	1	0	1	1	0	0	兼2		
共通科目	翻訳技術論	1・2前		2			○		1							
	児童文学論	1・2後		2			○		1							
	草稿・テキスト学	1・2後		2			○		1							
	文学と教育	1・2前		2			○				1					
小計(4科目)		-	0	8	0		-	2	0	0	0	0	0			
日本文学専修	古典文学分野	古代文学演習 I	1・2前	2			○		1							
		古代文学演習 II	1・2後	2			○		1							
		古代文学講義 I	1・2前	2			○		1							
		古代文学講義 II	1・2後	2			○		1							
		中世文学演習 I	1・2前	2			○		1							隔年開講
		中世文学演習 II	1・2後	2			○		1							隔年開講
		中世文学講義 I	1・2前	2			○		1							隔年開講
		中世文学講義 II	1・2後	2			○		1							隔年開講
		近世文学演習 I	1・2前	2			○		1							隔年開講
		近世文学演習 II	1・2後	2			○		1							隔年開講
		近世文学講義 I	1・2前	2			○		1							隔年開講
		近世文学講義 II	1・2後	2			○		1							隔年開講
	小計(12科目)		-	0	24	0		-	4	0	0	0	0	0		
	近代文学分野	近代文学演習 I	1・2前		2			○		1						
		近代文学演習 II	1・2後		2			○		1						
		近代文学講義 I	1・2前		2			○		1						
		近代文学講義 II	1・2後		2			○		1						
		現代文学講義 I	1・2前		2			○				1				
		現代文学講義 II	1・2後		2			○				1				
小計(6科目)		-	0	12	0		-	2	0	1	0	0	0			
日本語学分野	日本語学演習 I	1・2前		2			○		1							
	日本語学演習 II	1・2後		2			○		1							
	日本語学講義 I	1・2前		2			○		1							
	日本語学講義 II	1・2後		2			○		1							
	小計(4科目)		-	0	8	0		-	1	0	0	0	0	0		
関連分野	語学文学特論 I	1・2前		2			○							兼1		
	語学文学特論 II	1・2後		2			○							兼1		
	中国文学特論 I	1・2前		2			○		1							
	中国文学特論 II	1・2後		2			○		1							
小計(4科目)		-	0	8	0		-	1	0	0	0	0	0	兼1		
英語文学分野	文学と理論(作者・テキスト・読者)	1・2前		2			○		1							
	文学と制度(ジェンダー・クラス・マイノリティ)	1・2後		2			○		1							
	文学と自然(風土・人種・母語)	1・2前		2			○		1							
	英米詩	1・2後		2			○		1							
	英米小説 I	1・2前		2			○		1							
	英米小説 II	1・2後		2			○		1							
	英米演劇 I	1・2前		2			○		1							
	英米演劇 II	1・2後		2			○		1							
	英米散文	1・2後		2			○		1							
小計(9科目)		-	0	18	0		-	4	0	0	0	0	0			

英語文学・英語教育分野	英語教授法研究	1・2前	2	○		1												
	英語教育リサーチ方法	1・2後	2	○		1												
	スピーキング・ライティング指導演習	1・2前	2			1												
	リーディング・リスニング指導演習	1・2後	2		○	1												
	児童英語教育方法	1・2前	2		○													兼任1
	児童英語コミュニケーション演習	1・2後	2		○													
	児童英語カリキュラム研究	1・2前	2		○													兼任1
	児童英語教材演習	1・2後	2		○													兼任1
小計(8科目)	—	0	16	0	—	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	—
英語学分野	英語の構造	1・2前	2	○		1												
	英語の意味	1・2後	2	○		1												
	英語の音声	1・2前	2	○		1												
	発話の機能	1・2後	2	○		1												
	語法文法研究	1・2前	2		○	1												
	談話分析研究	1・2後	2		○	1												
	コーパス言語学	1・2前	2		○	1												隔年開講
	テキスト言語学	1・2後	2		○	1												隔年開講
小計(8科目)	—	0	16	0	—	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
国際文化分野	アジア文化演習(中国)Ⅰ	1・2前	2			1												
	アジア文化演習(中国)Ⅱ	1・2後	2		○	1												
	アジア文化演習(朝鮮半島)Ⅰ	1・2前	2		○													
	アジア文化演習(朝鮮半島)Ⅱ	1・2後	2		○													
	太平洋文化演習Ⅰ	1・2前	2		○	1												
	太平洋文化演習Ⅱ	1・2後	2		○	1												
	ヨーロッパ文化演習(イギリス)Ⅰ	1・2前	2		○	1												
	ヨーロッパ文化演習(イギリス)Ⅱ	1・2後	2		○	1												
	ヨーロッパ文化演習(東中欧・ロシア)Ⅰ	1・2前	2		○	1												
	ヨーロッパ文化演習(東中欧・ロシア)Ⅱ	1・2後	2		○	1												
	アメリカ文化演習Ⅰ	1・2前	2		○													
	アメリカ文化演習Ⅱ	1・2後	2		○													
	小計(12科目)	—	0	24	0	—	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国際分野	国際交渉論	1・2前	2	○		1												
	国際教育論	1・2後	2	○		1												
	国際関係論	1・2前	2	○														
	国際交流論	1・2前・後	2	○		1												
	比較社会論	1・2前・後	2	○		1												
小計(5科目)	—	0	10	0	—	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
研究指導	言語文化学特別研究	1・2通	8		○	21												
	小計(1科目)	—	8	0	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計(83科目)		—	8	162	0	—	22	1	2	2	0	兼3						
学位又は称号	修士(文学)		学位又は専攻の分野			文学関係												

修了要件及び履修方法		授業期間等		
<p>(1)修了要件</p> <p>修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士（文学）の学位を授与する。なお、試験の実施及び修士論文の審査等については、以下のとおりである。</p> <p>履修した授業科目については試験を実施する。試験は、筆記、口述又は研究報告等により授業担当者が行う。各授業科目の成績評価は、S(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)及びD(59点以下)をもって表し、S、A、B、Cを合格とし、Dを不合格とする。合格した授業科目に所定の単位を与える。</p> <p>修士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会の選出した審査委員が行う。審査委員は、指導教員を主査とし、これに当該論文に関連のある授業科目の担当教員2名以上を副査として加え、審査委員会を構成する。最終試験は所定の単位を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者に、修士論文及びこれに関連のある研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の標語をもって表す。審査委員会は、論文審査及び最終試験の結果に学位授与についての意見を付した審査報告書を研究科委員会に提出し、研究科委員会が学位授与の可否を判定する。</p> <p>(2)履修方法及び研究指導</p> <p>学生の研究課題に対応した指導教員1名と関連分野を担当する副指導教員1名を入学時のガイダンスにおいて定める。指導教員及び副指導教員は、学生の学位取得に向けて、履修指導及び研究指導を担当する。履修指導にあたっては、学生の研究課題・学力・能力等に応じて、主となる専修の科目を中心に、基礎科目、共通科目の履修及び必要に応じて他専修、他専攻の科目の履修についても指導・助言を行う。学生は選択科目22単位以上と必修科目の言語文化学特別研究8単位を履修することになる。</p> <p>研究指導は、授業科目の「言語文化学特別研究」において、研究方法の確立、研究計画の立案、論文主題提示の方法、論文構成の仕方、発表方法等の指導を行い、研究者としての能力を養う。論文題目提出、題目変更届、論文提出の日程に合わせて指導するとともに、進捗状況を把握するために院生研究発表会の場を有効に活用する。この場では、研究主題、研究内容、研究方法などの妥当性や関連文献とのかかわりなどを討議し、今後の研究への取り組みについての方向性を指導する。研究発表会の成果によっては、学内外の研究会や学会での発表を行わせ、学位論文の作成と学位取得、及び研究成果公開、学位論文の公开发表へと繋げていくことになる。</p> <p>入学定員が8名と少人数に対して、研究指導担当教員が29名いるため、入学から学位取得まで、きめ細かな指導を行うことが可能となる。</p> <p>修士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻の授業科目の履修を8単位まで認めるとともに、他大学院で修得した単位及び入学前の既修得単位についても、本学の大学院における授業科目の履修により修得したものと、合わせて10単位を超えない範囲で単位の認定を行うことができるものとする。</p> <p>授業科目は千代田校地での開講が主であるが、千代田校地及び多摩校地で同時に開講する授業科目、多摩校地のみで開講する授業科目も一部開設する。学生及び教員に負担がかからないよう、多摩校地で開講する授業科目の開講曜日、研究指導日を特定する等、授業時間割編成の際に配慮する。</p>	1 学年の学期区分	2 学期		
	1 学期の授業期間	1 5 週		
	1 時限の授業時間	9 0 分		

教育課程等の概要															
(人間文化研究科言語文化学専攻(修士課程))															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
基礎科目	国際文化研究法	1前		2		○			1						
	小計(1科目)	-	0	2	0	-			1	0	0	0	0	0	-
共通科目	比較文学	1・2前		2		○			1						
	小計(1科目)	-	0	2	0	-			1	0	0	0	0	0	-
国際文化専修	地域文化分野	アジア文化演習(中国)Ⅰ	1・2前	2			○		1						
		アジア文化演習(中国)Ⅱ	1・2後	2			○		1						
		ヨーロッパ文化演習(イギリス)Ⅰ	1・2前	2			○		1						
		ヨーロッパ文化演習(イギリス)Ⅱ	1・2後	2			○		1						
		ヨーロッパ文化演習(フランス)Ⅰ	1・2前	2			○		1						
		ヨーロッパ文化演習(フランス)Ⅱ	1・2後	2			○		1						
		ヨーロッパ文化演習(ドイツ)Ⅰ	1・2前	2			○		1						
		ヨーロッパ文化演習(ドイツ)Ⅱ	1・2後	2			○		1						
		アメリカ文化演習Ⅰ	1・2前	2			○			1					
		アメリカ文化演習Ⅱ	1・2後	2			○			1					
	小計(10科目)	-	0	20	0	-			3	2	0	0	0	0	-
	国際分野	国際交流論	1・2前・後		2		○			1					
		比較社会論	1・2前・後		2		○			1					
		比較思想論	1・2後		2		○			1					
比較文化論		1・2前		2		○			1						
小計(4科目)	-	0	8	0	-			2	0	0	0	0	0	-	
関連分野	民族共生論	1・2後		2		○				1					
	言語文化論	1・2前		2		○			1						
	表象文化論	1・2後		2		○			1						
	小計(3科目)	-	0	6	0	-			1	0	0	0	0	0	-
研究指導	言語文化学特別研究	1・2通	8				○		8						
	小計(1科目)	-	8	0	0	-			0	0	0	0	0	0	-
合計(20科目)		-	8	38	0	-			8	2	0	0	0	0	-
学位又は称号	修士(文学)	学位又は専攻の分野			文学関係										

修了要件及び履修方法	授業期間等	
<p>(1)修了要件 修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士（文学）の学位を授与する。なお、試験の実施及び修士論文の審査等については、以下のとおりである。</p> <p>履修した授業科目については試験を実施する。試験は、筆記、口述又は研究報告等により授業担当者が行う。各授業科目の成績評価は、S(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)及びD(59点以下)をもって表し、S、A、B、Cを合格とし、Dを不合格とする。合格した授業科目に所定の単位を与える。</p> <p>修士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会の選出した審査委員が行う。審査委員は、指導教員を主査とし、これに当該論文に関連のある授業科目の担当教員2名以上を副査として加え、審査委員会を構成する。最終試験は所定の単位を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者に、修士論文及びこれに関連のある研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の標語をもって表す。審査委員会は、論文審査及び最終試験の結果に学位授与についての意見を付した審査報告書を研究科委員会に提出し、研究科委員会が学位授与の可否を判定する。</p>	1 学年の学期区分	2 学期
<p>(2)履修方法及び研究指導 学生の研究課題に対応した指導教員1名と関連分野を担当する副指導教員1名を入学時のガイダンスにおいて定める。指導教員及び副指導教員は、学生の学位取得に向けて、履修指導及び研究指導を担当する。履修指導にあたっては、学生の研究課題・学力・能力等に応じて、主となる専修の科目を中心に、基礎科目、共通科目の履修及び必要に応じて他専修、他専攻の科目の履修についても指導・助言を行う。学生は選択科目22単位以上と必修科目の言語文化学特別研究8単位を履修することになる。</p> <p>研究指導は、授業科目の「言語文化学特別研究」において、研究方法の確立、研究計画の立案、論文主題提示の方法、論文構成の仕方、発表方法等の指導を行い、研究者としての能力を養う。論文題目提出、題目変更届、論文提出の日程に合わせて指導するとともに、進捗状況を把握するために院生研究発表会の場を有効に活用する。この場では、研究主題、研究内容、研究方法などの妥当性や関連文献とのかかわりなどを討議し、今後の研究への取り組みについての方向性を指導する。研究発表会の成果によっては、学内外の研究会や学会での発表を行わせ、学位論文の作成と学位取得、及び研究成果公開、学位論文の公开发表へと繋げていくことになる。</p>	1 学期の授業期間	1 5 週
<p>入学定員が8名と少人数に対して、研究指導担当教員が29名いるため、入学から学位取得まで、きめ細かな指導を行うことが可能となる。</p> <p>修士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻の授業科目の履修を8単位まで認めるとともに、他大学院で修得した単位及び入学前の既修得単位についても、本学の大学院における授業科目の履修により修得したものとして、合わせて10単位を超えない範囲で単位の認定を行うことができるものとする。</p> <p>授業科目は千代田校地での開講が主であるが、千代田校地及び多摩校地で同時に開講する授業科目、多摩校地のみで開講する授業科目も一部開設する。学生及び教員に負担がかからないよう、多摩校地で開講する授業科目の開講曜日、研究指導日を特定する等、授業時間割編成の際に配慮する。</p>	1 時限の授業時間	9 0 分

教 育 課 程 等 の 概 要

設置する研究科等の学位等と同じ分野の学位を授与している既設の研究科等
(文学研究科国文学専攻(修士課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通分野	草稿・テキスト学	1・2前		2		○			1							
	比較文学	1・2後		2		○			1							
	文学理論	1・2前		2		○									兼担1	
	小計(3科目)	-	0	6	0	-	-	0	0	0	0	0	0	0	兼1	-
古典文学分野	古代文学演習Ⅰ	1・2前		2			○		1							
	古代文学演習Ⅱ	1・2後		2			○		1							
	古代文学特殊講義Ⅰ	1・2前		2		○	○		1							
	古代文学特殊講義Ⅱ	1・2後		2		○	○		1							
	中世文学演習Ⅰ	1・2前		2			○		1							
	中世文学演習Ⅱ	1・2後		2			○		1							
	中世文学特殊講義Ⅰ	1・2前		2		○	○		1							
	中世文学特殊講義Ⅱ	1・2後		2		○	○		1							
	日本古典文学特論Ⅰ	1・2前		2		○	○		1							
	日本古典文学特論Ⅱ	1・2後		2		○	○		1							
小計(10科目)	-	0	20	0	-	-	3	0	0	0	0	0	0	0	-	
近代文学分野	近世文学演習Ⅰ	1・2前		2			○		1							
	近世文学演習Ⅱ	1・2後		2			○		1							
	近世文学特殊講義Ⅰ	1・2専		2		○	○		1							
	近世文学特殊講義Ⅱ	1・2後		2		○	○		1							
	近代文学演習Ⅰ	1・2前		2			○		1							
	近代文学演習Ⅱ	1・2後		2			○		1							
	近代文学特殊講義Ⅰ	1・2前		2		○	○		1							
	近代文学特殊講義Ⅱ	1・2後		2		○	○		1							
	日本近代文学特論Ⅰ	1・2前		2		○	○		1							
	日本近代文学特論Ⅱ	1・2後		2		○	○		1							
	日本近代文学特論Ⅲ	1・2前		2		○	○				1					
日本近代文学特論Ⅳ	1・2後		2		○	○				1						
小計(12科目)	-	0	24	0	-	-	3	0	1	0	0	0	0	-		
日本語学分野	日本語学演習Ⅰ	1・2前		2			○		1							
	日本語学演習Ⅱ	1・2後		2			○		1							
	日本語学特殊講義Ⅰ	1・2前		2		○	○		1							
	日本語学特殊講義Ⅱ	1・2後		2		○	○		1							
小計(4科目)	-	0	8	0	-	-	1	0	0	0	0	0	0	-		
関連分野	日本文学研究方法論	1・2前		2		○			1							
	語学・文学特論Ⅰ	1・2前		2		○	○							兼1		
	語学・文学特論Ⅱ	1・2後		2		○	○							兼1		
	中国文学特論Ⅰ	1・2前		2		○	○		1							
	中国文学特論Ⅱ	1・2後		2		○	○		1							
小計(5科目)	-	0	10	0	-	-	2	0	0	0	0	0	兼1	-		
研究指導	日本文学・日本語学特別研究	1・2通	8				○		8							
	小計(1科目)	-	8	0	0	-	-	0	0	0	0	0	0	-		
合計(35科目)		-	8	68	0	-	-	9	0	1	0	0	0	兼2	-	
学位又は称号	修士(文学)		学位又は専攻の分野			文学関係										
修了要件及び履修方法								授業期間等								
修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士(文学)の学位を授与する。								1学年の学期区分	2学期							
								1学期の授業期間	1.5週							
								1時限の授業時間	90分							

教 育 課 程 等 の 概 要

設置する研究科等の学位等と同じ分野の学位を授与している既設の研究科等
(文学研究科英文学専攻(修士課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通分野	草稿・テキスト学	1・2前		2		○									兼任1	
	比較文学	1・2後		2		○									兼任1	
	文学理論	1・2前		2		○			1							
	小計(3科目)	-	0	6	0	-	-	0	0	0	0	0	0	0	兼1	-
基礎分野	Fundamentals of Reading I	1・2前		2		○			1							
	Fundamentals of Reading II	1・2後		2		○			1							
	Academic Writing I	1・2前		2		○						1				
	Academic Writing II	1・2後		2		○						1				
	小計(4科目)	-	0	8	0	-	-	1	0	0	1	0	0	0		-
英語文学分野	英文学演習I	1・2前		2			○		1							
	英文学演習II	1・2後		2			○		1							
	英文学演習III	1・2前		2			○		1							
	英文学演習IV	1・2後		2			○		1							
	英文学研究I	1・2前		2		○			1							
	英文学研究II	1・2後		2		○			1							
	米文学演習I	1・2前		2			○		1							
	米文学演習II	1・2後		2			○		1							
	米文学演習III	1・2前		2			○		1							
	米文学演習IV	1・2後		2			○		1							
	米文学研究I	1・2前		2		○			1							
	米文学研究II	1・2後		2		○			1							
	小計(12科目)	-	0	24	0	-	-	5	0	0	0	0	0	0		-
英語学分野	英語学演習I	1・2前		2			○		1							
	英語学演習II	1・2後		2			○		1							
	英語学演習III	1・2前		2			○		1							
	英語学演習IV	1・2後		2			○		1							
	英語学研究I	1・2前		2		○			1							
	英語学研究II	1・2後		2		○			1							
	小計(6科目)	-	0	12	0	-	-	2	0	0	0	0	0	0		-
英語教育学分野	英語教育学演習I	1・2前		2			○		1							
	英語教育学演習II	1・2後		2			○		1							
	英語教育学研究I	1・2前		2		○			1							
	英語教育学研究II	1・2後		2		○			1							
	小計(4科目)	-	0	8	0	-	-	1	0	0	0	0	0	0		-
関連分野	ディスコース研究	1・2後		2		○			1							
	ジェンダー研究	1・2後		2		○			1							
	児童文学研究	1・2前		2		○			1							
	表象文化研究	1・2後		2		○			1							
	Professional English	1・2前		2		○								兼1	集中	
	小計(5科目)	-	0	10	0	-	-	2	0	0	0	0	0	兼1		-
研究指導	英米文学・英語学・英語教育学特別研究	1・2通		8			○		11							
	小計(1科目)	-	8	0	0	-	-	0	0	0	0	0	0	0		-
合計(35科目)		-	8	68	0	-	-	11	0	0	1	0	兼2			
学位又は称号	修士(文学)		学位又は専攻の分野			文学関係										
修了要件及び履修方法										授業期間等						
修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士(文学)の学位を授与する。										1学年の学期区分	2学期					
										1学期の授業期間	1.5週					
										1時限の授業時間	90分					

教育課程等の概要															
(人間文化研究科現代社会研究専攻(修士課程))															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置				備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教		助手	
基礎科目	Developing Critical Thinking Skills	1前		1			○							兼担1	
	Critical Reading and Writing	1前		1			○							兼担1	
	小計(2科目)	-	0	2	0	-			0	0	0	0	0	兼1	-
情報コミュニケーション専修	基礎理論分野														
	社会情報研究基礎論	1・2前		2			○		1						
	メディア研究基礎論	1・2前		2			○		1						
	コミュニケーション研究基礎論	1・2前		2			○		1						
	社会情報の歴史	1・2前		2			○		1						
	情報社会及び情報倫理特論	1・2前		2			○		1						
	小計(5科目)	-	0	10	0	-			4	0	0	0	0	0	-
	社会・経済と情報分野														
	新聞特論	1・2後		2			○		1						
	放送・通信特論	1・2後		2			○		1						
	マスコミ言語特論	1・2後		2			○		1						
災害情報特論	1・2後		2			○		1							
世界経済情報特論	1・2前		2			○		1							
日本経済情報特論	1・2前		2			○		1							
地域再生システム論	1・2後		2			○		1							
ソフトウェア特論	1・2前		2			○		1							
学習科学特論	1・2前		2			○			1						
情報ネットワーク特論演習	1・2前		2			○	○	1		1					
情報システム特論	1・2前		2			○		1							
マルチメディア特論演習	1・2後		2			○	○						兼担1		
情報処理特論	1・2前		2			○		1							
コンピュータグラフィックス特論演習	1・2後		2			○	○	1							
情報と職業特論	1・2後		2			○		1							
情報教育教材開発特論演習	1・2後		2			○		1							
小計(16科目)	-	0	32	0	-			13	1	0	0	0	兼1	-	
臨床社会学専修	生と死の臨床分野														
	ケアマネジメント論	1・2後		2			○		1					兼1	オムニバス
	ターミナルケア論	1・2後		2			○		1	1				兼1	オムニバス
	死と死別の臨床心理	1・2前		2			○							兼1	
	ライフケア特論	1・2後		2			○		1						
	老いと死の社会理論	1・2前		2			○							兼1	
	医療福祉特論	1・2後		2			○			1					
	生と死の臨床特別実習(インターシップ*)	1・2後		2				○	1	1					オムニバス
小計(7科目)	-	0	14	0	-			2	2	0	0	0	兼4	-	
ジェンダー臨床分野															
ジェンダーの社会学	1・2後		2			○							兼1		
ジェンダーと医療	1・2後		2			○		1	1					オムニバス	
ジェンダーとメンタルヘルス	1・2後		2			○							兼1		
ジェンダーと法律学	1・2後		2			○							兼1		
性暴力に関する調査と方法	1・2前		2			○		1							
社会福祉援助論(女性と自立支援)	1・2前		2			○			1						
ジェンダーと臨床特別実習(インターシップ*)	1・2前		2				○	1							
小計(7科目)	-	0	14	0	-			0	0	0	0	0	兼3	-	
現代社会理論・社会調査分野															
アイデンティティ論	1・2前		2			○		1							
宗教と社会特論	1・2前		2			○		1							
現代社会理論研究	1・2前		2			○			1						
リスク社会論	1・2後		2			○			1						
社会運動論	1・2前		2			○			1						
地域文化論	1・2後		2			○		1							
ネットワーク論	1・2前		2			○				1					
調査研究方法	1・2後		2			○				1			兼1	オムニバス	
質的調査法	1・2前		2			○		1							
多変量解析	1・2後		2			○			1						
小計(10科目)	-	0	20	0	-			1	2	1	0	0	兼1	-	
研究指導	現代社会研究特別演習	1・2通	4				○	14	4						
	現代社会研究特別研究	1・2通	8				○	14	4						
	小計(2科目)	-	12	0	0	-		2	0	0	0	0	0	-	
合計(49科目)			-	12	92	0	-	22	5	1	0	0	兼10	-	
学位又は称号	修士(社会学)		学位又は専攻の分野			社会学・社会学福祉学関係									

修了要件及び履修方法	授業期間等	
<p>(1)修了要件 修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士（社会学）の学位を授与する。なお、試験の実施及び修士論文の審査等については、以下のとおりである。</p> <p>履修した授業科目については試験を実施する。試験は、筆記、口述又は研究報告等により授業担当者が行う。各授業科目の成績評価は、S(100点～80点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)及びD(59点以下)をもって表し、S、A、B、Cを合格とし、Dを不合格とする。合格した授業科目に所定の単位を与える。</p> <p>修士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会の選出した審査委員が行う。審査委員は、指導教員を主査とし、これに当該論文に関連のある授業科目の担当教員2名以上を副査として加え、審査委員会を構成する。最終試験は所定の単位を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者に、修士論文及びこれに関連のある研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の標語をもって表す。審査委員会は、論文審査及び最終試験の結果に学位授与についての意見を付した審査報告書を研究科委員会に提出し、研究科委員会が学位授与の可否を判定する。</p>	1学年の学期区分	2学期
<p>(2)履修方法及び研究指導 各学生の研究課題に対応した指導教員1名と関連分野を担当する副指導教員1名を入学時のガイダンスにおいて定める。指導教員及び副指導教員は、学生の学位取得に向けて、履修指導及び研究指導を担当する。履修指導にあたっては、学生の研究課題・学力・能力等に応じて、主となる専修の科目を中心に、基礎科目の履修及び必要に応じて他専修、他専攻の科目の履修についても指導・助言を行う。学生は選択科目18単位以上と必修科目である現代社会研究特別演習4単位、現代社会研究特別研究8単位を履修することになる。</p> <p>研究指導は、授業科目の「現代社会研究特別演習」と「現代社会研究特別研究」において、研究方法の確立、研究計画の立案、論文主題提示の方法、論文構成の仕方、発表方法等の指導を行い、研究者としての能力を養う。論文題目提出、題目変更届、論文提出の日程に合わせて指導するとともに、進捗状況を把握するために院生研究発表会の場を有効に活用する。この場では、研究主題、研究内容、研究方法などの妥当性や関連文献とのかかわりなどについて討議し、今後の研究への取り組みについての方向性を指導する。研究発表会の成果によっては、学内外の研究会や学会での発表を行わせ、学位論文の作成と学位取得、及び研究成果公開、学位論文の公開発表へと繋げていくことになる。</p>	1学期の授業期間	15週
<p>入学定員が6名と少人数に対して、研究指導担当教員が18名いるため、入学から学位取得まで、きめ細かな指導を行うことが可能となる。</p> <p>修士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻の授業科目の履修を8単位まで認めるとともに、他大学院で修得した単位及び入学前の既修得単位についても、本学の大学院における授業科目の履修により修得したものと、合わせて10単位を超えない範囲で単位の認定を行うことができるものとする。</p> <p>また、社会人に対しては、大学院設置基準第14条の特例を適用し、土日夜間や長期休暇を利用し、授業・研究指導も実施するとともに長期履修生制度も利用できる。</p> <p>なお、授業科目は多摩校地での開講が主であるが、千代田校地で開講する授業科目も一部開設する。学生及び教員に負担がかからないよう、千代田校地で開講する授業科目の開講曜日、研究指導日を特定する等、授業時間割編成の際に配慮する。</p>	1時限の授業時間	90分

教育課程等の概要																	
(人間文化研究科現代社会研究専攻(修士課程))																	
科目区分	授業科目の名称		配当年次	単位数					専任教員等の配置					備考			
				必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教		助手		
情報コミュニケーション専修	社会・経済と情報分野	新聞特論	1・2後		2		○				1						
		災害情報特論	1・2後		2		○				1						
		小計(2科目)			0	4	0				2	0	0	0	0	0	
臨床社会学専修	生と死の臨床分野	老いと死の社会学	1・2前		2		○									兼1	
		小計(1科目)			0	2	0				0	0	0	0	0		
	ジェンダー臨床分野	ジェンダーの社会学	1・2後		2		○									兼1	オムニバス
		ジェンダーと医療	1・2後		2		○				1	1					
		ジェンダーとメンタルヘルス	1・2後		2		○									兼1	
		ジェンダーと法律学	1・2後		2		○									兼1	
		性暴力に関する調査と方法	1・2前		2		○				1						
		社会福祉援助論(女性と自立支援)	1・2前		2		○					1					
ジェンダーと臨床特別実習(インターシップ)	1・2前		2					○		1							
	小計(7科目)			0	14	0				0	0	0	0	0	兼3		
現代社会学専修	アイデンティティ論	1・2前		2		○				1							
	小計(1科目)			0	2	0				0	0	0	0	0	0		
研究指導	現代社会研究特別演習	1・2通		4			○			2	0						
	現代社会研究特別研究	1・2通		8			○			2	0						
	小計(2科目)			12	0	0				0	0	0	0	0	0		
合計(13科目)					12	22	0			2	0	0	0	0	兼4		
学位又は称号	修士(社会学)		学位又は専攻の分野		社会学・社会福祉学関係												
修了要件及び履修方法										授業期間等							
<p>(1)修了要件</p> <p>修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士(社会学)の学位を授与する。なお、試験の実施及び修士論文の審査等については、以下のとおりである。</p> <p>履修した授業科目については試験を実施する。試験は、筆記、口述又は研究報告等により授業担当者が行う。各授業科目の成績評価は、S(100点~90点)、A(89点~80点)、B(79点~70点)、C(69点~60点)及びD(59点以下)をもって表し、S、A、B、Cを合格とし、Dを不合格とする。合格した授業科目に所定の単位を与える。</p> <p>修士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会の選出した審査委員が行う。審査委員は、指導教員を主査とし、これに当該論文に関連のある授業科目の担当教員2名以上を副査として加え、審査委員会を構成する。最終試験は所定の単位を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者に、修士論文及びこれに関連のある研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の標語をもって表す。審査委員会は、論文審査及び最終試験の結果に学位授与についての意見を付した審査報告書を研究科委員会に提出し、研究科委員会が学位授与の可否を判定する。</p> <p>(2)履修方法及び研究指導</p> <p>各学生の研究課題に対応した指導教員1名と関連分野を担当する副指導教員1名を入学時のガイダンスにおいて定める。指導教員及び副指導教員は、学生の学位取得に向けて、履修指導及び研究指導を担当する。履修指導にあたっては、学生の研究課題・学力・能力等に応じて、主となる専修の科目を中心に、基礎科目の履修及び必要に応じて他専修、他専攻の科目の履修についても指導・助言を行う。学生は選択科目18単位以上と必修科目である現代社会研究特別演習4単位、現代社会研究特別研究8単位を履修することになる。</p> <p>研究指導は、授業科目の「現代社会研究特別演習」と「現代社会研究特別研究」において、研究方法の確立、研究計画の立案、論文主題提示の方法、論文構成の仕方、発表方法等の指導を行い、研究者としての能力を養う。論文題目提出、題目変更届、論文提出の日程に合わせて指導するとともに、進捗状況を把握するために院生研究発表会の場を有効に活用する。この場では、研究主題、研究内容、研究方法などの妥当性及び関連文献とのかかわりなどについて討議し、今後の研究への取り組みについての方向性を指導する。研究発表会の成果によっては、学内外の研究会や学会での発表を行わせ、学位論文の作成と学位取得、及び研究成果公開、学位論文の公開発表へと繋げていくことになる。</p> <p>入学定員が6名と少人数に対して、研究指導担当教員が18名いるため、入学から学位取得まで、きめ細かな指導を行うことが可能となる。</p> <p>修士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻の授業科目の履修を8単位まで認めるとともに、他大学院で修得した単位及び入学前の既修得単位についても、本学の大学院における授業科目の履修により修得したものととして、合わせて10単位を超えない範囲で単位の認定を行うことができるものとする。</p> <p>また、社会人に対しては、大学院設置基準第14条の特例を適用し、土日夜間や長期休暇を利用し、授業・研究指導も実施するとともに長期履修生制度も利用できる。</p> <p>なお、授業科目は多摩校地での開講が主であるが、千代田校地で開講する授業科目も一部開設する。学生及び教員に負担がかからないよう、千代田校地で開講する授業科目の開講曜日、研究指導日を特定する等、授業時間割編成の際に配慮する。</p>										1学年の学期区分	2学期						
										1学期の授業期間	15週						
										1時限の授業時間	90分						

教育課程等の概要														
(人間文化研究科現代社会研究専攻(修士課程))														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数					専任教員等の配置				備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師		助教	助手
基礎科目	Developing Critical Thinking Skills	1前		1									兼担1	
	Critical Reading and Writing	1前		1									兼担1	
	小計(2科目)	-	0	2	0	-		0	0	0	0	0	兼1	
情報コミュニケーション専修	基礎理論分野	社会情報研究基礎論	1・2前	2		○			1					
	メディア研究基礎論	1・2前	2		○			1						
	コミュニケーション研究基礎論	1・2前	2		○			1						
	社会情報の歴史	1・2前	2		○			1						
	情報社会及び情報倫理特論	1・2前	2		○			1						
	小計(5科目)	-	0	10	0	-		4	0	0	0	0	0	
	社会・経済と情報分野	放送・通信特論	1・2後	2		○			1					
	マスコミ言語特論	1・2後	2		○			1						
	世界経済情報特論	1・2前	2		○			1						
	日本経済情報特論	1・2前	2		○			1						
	地域再生システム論	1・2後	2		○			1						
	ソフトウェア特論	1・2前	2		○			1						
	学習科学特論	1・2前	2		○				1					
	情報ネットワーク特論演習	1・2前	2			○		1		1				
情報システム特論	1・2前	2			○		1							
マルチメディア特論演習	1・2後	2			○							兼担1		
情報処理特論	1・2前	2			○		1							
コンピュータグラフィックス特論演習	1・2後	2			○		1							
情報と職業特論	1・2後	2			○		1							
情報教育教材開発特論演習	1・2後	2			○		1							
小計(14科目)	-	0	28	0	-		11	1	0	0	0	0	兼1	
臨床社会学専修	生と死の臨床分野	ケアマネジメント論	1・2後	2		○			1				兼1	オムニバス
	ターミナルケア論	1・2後	2		○			1	1				兼1	オムニバス
	死と死別の臨床心理	1・2前	2		○								兼1	
	ライフケア特論	1・2後	2		○			1						
	医療福祉特論	1・2後	2		○				1					
	生と死の臨床特別実習(インターンシップ)	1・2後	2				○	1	1					オムニバス
	小計(6科目)	-	0	12	0			2	2				兼3	-
現代社会理論・社会調査分野	宗教と社会特論	1・2前	2		○			1						
現代社会理論研究	1・2前	2		○				1						
リスク社会論	1・2後	2		○				1						
社会運動論	1・2前	2		○				1						
地域文化論	1・2後	2		○			1							
ネットワーク論	1・2前	2		○					1					
調査研究方法	1・2後	2		○					1				兼1	
質的調査法	1・2前	2		○			1							
多変量解析	1・2後	2		○				1						
小計(9科目)	-	0	18	0	-		1	2	1	0	0	0	兼1	
研究指導	現代社会研究特別演習	1・2通	4			○		12	4					
	現代社会研究特別研究	1・2通	8			○		12	4					
	小計(2科目)	-	12	0	0	-		2	0	0	0	0	0	
合計(38科目)		-	12	70	0	-		20	5	1	0	0	兼9	
学位又は称号	修士(社会学)		学位又は専攻の分野			社会学・社会福祉学関係								

修了要件及び履修方法	授業期間等	
<p>(1)修了要件 修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士（社会学）の学位を授与する。なお、試験の実施及び修士論文の審査等については、以下のとおりである。</p> <p>履修した授業科目については試験を実施する。試験は、筆記、口述又は研究報告等により授業担当者が行う。各授業科目の成績評価は、S(100点～80点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)及びD(59点以下)をもって表し、S、A、B、Cを合格とし、Dを不合格とする。合格した授業科目に所定の単位を与える。</p> <p>修士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会の選出した審査委員が行う。審査委員は、指導教員を主査とし、これに当該論文に関連のある授業科目の担当教員2名以上を副査として加え、審査委員会を構成する。最終試験は所定の単位を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者に、修士論文及びこれに関連のある研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の標語をもって表す。審査委員会は、論文審査及び最終試験の結果に学位授与についての意見を付した審査報告書を研究科委員会に提出し、研究科委員会が学位授与の可否を判定する。</p>	1学年の学期区分	2学期
<p>(2)履修方法及び研究指導 各学生の研究課題に対応した指導教員1名と関連分野を担当する副指導教員1名を入学時のガイダンスにおいて定める。指導教員及び副指導教員は、学生の学位取得に向けて、履修指導及び研究指導を担当する。履修指導にあたっては、学生の研究課題・学力・能力等に応じて、主となる専修の科目を中心に、基礎科目の履修及び必要に応じて他専修、他専攻の科目の履修についても指導・助言を行う。学生は選択科目18単位以上と必修科目である現代社会研究特別演習4単位、現代社会研究特別研究8単位を履修することになる。</p> <p>研究指導は、授業科目の「現代社会研究特別演習」と「現代社会研究特別研究」において、研究方法の確立、研究計画の立案、論文主題提示の方法、論文構成の仕方、発表方法等の指導を行い、研究者としての能力を養う。論文題目提出、題目変更届、論文提出の日程に合わせて指導するとともに、進捗状況を把握するために院生研究発表会の場を有効に活用する。この場では、研究主題、研究内容、研究方法などの妥当性や関連文献のかかわりなどについて討議し、今後の研究への取り組みについての方向性を指導する。研究発表会の成果によっては、学内外の研究会や学会での発表を行わせ、学位論文の作成と学位取得、及び研究成果公開、学位論文の公開発表へと繋げていくことになる。</p>	1学期の授業期間	15週
<p>入学定員が6名と少人数に対して、研究指導担当教員が18名いるため、入学から学位取得まで、きめ細かな指導を行うことが可能となる。</p> <p>修士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻の授業科目の履修を8単位まで認めるとともに、他大学院で修得した単位及び入学前の既修得単位についても、本学の大学院における授業科目の履修により修得したものと、合わせて10単位を超えない範囲で単位の認定を行うことができるものとする。</p> <p>また、社会人に対しては、大学院設置基準第14条の特例を適用し、土日夜間や長期休暇を利用し、授業・研究指導も実施するとともに長期履修生制度も利用できる。</p> <p>なお、授業科目は多摩校地での開講が主であるが、千代田校地で開講する授業科目も一部開設する。学生及び教員に負担がかからないよう、千代田校地で開講する授業科目の開講曜日、研究指導日を特定する等、授業時間割編成の際に配慮する。</p>	1時限の授業時間	90分

教 育 課 程 等 の 概 要

設置する研究科等の学位等と同じ分野の学位を授与している既設の研究科等
(社会情報研究科社会生活情報専攻(修士課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数					授業形態					専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
基礎分野	社会生活情報通論Ⅰ	1・2前	2			○			1									
	社会生活情報通論Ⅱ	1・2後	2			○			1									
	情報処理論	1・2前	2			○			1									
	小計(3科目)	—	6	0	0	—			2	0	0	0	0	0	0	0	—	
人間・生活情報分野	人間・生活情報特論Ⅰ(思想の受容・展開)	1・2前		2		○			1									
	人間・生活情報特論Ⅱ(異文化間の言語伝達)	1・2前		2		○			1									
	人間・生活情報特論Ⅲ(口承資料・生活史)	1・2前		2		○			1									
	小計(3科目)	—	0	6	0	—			2	0	0	0	0	0	0	0	—	
社会情報分野	社会情報特論Ⅰ(相互作用と情報)	1・2前		2		○			1									
	社会情報特論Ⅱ(情報産業とメディア)	1・2前		2		○			1									
	社会情報特論Ⅲ(マスコミ理論と情報)	1・2前		2		○			1									
	小計(3科目)	—	0	6	0	—			2	0	0	0	0	0	0	0	—	
経済情報分野	経済情報特論Ⅰ(経済理論情報)	1・2前		2		○			1									
	経済情報特論Ⅱ(産業構造情報)	1・2前		2		○			1									
	経済情報特論Ⅲ(経済統計情報)	1・2後		2		○			1									
	小計(3科目)	—	0	6	0	—			1	0	0	0	0	0	0	0	—	
関連分野	社会生活情報特殊講義Ⅰ(福祉情報システム)	1・2前		2		○			1									
	社会生活情報特殊講義Ⅱ(現代社会生活情報)	1・2後		2		○												
	社会生活情報特殊講義Ⅲ(各国社会生活情報)	1・2前		2		○			1									
	小計(3科目)	—	0	6	0	—			1	0	0	0	0	0	0	0	—	
研究指導	社会生活情報演習	1・2前		2			○		6									
	社会生活情報特別研究	1・2通		10			○		6									
	小計(2科目)	—	12	0	0	—			0	0	0	0	0	0	0	0	—	
合計(17科目)		—	18	24	0	—			8	0	0	0	0	0	0	0	—	
学位又は称号	修士(社会情報)		学位又は専攻の分野			社会学・社会福祉学関係												
修了要件及び履修方法										授業期間等								
修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士(社会情報)の学位を授与する。										1学年の学期区分	2学期							
										1学期の授業期間	1.5週							
										1時限の授業時間	90分							

教 育 課 程 等 の 概 要

設置する研究科等の学位等と同じ分野の学位を授与している既設の研究科等
(人間関係学研究科社会学専攻(修士課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
社会学理論・方法論分野	社会学理論特論Ⅰ(社会学の学説・理論と方法)	1・2前		2		○				1					
	社会学理論特論Ⅱ(生活世界と意味の社会学)	1・2前		2		○				1					
	社会学理論特論Ⅲ(メディア研究の理論と方法)	1・2後		2		○				1					
	社会学理論特論Ⅳ(アイデンティティの社会学)	1・2後		2		○				1					
	社会学理論特論Ⅴ(公共圏論)	1・2前		2		○				1					
	社会学理論特論Ⅵ(文化と意識の社会学)	1・2後		2		○									兼1
	社会学理論特論Ⅶ(相互行為・コミュニケーション論)	1・2前		2		○									兼1
	社会調査特論Ⅰ(調査研究方法)	1・2後		2		○									兼1
	社会調査特論Ⅱ(質的調査法)	1・2後		2		○				1					
	社会調査特論Ⅲ(多変量解析)	1・2前		2		○					1				
小計(10科目)		-	0	20	0	-	-	-	2	1	0	0	0	0	兼3
日常生活分野	日常生活特論Ⅰ(宗教生活の社会学)	1・2後		2		○				1					
	日常生活特論Ⅱ(生活環境と日常生活の社会学)	1・2前		2		○									兼1
	日常生活特論Ⅲ(若者と子どもの文化社会学)	1・2前		2		○				1					
	日常生活特論Ⅳ(家族社会学)	1・2前		2		○				1					
	日常生活特論Ⅴ(老いと死の文化社会学)	1・2前		2		○									兼1
	日常生活特論Ⅵ(ジェンダー論)	1・2後		2		○									兼1
	小計(6科目)		-	0	12	0	-	-	2	0	0	0	0	0	兼3
コミュニティライフ分野	コミュニティ・ライフ特論Ⅰ(コミュニティ論)	1・2前		2		○				1					
	コミュニティ・ライフ特論Ⅱ(都市空間論)	1・2後		2		○					1				
	コミュニティ・ライフ特論Ⅲ(住民活動論)	1・2前		2		○									
	コミュニティ・ライフ特論Ⅳ(地域文化論)	1・2前		2		○				1					
	コミュニティ・ライフ特論Ⅴ(コミュニティと国民国家の社会)	1・2前		2		○				1					
	コミュニティ・ライフ特論Ⅵ(ボランティア論)	1・2後		2		○				1					
	小計(6科目)		-	0	12	0	-	-	1	1	0	0	0	0	0
研究指導	社会学特別研究	1・2通	8				○		5						
	小計(1科目)		8	0	0	-	-	-	0	0	0	0	0	0	-
合計(23科目)			-	8	44	0	-	-	5	2	0	0	0	0	兼6
学位又は称号	修士(社会学)		学位又は専攻の分野			社会学・社会福祉学関係									
修了要件及び履修方法										授業期間等					
修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士(社会学)の学位を授与する。										1学年の学期区分	2学期				
										1学期の授業期間	15週				
										1時限の授業時間	90分				

様式2号(その2の1)

教育課程等の概要															
(人間文化研究科臨床心理学専攻(修士課程))															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
基礎科目	Developing Critical Thinking Skills	1前		1			○							兼担1	
	Critical Reading and Writing	1前		1			○							兼担1	
	小計(2科目)	-	0	2	0		-		0	0	0	0	0	兼1	-
臨床心理学基礎分野	臨床心理学特論	1・2通	4			○			1						
	臨床心理面接特論A	1・2前	2			○			1						
	臨床心理面接特論B	1・2後	2			○			1						
	臨床心理査定演習A	1・2後	2				○		2	1					
	臨床心理査定演習B	1・2後	2				○		2	1					
	臨床心理学基礎実習	1・2通	2					○	2						
	臨床心理実習	1・2通	2					○	1	1		1		兼2	
	臨床心理特別実習	1・2通	2					○	3	1		1		兼2	
	小計(8科目)	-	18	0	0		-		1	0	0	1	0	兼3	-
臨床心理学専門分野	臨床心理学研究法特論Ⅰ(実証的研究法)	1・2前	2			○								兼1	
	事例研究法特論	1・2前	2			○								兼1	集中
	心理統計学特論	1・2後	2			○				1					隔年開講
	臨床認知心理学特論	1・2前	2			○				1					
	発達心理学特論	1・2後	2			○			1						隔年開講
	社会心理学特論	1・2前	2			○				1					隔年開講
	社会心理学演習	1・2前	2				○			1					隔年開講
	家族支援アプローチ演習	1・2前	2				○							兼1	集中
	精神医学特論	1・2前	2			○								兼1	
	障害児心理学演習	1・2前	2				○		1						
	臨床心理学研究法特論Ⅱ(投映法基礎)	1・2前	2			○								兼1	集中
	臨床心理学研究法特論Ⅲ(投映法応用)	1・2後	2			○			1						隔年開講
	心理療法特論Ⅰ(認知行動療法)	1・2前	2			○								兼1	隔年開講
	心理療法特論Ⅱ(分析心理学)	1・2前	2			○				1					
	学校臨床心理学特論	1・2後	2			○								兼1	隔年開講
コミュニケーション特論演習	1・2前	2				○		2						集中	
小計(16科目)	-	0	32	0		-		3	3	0	0	0	兼6	-	
研究指導	臨床心理学特別研究	1・2通	4				○		4	1					
	小計(1科目)	-	4	0	0		-		0	0	0	0	0	0	-
合計(27科目)		-	22	34	0		-		4	3	0	1	0	兼10	
学位又は称号	修士(心理学)		学位又は専攻の分野			文学関係									

修了要件及び履修方法	授業期間等	
<p>(1)修了要件</p> <p>修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士（心理学）の学位を授与する。なお、試験の実施及び修士論文の審査等については、以下のとおりである。</p> <p>履修した授業科目については試験を実施する。試験は、筆記、口述又は研究報告等により授業担当者が行う。各授業科目の成績評価は、S(100点～80点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)及びD(59点以下)をもって表し、S、A、B、Cを合格とし、Dを不合格とする。合格した授業科目に所定の単位を与える。</p> <p>修士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会の選出した審査委員が行う。審査委員は、指導教員を主査とし、これに当該論文に関連のある授業科目の担当教員2名以上を副査として加え、審査委員会を構成する。最終試験は所定の単位を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者に、修士論文及びこれに関連のある研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の標語をもって表す。審査委員会は、論文審査及び最終試験の結果に学位授与についての意見を付した審査報告書を研究科委員会に提出し、研究科委員会が学位授与の可否を判定する。</p>	1 学年の学期区分	2 学期
<p>(2)履修方法及び研究指導</p> <p>各学生の研究課題に対応した指導教員1名と関連分野を担当する副指導教員1名を入学時のガイダンスにおいて定める。指導教員及び副指導教員は、学生の学位取得に向けて、履修指導及び研究指導を担当する。履修指導にあたっては、必修科目の他、基礎科目を含め、選択科目の中から学生の研究課題・学力・能力等に応じた履修及び必要に応じて他専攻の科目の履修についても指導・助言を行う。学生は必修科目8科目18単位と研究指導としての臨床心理学特別研究4単位及び選択科目8単位以上を履修することになる。</p> <p>研究指導は、授業科目の「臨床心理学特別研究」において、研究方法の確立、研究計画の立案、論文主題提示の方法、論文構成の仕方、発表方法等の指導を行い、研究者としての能力を養う。論文の題目提出、題目変更届、論文提出の日程に合わせて指導するとともに、進捗状況を把握するために院生研究発表会の場を有効に活用する。この場では、研究主題、研究内容、研究方法などの妥当性や関連文献とのかかわりなどについて討議し、今後の研究への取り組みについての方向性を指導する。研究発表会の成果によっては、学内外の研究会や学会での発表を行わせ、学位論文の作成と学位取得、及び研究成果公開、学位論文の公開発表へと繋げていくことになる。</p>	1 学期の授業期間	1 5 週
<p>入学定員が6名と少人数のため、入学から学位取得までくみ細かな指導を行うことが可能となる。修士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻の授業科目の履修を8単位まで認めるとともに、他大学院で修得した単位及び入学前の既修得単位についても、本学の大学院における授業科目の履修により修得したものとして、合わせて10単位を超えない範囲で単位の認定を行うことができるものとする。</p> <p>なお、授業科目は多摩校地のみでの開講となる。</p>	1 時限の授業時間	9 0 分

教 育 課 程 等 の 概 要

設置する研究科等の学位等と同じ分野の学位を授与している既設の研究科等
(人間関係学研究科臨床心理学専攻(修士課程))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
臨床心理学基礎分野	臨床心理学特論	1・2通	4			○			1							
	臨床心理面接特論A	1・2前	2			○			1							
	臨床心理面接特論B	1・2後	2			○			1							
	臨床心理査定演習A	1・2後	2				○		2	1						
	臨床心理査定演習B	1・2後	2				○		2	1						
	臨床心理基礎実習	1・2通	2					○	2							
	臨床心理実習	1・2通	2					○	1	1		1		兼2		
	臨床心理特別実習	1・2通	2					○	3	1		1		兼2		
小計(8科目)	-	-	18	0	0	-	-	-	1	0	0	1	0	兼3	-	
臨床心理学専門分野	臨床心理学研究法特論Ⅰ(実証的研究法)	1・2前		2		○								兼1		
	事例研究法特論	1・2後		2		○								兼1	集中	
	心理統計学特論	1・2後		2		○				1					隔年開講	
	臨床認知心理学特論	1・2前		2		○				1						
	発達心理学特論	1・2後		2		○			1							
	社会心理学特論	1・2前		2		○				1					隔年開講	
	社会心理学演習	1・2前		2			○			1					隔年開講	
	家族支援アプローチ演習	1・2後		2			○							兼1	隔年開講	集中
	精神医学特論	1・2前		2		○								兼1		
	障害児心理学演習	1・2前		2			○		1							
	臨床心理学研究法特論Ⅱ(投映法基礎)	1・2前		2		○								兼1		
	臨床心理学研究法特論Ⅲ(投映法応用)	1・2後		2		○			1						集中	
	心理療法特論Ⅰ(認知行動療法)	1・2前		2		○								兼1		
	心理療法特論Ⅱ(分析心理学)	1・2前		2		○				1						
学校臨床心理学特論	1・2後		2		○								兼1			
ミニ・リア・アプローチ特論演習	1・2前		2			○		2						集中		
小計(16科目)	-	-	0	32	0	-	-	-	3	3	0	0	0	兼6	-	
研究指導	臨床心理学特別研究	1・2通	4			○			4	1						
小計(1科目)	-	-	4	0	0	-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	
合計(25科目)		-	22	32	0	-	-	-	4	3	0	1	0	兼9	-	
学位又は称号	修士(心理学)		学位又は専攻の分野			文学関係										
修了要件及び履修方法										授業期間等						
修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し										1学年の学期区分	2学期					
修士(心理学)の学位を授与する。										1学期の授業期間	15週					
										1時限の授業時間	90分					

授 業 科 目 の 概 要			
(人間文化研究科人間生活科学専攻(博士後期課程))			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
生活人間学専修	発達環境学演習	身体能力・発達の地域差・地方性はその人間集団が生活する社会の歴史や慣習、文化に深く依存している。これらの身体能力・発達と文化等との相互関係をタイ、ミャンマー、ネパール、日本、中国などの事例を紹介しつつ参加者と討議することから、これら変数間のダイナミズムを考究する。	
	老年学特論	老年学は、もともとこの老年期を心身ともに健康で豊かな生活を実現させるための理論や方法の開発をめざし設立されたと言われている。本講義では、一応健康と言われている人たちに対する社会的施策の概要と問題(課題)点を明らかにすること。また、老いや疾病(障がい)や一人暮らし等、社会的な支援を必要とする人たちに対する施策の概要と課題等について論述する。さらに、老年期の生き方として最も重要な課題である「生きがい=主体性」を実現させるための諸課題についても検討する。	
	行動疫学特論	人間集団の行動現象、流行現象に潜む階層性、周期性、凝集性、順次性などの規則性を計量的データを収集し、解析することによって見出す疫学的方法について講義する。特に、具体的な事例としてファッション行動、健康行動、スポーツ行動などに関するデータを紹介しつつ、受講者が研究者として実際に研究を遂行してゆく上で必要な諸技術、知見を講義する。	
	生物環境学特論	現在、地球上にしか存在しない可能性のある生物は、地球環境の変化に適応して進化してきた。生物はどのように環境に適応しているのかを理解することを目的とする。授業では英文の論文を30分毎に読む。生物の多様性、生物とオゾン層、緑色植物の役割、生物と酸性雨、生物と水質汚染、大気汚染土壌汚染、森林の役割等について解説する。	
	運動生理学特論	栄養と神経系の作用、栄養素の生理作用、エネルギー代謝、一過性の運動及び身体的トレーニングによる生理的適応とそのメカニズムについて環境及び健康との関連について研究する。最近の医学、特に生理学関連の分野の研究成果をもとに、運動時のエネルギー消費能力、エネルギー発生、運搬及び利用、呼吸・循環器系機構の調節、筋収縮の燃料、神経及び内分泌系の調節、エネルギー消費能力とトレーニング・高所環境・水温・水圧、エネルギー出納バランスと体重調節などについて考察し、競技能力の向上、生活習慣病予防やリハビリテーションにおける運動生理学的効果やそのメカニズムについて講義する。	
臨床人間学専修	発達臨床学特論	保育の場における子どもの発達に関するテーマを中心に扱う。子どもが育つ家庭や保育施設という場における具体的な事例を通して子どもの発達の問題を検討するが、その際に時代や社会の変化に伴う子どもを取り巻く環境の変化という広い視点も含めて子どもの発達を検討することを目指す。	
	保育臨床学特論	子どもたちは、親との関係、保育者との関係、子ども同士の関係、さらには夫婦関係や親と保育者との関係など様々な人間関係の中で生活し、影響を受けている。そして、子どもの発達は、他者との関係形成が基盤にあり、それへの発達支援が重要であると考えられる。そこで、本講では、発達障害児や外国籍の子どもを含めた乳幼児期の人間関係と社会的認知の発達について最新の研究成果を把握し、保育現場における発達支援の在り方について考察を深める。	
	乳幼児保育学特論	乳幼児の保育とそれを支えていく環境の在り方や保育者の資質等について、具体的な論文を取り上げて検討していく。具体的に取り上げてみたいテーマとしては、子どもたちの精神的な成長にはどのような大人が必要なのかという問題、子どもたちの転園や就学に伴う環境移行の問題、保育者としてのアイデンティティ形成とリアリティショックの問題等がある。どのような問題を取り上げるかは、受講生と相談して決める。	
	子ども家庭福祉学特論	子どもが生まれ、育つ環境の中で最も重要な役割を持つ家族集団や保育・教育集団に着目し、そこでの福祉的課題について論述する。具体的には、第一に近年の核家族をめぐる新たな視点、つまり家族の個人化と育児・子育て上の問題について、内外の諸理論から学ぶ。第二に子どもが健全に育つために保育・教育集団が果たす役割と機能について、具体的には保育者や教師のあり方に着目しながら論述する。特に、子どもが集団活動に参加する際保育者・教師の適切な援助が欠かせない。その意味で、保育者・教師のあり方についての検討が課題となる。	

	比較子ども文化論演習	子どもに関わるさまざまな問題を検討するとき発達に関わる生物学的な要因だけではなく文化的な背景を検討する必要がある。子どもを取り巻く文化的環境の諸概念を整理し、異なる文化間の子どもの観・子育て・保育・教育などに関しての先行研究と事例を概観するとともに、児童学における比較文化的(cross-cultural)及び多元文化的(multicultural)な研究方法について論じる。履修院生それぞれの研究テーマに即した形で授業を進める。	
生活計画学専修	生活環境機能学特論	現代の生活環境の特徴と変化に応じた人間行動の適応について、人間に最も近接した衣服環境を中心に住環境も取り上げ、快適な生活環境のあり方をアプローチする。1. 生活環境とは 2. 生活環境の変化 3. 現代の生活環境の特徴と問題点 4. 人間を取り巻く生活環境 5. 生活環境の特徴と機能 6. 室内環境と快適性 7. 衣服環境材料の特徴 8. 衣服と生活空間 9. 快適な衣生活環境 10. 着衣性能とその特性 11. 色彩環境が人間生活に与える影響 12. ディスカッション	
	病態栄養学特論	栄養学は、疾病の原因、成因、経過、治療のすべてに関連する。よって、栄養管理法を理解することは健康維持、疾病予防のために有効である。本講義では、先進諸国において現在最大の健康問題となっている生活習慣病(高血圧、虚血性心疾患、脳梗塞、糖尿病、動脈硬化症状など)に関連する最近の海外研究論文(Lancet, New England Journal of Medicine, Journal of American Medical Association など)や専門書を、履修生が中心となって精読し、内容を発表して討論する。	
	被服設計学演習	着衣基体としての人体と被服とのかかわりを静的、動的の両面から捉え、着心地の良い快適な被服設計を行うための諸要因や評価方法について学び、着用者にとって満足のいく被服設計を考究する。 1. 人体の構造と運動機構に基づく着心地良い被服設計追求の意義 2. 被服の着脱、衣服構造とゆとり量 3. 被服の動作適応性と被服圧 4. ヒトの成長・発達と被服設計 5. 加齢に伴う体型の変化 6. 着心地に関する被服設計の要因	
	食生活安全学特論	食品の安全性を確保する上で問題となる危害因子として(1)ダイオキシンや有機水銀など有害な化学物質の混入による化学的因子、(2)ガラス片の混入や放射能汚染による物理的因子及び(3)病原微生物に汚染された生物的因子が挙げられる。中国産冷凍ギョウザ事件やメロミン混入事件等により、消費者の食の安全に対する信頼は大きく揺らいでいる。そこで、本授業では食の危害因子である有害化学物質や、現実的に食の安全を侵している原因の過半を占める病原微生物について学ぶと同時に食の安全制確保は如何にあるべきかを考える。	
	調理学特論	調理の目的は献立を立て、材料を集め、調理操作を加えておいしい料理にしあげることである。特に調理操作を加えていく過程で、食品材料に起きる化学的、物理的、組織学的、さらには微生物学的変化をしらべ、おいしくする方向に制御する方法を研究することが調理学の目標である。授業ではこれまでの研究成果について、どこに問題点があり、どのような研究手法があるか等について、講義及び外国語文献の講読により理解させる。	
生活素材学専修	生活材料学特論	私たちの生活を支える材料を総合的に学習することを目的とする。衣食住に関連した材料を歴史的に整理するとともに、科学の進化がもたらした功罪に鑑みて、今後どのように対処すべきかを考える。これまでの科学がハードの部分(人間不在の材料)のみを取り扱った弊害からの脱却を目指して、私たちの感性をどのように材料学に取り込むか、すなわち人間中心の材料学の構築をともに考える。	
	生体機能材料学特論	初めに生体が異物を認識する免疫の機構を解説し、アレルギー、炎症などの生理学的現象の機序を学ぶ。次に高分子材料が人体と接触したときの生体との相互作用、免疫原性、およびその制御のしかたを考え、これらを基本に人に優しい繊維材料の開発について考える。さらに、細胞と特異的に相互作用する高分子など、特殊な機能を持った生体機能材料の分子設計と応用についていくつかの例を紹介し、これらを開発するための考え方や手法、各種の生体機能材料開発の現状と問題点を学ぶ。	
	食品機能学特論	日本や中国の一部では、今なお、自然発酵法による食品の製造が伝統的に行われて、これら秘伝とされている方法を聴聞により再現すること、また、現地での発酵食品を採取し、これに関与している微生物を単離同定して、その特性を明らかにすることは、今日の食生活の諸問題を考察する上でも重要であると考えられる。自然発酵食品から関係する微生物を単離、同定、応用することにより、従来の発酵食品と比較考察し、実用上の可能性を検討する。合わせて、分離された微生物による発酵食品の風味成分、安全性、栄養価、生理効果を測定し、発酵に関する、物質生産、風味生成、ガス発生の生化学的機構を明らかにすることを目的としている。	
	栄養素機能学演習	近年、食品中の抗肥満成分やメタボリックシンドロームを予防する食事因子の研究が盛んに行われている。その中でも、従来の栄養素としての機能以外に新たな機能も注目されている半面、エビデンスがはっきりと示されていない成分もある。この中から消化管機能の調節、メタボリックシンドロームと栄養素の関連などを中心として、文献情報を吟味し、エビデンスの妥当性を調べていく。さらに、作用メカニズム解明の研究を通じて生化学、分子栄養学の手法を用いた研究方法についても理解を深める。	

	調理素材学特論	<p>ひとの食の特徴として、‘おいしさ’を本能のレベルから理性・精神のレベルにまで高めて享受しようとする事が挙げられる。そこで‘おいしさ’にかかわる多面性を解説し、現在の食物との関わりを歴史的背景を踏まえて考える。さらに、現在、多分野で研究されている天然高分子を基に、各種の機能性を付与した多様な新食品資材の特徴と現状を講述し、今後の可能性と展開について討論する。</p>	
--	---------	--	--

授 業 科 目 の 概 要			
(人間文化研究科言語文化専攻(博士後期課程))			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
古典文学分野	古代文学特論Ⅰ	古代後期(平安時代)の文学の背景となる住宅の様式と住環境から作品を解説することを試みる。平安文学の主体となる貴族の住宅は、寝殿造と呼ばれ、その概要はかなり明らかにされている。建築史の成果に学びながら、様式化された住宅の概要を把握するとともに、室内意匠となる室札に対する理解を深めて、そこから文学作品の多様な場面を読み解いていきたい。特論Ⅰでは、寝殿造の様式と住まいの仕方などを中心として講義し、併せて作品理解を深めたい。	
	古代文学特論Ⅱ	古代後期(平安時代)の文学の背景となる住宅の様式と住環境から作品を解説することを試みる。平安文学の主体となる貴族の住宅は、寝殿造と呼ばれ、その概要はかなり明らかにされている。建築史の成果に学びながら、様式化された住宅の概要を把握するとともに、室内意匠となる室札に対する理解を深めて、そこから文学作品の多様な場面を読み解いていきたい。特論Ⅱでは、寝殿造の室札を中心として講義し、併せて作品理解を深めたい。	
	中世文学特論Ⅰ	中世の始発とされる院政期特有の文化意識を知ること、古代以来の日本文学の中核であった和歌文学の伝統を理解することを中心としつつ、和歌作品研究の基本的方法を身につけることをも目的とする。そのために院政期に成立した『永久百首』を読む。『永久百首』は7人の歌人による百首歌だが、当代一の歌人とされる源俊頼の作品を主にして、1時間2首宛程度で読んでゆく。	
	中世文学特論Ⅱ	『中世文学特論Ⅰ』と同じ趣旨で、院政期に成立した『永縁奈良房歌合』を読む。『永縁奈良房歌合』は藤原基俊判の歌合で、源俊頼の判詞を載せた『奈良花林院歌合』の名称でも伝わる。両伝本に注目することで、同一歌合に対する両者の判詞を読むことができる。俊頼と基俊は院政期を代表する歌人であり、歌合披講和歌を丁寧に読みつつ、革新派と保守派の代表とされる二歌人の判詞に見える肉声を辿り分析することによって、当代の和歌世界の様相の一端を知ると同時に院政期歌論の実態に迫りたい。	
	近世文学特論Ⅰ	明狂歌壇の研究—その1—。(a)唐衣橘洲について。天明期を頂点とする江戸狂歌は、実にこの橘洲の狂歌活動に端を発している。(b)『明和十五番狂歌合』について。江戸狂歌書の嚆矢が同書で、その成立背景を探る。(c)四方赤良について。博識な大田南畝こと赤良は、橘洲にやや遅れて江戸狂歌壇に参加するが、その経緯とともに、天明狂歌大流行に至る前夜までの赤良の足跡を辿る。(d)朱楽菅江について。明和末から安永初にかけて、赤良の朋友である菅江が江戸狂歌壇に参入し、ここに江戸狂歌三大人が揃う。	
	近世文学特論Ⅱ	天明狂歌壇の研究—その2—。(e)橘洲編『狂歌若葉集』の成立について。赤良を排斥することによって成立したという定説について、その当否を橘洲の編集意図を絡めつつ検証する。(f)赤良・菅江編『万載狂歌集』の成立について。何が赤良を本書刊行に駆り立てたのかを考える。(g)天明狂歌大流行について。上記二書刊行の天明三年を機に巻き起こったこの大流行の実態と影響について、それを多角的かつ具体的に検証する。(h)赤良の転向と寛政改革について。	
	研究指導(古代)Ⅰ	Ⅰでは、古代文学を中心とした文学研究として自立した学術論文の執筆ができるように、次のような指導を行う。すなわち、古代文学研究の現状と展望、研究主題の確立、研究史の理解と把握、研究方法の確認と確立、研究資料の探索と収集、研究資料の整理、研究計画の立案などを行って、論文作成に取りかかる準備段階とする。研究主題は、瑣末的・末梢的ではなく、大きな展望のもとに発展性をもたせて設定し、独自の領域を確立できるようにするのが望ましい。	
研究指導(古代)Ⅱ	Ⅱでは、古代文学を中心とした文学研究として自立した学術論文の執筆ができるように、次のような指導を行う。すなわち、研究主題の再検討、研究史の再点検、研究資料の再整理、研究方法の再確認、研究計画の修正などを行って、実際に論文作成に取りかかるようにする。また、その成果についての問題点を指摘し、修正すべき内容、新たに考えるべき諸点、新たに参照すべき研究資料などを明らかにする。論文は、自立性ととともに、発展性のある内容であることが望ましい。		

研究指導（中世）Ⅰ	学会レベルで新たな研究として認知されうる論文を作成できるようにすることを目標にして、研究主題に沿った報告を課して指導を行う。授業（研究指導）の計画は、〈1〉中世の和歌文学とその周辺（主として中世前期作品）についての研究指導を行う。〈2〉研究方法の確立、資料の収集、研究計画の立案について指導する。〈3〉常時、学内外の研究者との交流をはかり、研究の活性化を促す。具体的には、①研究主題の設定から論文完成までのシミュレーション講義。②最近の優秀な研究論文を取り上げ、その構成、研究手順、問題意識などを検証する。③学生の現段階での研究状況報告を受け、修正して進むべき方向性を指導する。④最終週には研究の再確認をし、以後の方向性を指導する。	
研究指導（中世）Ⅱ	学会レベルで新たな研究として認知されうる論文を作成できるようにすることを目標にして、研究主題に沿った報告を課して指導を行う。授業（研究指導）の計画は、〈1〉中世の和歌文学とその周辺（主として中世前期作品）についての研究指導を行う。〈2〉研究方法の確立、資料の収集、研究計画の立案について指導する。〈3〉常時、学内外の研究者との交流をはかり、研究の活性化を促す。具体的には、①学生の現段階での研究主題と研究状況報告を受け、修正すべき面や進むべき方向性を指導する。②最終週には、研究の再確認をし、以後の方向性を指導する。	
研究指導（近世）Ⅰ	受講生の研究テーマがより精密かつ具体的になるよう、実際的にして有効な調査方法等について以下の順で指導する。（a）各自の発表を通して研究主題を確認するとともに、問題点の発見と整理を行う。（b）各問題点へのアプローチ方法を指導するとともに、資料収集手順等を指導する。（c）その成果について、各自の発表を通して今後の課題の整理を行う。（d）夏期休業中の研究作業について指導する。	
研究指導（近世）Ⅱ	前期に続く科目で、博士論文の一部となるような小論文作成の足がかりを目指す。（e）夏期休業中の成果発表を通して、残された課題と今後の研究展開を整理・確認する。（f）発表と検討・検証を繰り返すことによって、より充実した完成度の高い小論文の土台作りを目指す。（g）小論文の構成に向けての指導を行う。（h）小論文執筆に関する具体的な指導を行う。	
近代現代文学特論Ⅰ	明治期に刊行された雑誌『スバル』を検討対象にして、誌面を同時代に戻って読み解いていく。従来の文学史の概念にとらわれることなく、新たな文学史の側面に照明を当てることを目標にしたい。そのために、掲載作品だけでなく、「後記」・「消息」・「広告」欄等にも注意を払って読んでいきたい。その過程で、当然同時代の雑誌も参照することになる。	
近代現代文学特論Ⅱ	「近代現代文学特論Ⅰ」に引き続いて、雑誌『スバル』を祖上あげ、雑誌を通じて当時の文学状況を捉えるという視点を持って、1号ずつ読んでいく。授業参加人数にもよるが、演習形式で担当者を決めて、報告・質疑という形で進めていきたい。	
近代現代文学特論Ⅲ	宮沢賢治の構想した「春と修羅 第二集」について考察する。賢治草稿のコピーを用いて、草稿研究・生成批評について学ぶ。受講者は、草稿を解説・分析して報告する。演習形式。第1週～第3週「春と修羅 第二集」とは何か。〈詩集〉としての生成について第4週「三五 測候所」から第14週「七四 [東の空ははやくも蜜のいるに燃え]」まで、作品番号順に取り上げる。第15週 まとめ	
近代現代文学特論Ⅳ	宮沢賢治の構想した「春と修羅 第二集」について考察する。賢治草稿のコピーを用いて、草稿研究・生成批評について学ぶ。受講者は、草稿を解説・分析して報告する。演習形式。第1週 〈一九二四、四、六〉の心象スケッチ群の問題 第2週 「七五 北上山地の春」から第14週「二七 鳥の遷移」まで、作品番号順に取り上げる。第15週 まとめ	
研究指導（近代現代Ⅰ）	最終的な目標である博士論文作成を視野に入れて、研究の進行状況の確認、論文の下書きを兼ねた口頭発表、相互批評、レポートの提出、その添削等を行う。	
研究指導（近代現代Ⅱ）	各自のテーマをより明確にし、そのテーマに沿った参考文献を読破し、検討を重ねて論文作成に向かっていく。	
研究指導（近代現代Ⅲ）	1. 主として大正期の詩及び宮沢賢治研究についての研究指導を行う。2. 生成論に基づいた研究指導を行う。3. 研究方法の確立、資料の収集、研究計画の立案について指導する。4. 学内外の研究者との交流をはかり、研究の活性化を促す。研究主題にそった報告を定期的に求め、論文作成が計画的に進行するよう指導する。	
研究指導（近代現代Ⅳ）	1. 主として昭和期の詩及び戦後詩についての研究指導を行う。2. 研究方法の確立、資料の収集、研究計画の立案について指導する。3. 学内外の研究者との交流をはかり、研究の活性化を促す。研究主題にそった報告を定期的に求め、論文作成が計画的に進行するよう指導する。	

英語 文学 分野	英文学特論 I	「オウィディウス・シェイクスピア・現代」と題して、オウィディウス作『変身物語』(Ovid, “Metamorphoses”) がシェイクスピアを含む後代に、どのような影響を与えたかを考察する。オウィディウスを起源であると捉えるだけでなく、変身という中心概念を核に据えた、インターテクスチュアリティの確認作業も行いたい。まずは、シェイクスピアが劇作時に参照したエリザベス朝時代の翻訳や、現代の各種英訳を比較しつつ、オウィディウスの『変身物語』を読む。	
	英文学特論 II	英文学特論 I の展開を試みる。つまり、いくつかの先行研究を踏まえて、この主題の射程を探る。その際、古典的な研究に加えて、比較的新しい文献を参照し問題を考える。とくに、イギリスの幻想文学・神話学・比較文学者である Marina Warner の “Fantastic Metamorphoses, Other Worlds” (OUP, 2002) や、“Phantasmagoria: Spirit Visions, Metaphors, and Media into the Twenty-first Century ” (OUP, 2006) などを読む。アイルランドの作家 Ciaran Carson の著作も参照する。	
	英文学特殊研究 I	—文学批評と文学研究におけるフェミニズム— 1970年代以降、大きな衝動力のあった英米フェミニズムの立場からなされた文学批評と文学研究の輪郭を知るとともに、その代表的な論文数篇を吟味する。それによって、一般に作家・詩人の営為を批評し研究するときの立脚点の定め方、問題の立て方、議論の進め方等々の参考にする。まずは、Sandra GilbertとSusan Gubarの共同の仕事から教えることにしたい。	
	英文学特殊研究 II	—文学批評と文学研究におけるフェミニズム— 英文学特殊研究 I のテーマの続きである。とくに、日本人として、さらには日本人女性として文学批評あるいは文学研究にかかわるとき、どのような特異性が出現するか、どのような差異性を誇示するかを考えながら、日本の女性研究者たちの最近のすぐれた仕事にも目を注ぐことにする。	
	米文学特論 I	アフリカ系アメリカ人作家の作品を研究する。黒人文学全般に関する少しまとまった知識と思想をここで持てるようにする。James Baldwin (1924-87)の短編やエッセーを丹念に読むことで、人種差別とはどういうことか、差別と性との関係はいかなるものか、そして差別する側である白人の心理はいかなるものか、などについて考える。アメリカにおける黒人の歴史、先行する黒人作家たち、などについても授業と並行して研究を進めてもらう。その研究結果を発表する時間もとる。	
	米文学特論 II	アフリカ系アメリカ人であつ女性である作家の作品を研究する。黒人女性文学に関する少しまとまった知識と概念をここで持てるようにする。Nella Larsen(1891-1964)の作品を中心にすすめる。Larsenは長編Passing(1929)において肌の白い黒人女性を登場させている。女性作家ならではのメッセージを読み取りたい。彼女の先輩と後輩にあたる幾人かの黒人女性作家についての知識も必要である。これについては課題を与えるので授業と並行して研究してもらう。研究結果を発表する時間もとる。	
	米文学特殊研究 I	劇作家でありまた並々ならぬ散文の実績もありながら長く等閑視された後、めざましく復活しているスザン・グラスペルを対象とする。グラスペル個人の芸術的達成を受けとめることから始め、あわせて文化的、歴史的な位置づけを確かめることを目標とする。演劇から取りかかり個々の戯曲の突きつけるものを確かに、しかし流動的に受けとめながら相互の関連を意識し鳥瞰図的な把握をめざす。個々に取り上げても問題の多い作品だが、一幕劇 “Suppressed Desre”、“Trifles”、“The Outside” および “Trifles” の改作としての短篇小説 “A Jury of Her Peers” は修士課程などで読み終えているものと了解する。	
	米文学特殊研究 II	米文学特殊研究 I の後を受け、スザン・グラスペルの散文作品を取り上げる。方法としては、基本的には、演劇作品と同様に、厳密な読解を最重要な基盤とし、芸術的達成を受けとめることに変わりはない。先行研究、伝記を含む社会的歴史的な背景情報のとりこみにより、複眼的にアプローチし、把握／理解を創っていく。先行研究、背景情報はともに海外のものが主であり、検索、処理にエネルギーを要求されるだろう。ひとまずの成果、把握が達成された場合、視野を拡げて、グラスペルの戯曲と散文双方における創作の問題にも、伝記的な背景情報も絡めて、取り組むことを期す。	
	研究指導 (英文学) I	—問題の設定から論文の完成まで— 博士学位請求論文の作成を唯一の目標とし、着想から完成までの作業の基本的な流れを確かめながら、現実に1年後あるいは2年後の論文完成を目ざして作業を進める。良質の着想はどうしたら得られるか、見本となるような良質の業績とはどのようなものか、まずは着想・構想の練習から始め、テキストの無意識あるいは文学現象の無意識を露呈させ解説する修練を積む手助けをする。	

研究指導（英文学）Ⅱ	一問題の設定から論文の完成まで— 研究指導（英文学）Ⅰの続きである。ほとんど履修者個別の対応となるであろう。先行業績を点検し、するに値する作業を見定める手助けを個々具体的に行う。論文作成生活の方法は、ウンベルト・エコ/谷口勇訳『論文作法—調査・研究・執筆の技術と手順』（而立書房）の手ほどきを受けることにしたい。	
研究指導（米文学）Ⅰ	履修生のプロジェクトの方向付けと思考の発展・深化を支援し、立論を促すことを目標とする。そのために、まず、プロジェクトの吟味が必須である。履修生のプロジェクトを検討し、適切に絞り込むことから始める。ついで、プロジェクトに対応するテキストの十分な把握を確認、促進し、先行研究を確認し、その中にプロジェクトがもつ意義を位置づける。そして、このような作業の中で具体化してくる論点の独創性と発展性の確認、論旨の展開、表現上の説得性の構築など具体的に指導を進める。	
研究指導（米文学）Ⅱ	研究指導（米文学）Ⅰの続きと位置づけ、はじめは、Ⅰの到達点、問題点を確認する。次いで、それをふまえた表現作業を再開する。表現の彫琢、論点の確認、先行研究の一層のチェック、これらのスパイラルがセメスターの1/3ないし2/5は続く想定する。その後比重を表現に置き、立論を支援する。なお、英文で書く場合には、ネイティブ・スピーカーの教員にエディティングをあおぐことも可能であり、必須でもある。また、想定されている読者に合わせた文体の選択も重要なポイントである。口頭発表なのか、雑誌等への掲載をめざしているのか、学位論文の一部をなす予定か等が文体を決めるからである。	
英語学特論Ⅰ	動詞は、統語論および意味論の領域において、もともと精力的に研究が深められてきた分野である。Aats & Meyer, 1995. The verb in contemporary English: theory and description. (OUP)の前半部を批判的に検討する。①英語における文法関係、②目的語の意味論、③英語における二次的述語、④英語の完了形、をテーマにする論文を批判的に考察する。	
英語学特論Ⅱ	Aats & Meyer, 1995. The verb in contemporary English: theory and description. (OUP)の後半部を批判的に検討する。具体的には、⑤補文構造に対するコーパスに基づく事例研究、⑥名詞句と形容詞句の非決定性、⑦拡張された述語、動詞+副詞の結合形、⑩補文標識、⑧補文構造の変化パターン、⑨公的・私的発話動詞、をテーマにする論文を批判的に考察する。	
英語学特殊研究Ⅰ	発話の形式とコミュニケーションにおける機能について多角的に検討する。機能的文眺望、伝達の力学、情報構造（＝主題と題述）、発話行為、(会話の)協調の原理、丁寧さの原理、視点、情報のなわばり、関連性、カテゴリー化と認知プロセスなど、過去に提案された理論を可能な限り網羅的に検討し、問題の所在を明らかにする。また、発話の音声的側面のうち、文アクセントやイントネーションなどのプロソディに焦点をあて、それらの表す発話態度や「関連性」への貢献を考察する。	
英語学特殊研究Ⅱ	テキスト（又はディスコース）の構造と機能について多角的に検討する。ディスコースの構成要素である発話の特性を踏まえ、発話と発話の関係が作り出す構造に焦点を当てる。処理のしやすさ・明瞭さ・経済性・表現性に関わる諸原理を始めとして、結束性、主題の継承、時間と場所の移行の図式、前提・含意・モダリティなど、テキストの形成に関与する要因を多面的に検討する。ディスコースの特性の原理的な理解と並行して、特徴的なディスコースのデータを観察し分析する。	
研究指導（英語学）Ⅰ	2項対立的な分析は明快であるが、言語事実はそれをいつも許容するとは限らない。2項対立と相反する統語的段階性について考察することを目的とする。伝統的な分類を概観し、段階性と他の概念（プロトタイプ論・有標理論）との接点について観察する。示差的特徴に代表される2項対立的分析だけでなく、段階性を包括した分析は、論文作成の上で有用であろう。	
研究指導（英語学）Ⅱ	Arts, Bas. 2007. Syntactic Gradience: The nature of grammatical indeterminacy. (OUP)を検討する。範疇という概念が、古来、どのように取り扱われてきたかを総覧する。範疇を規定すると、2つの範疇の属性を共有する中間的な現象が観察される。語類、句、節における段階性の具体例を検証する。漠然および構文という概念と段階性の概念の関係を考察する。	
英語教育学特論Ⅰ	英語カリキュラム開発論を扱う。学習者の自律的な学びには、学習者が学びの意義と進展を実感できるカリキュラムが不可欠である。その視点から、国際社会で日本人が生きていくための基本的資質としてのコミュニケーション能力を育成するカリキュラム開発をめざす。その際に考慮されるべきは、日本のEFLとしての英語学習環境、到達目標、指導法、教材編成、評価方法、人的リソースとしての教師などの総合的要因である。これらを踏まえ、また、小、中、高、大の各発達段階を見通したカリキュラム開発能力を育成する。	

英語教育学分野	英語教育学特論Ⅱ	英語教師論を扱う。現代における英語教師の専門性の内容を追及するために、英語教師に対する社会の期待、教師の信念、役割論、授業内の発話分析、意思決定プロセスをテーマとして取り上げる。また、諸外国の英語教員養成プログラムのありかた、アクション・リサーチ、新任教員とベテラン教員の比較による力量の向上、異文化交流の実践、専門性を高める研修のありかたなどを検討し、高度な専門性を有する英語教員の育成方法について考察する。	
	英語教育学特殊研究Ⅰ	先進諸国の外国語教育政策・言語政策の動向を概観し、わが国の外国語（英語）教育の方向性を多角的かつ包括的に模索する。具体的テーマは、カナダのイマージョン教育、オーストラリアのLOTE教育、韓国の小学校英語教育、フィンランドの国語・英語教育、イギリスのナショナル・カリキュラムと多文化多言語教育、EUのソクラテス計画と多文化多言語教育、CEFR（ヨーロッパ共通参照枠）、日本の英語教育史、学習指導要領の変遷など。	
	英語教育学特殊研究Ⅱ	「異文化間コミュニケーション」をわが国の英語教育が扱う一分野として確立することを想定し、その妥当性と課題を考える。日本人の異文化接触の機会が急激に増大するのに伴い、英語教育の目的は読解力育成中心から対面コミュニケーション能力重視に移行しつつある。それに伴い、中等教育においても「異文化間コミュニケーション」に関する教材が増大傾向にある。「異文化間コミュニケーション」を英語科で扱う際の課題としては、教材作成、指導法、生徒の能力測定の3点が考えられる。それぞれについて具体案を検討する。	
	研究指導（英語教育学）Ⅰ	英語教育学の発展へ寄与することを念頭に置き、博士論文の作成指導を行う。1) 英語教育の現状認識に基づき、研究課題を焦点化し研究目的を明確にする。2) 研究課題と研究目的に応じて、学習者、教授法、各技能の指導法、教師、カリキュラム、教材などの中から研究対象を選定する。3) 研究課題に関する先行研究を網羅し、仮説を設定する。4) 主な研究アプローチには、実証研究、実践研究、文献研究の3種類ある。研究目的に合わせて適切なリサーチ・デザインを設計する。	
	研究指導（英語教育学）Ⅱ	「研究指導（英語教育学）Ⅰ」に引き続き、英語教育学分野における博士論文の作成指導を行う。1) リサーチ・デザインに沿って適切な手順でデータを収集する。2) 教育統計学の知識を駆使して得られたデータを分析・解釈する。3) 得られた結果を仮説と対照させて考察し、結論を導く。4) 研究の課題を明らかにし、さらなる英語教育学の発展への寄与を模索する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人間文化研究科人間生活科学専攻(修士課程))			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
科 基 礎	Developing Critical Thinking Skills	クリティカル・シンキングは他人の意見を批判的に見るのではなく、情報や知識を複数の視点から注意深く、かつ論理的に分析する能力である。哲学、心理学、教育学、社会学、文学のようにそれぞれ独立して発展してきた学問が、複合的な問題分析と解決案を要求するようになったことから学際的なアプローチが重要となった。本講では方法論としてのクリティカル・シンキングにとどまらず態度としてのクリティカル・シンキング力の育成も目指す。(講義での使用言語は英語である。)	
	Critical Reading and Writing	クリティカル・リーディングでは、テキスト理解のプロセスへの認知的参加が可能となる能力を育成する。そのために必要に応じて使い分けられるべきリーディングの種類、テキストの批判的分析方法を考察する。クリティカル・ライティングでは、説得力を持った論理展開ができる能力を育成する。そのためにargumentative essayの書き方のプロセスを例に、論理構造について考察する。(講義での使用言語は英語である。)	
共 通 科 目	家族関係論	内外の家族研究(社会学・人類学・心理学領域)の文献を講読し、家族研究理論・方法論および現代の研究成果の概要を学ぶ。具体的には、機能論・形態論・制度論等従来からの理論に加え、構築主義的アプローチなど近年の当事者視点による研究にも触れる。社会問題と絡めて「家族の危機」が叫ばれている現在であるが、家族の重要性を自明のものとするのではなく、その理由を具体的・客観的に説明できるような知識を得ることを、本授業の目標とする。また、家族の逆機能的な面や抑圧的な面にも目を向けて議論する。	
	ヒトと環境	ヒトの健康と安全に関する環境問題を学び、環境にやさしい生活のあり方について討論し、理解を深める事を目的とする。ヒトの誕生と環境、ヒトの遺伝情報と環境、放射性物質のヒトへの影響、ヒトの病気と環境、生活環境の保全などについて英語の論文を読みながら解説をする。環境にやさしい生活について各自で提案し、討論も行なう。評価は理解の到達度、出席、ビデオを見ての感想文等の総合評価による。	
	健康科学	医学週刊誌Lancet、New England Journal of Medicineに掲載された生活習慣病等に関する記事・論文、およびNewsweek誌に掲載された健康記事を毎週輪読する。英文解釈の勉強をすると同時に、世界における生活習慣病の問題点を知る。	
	環境成長学	人間の成長と社会、自然環境の相互作用について多様な現地データを用いて解説する。特に日本人の個人追跡データと環境の相互作用、日本人の大型化と環境の変化、タイの事例を通じたアジアの近代化に伴う身体の大型化、中国の社会・自然と成長・成熟の関係、ミャンマー人の体型の地域差と環境など。	
	生活情報論	生活情報の理論と実態を深く理解し活用することは、現代社会を生き抜くために必須となっている。本授業では、この課題に深く迫る。授業形態としては、講義・討議及び事例研究と課題レポート作成・発表を行なう。目標は、消費生活に必要な情報の収集・活用・廃棄・蓄積等の理論と実際を理解し、情報化の進展を享受できる生活のための識見の涵養をめざす。授業計画としては、メディア論、情報テラシー、最新の生活情報(衣食住、情報余暇・娯楽・教育・医療など)の情報源とその特徴、ネット社会の問題点などを扱う。	
	統計的調査方法論	統計的調査方法論全般について講義する。内容は、統計調査方法論(企画と設計、調査の実施、審査と集計、統計の誤差、標本設計、統計と分類など)、国際比較のための統計学、研究者が行う小規模の調査研究方法論としての標本調査法(企画から解析まで)、統計的実験計画と検定と推定の方法。	

		<p>(概要) 研究対象が実在する「現場」を通して、その実態と課題を理解するため、事例研究および演習を行う。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(12 生田 茂/8回) 「地球規模の環境問題」を概観するとともに「持続可能な社会づくり」に挑戦している各国の環境教育、理科教育の現状と課題について学ぶ。また、我が国における「持続可能な開発のための教育」全国環境学習フェアや環境教育リーダー研修基礎講座などの動きを踏まえながら、小中学校の実践事例を学び、検討を加える。また、地球温暖化の原因物質(温室効果ガス)といわれる二酸化炭素「環境ホルモン」の原因物質といわれる DDT、BHC、ダイオキシンなどについて、分子模型や分子軌道計算を用いて科学的な理解を深める。</p> <p>(17 松本暢子/7回) 自然環境と共生するライフスタイルの普及、啓発のために、地域における環境教育は重要である。その実践について、学校と地域住民との協働の事例をもとに、その可能性、有効性を検討する。</p>	オムニバス方式
		<p>(概要) 調査者自身が研究対象が実在する「現場」において研究活動を行う”フィールドワーク”に関する諸方法論と事例を紹介し、併せて演習を行う。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(2 大澤清二/7回) 日本の島嶼部(八丈島、青ヶ島、石垣島、竹富島など)の生活状況に関する実査データ、さらにタイ、ミャンマー、ネパールの都市と農村、などの生活状況データをもとに討議し演習する。</p> <p>(23 益本仁雄/8回) フィールド調査の概要、仮説の設定からアンケート票の作成、フィールドの設定と情報収集、調査対象の選定、調査の実施、面接聞き取り調査と事例、調査結果の整理とまとめ。</p>	オムニバス方式
		<p>現代社会においては、人間はその生涯にわたっての学習を求められるようになってきた。その学習課題は自己の生活の様々な側面に関する改善である場合が多いので、その学習方法は学校教育で一般的に行われている方法とは異なる。言わば問題解決学習とでもいえるべき方法が中心となる。又、社会生活の常として、生涯学習においても小集団での活動を無視できない。これらの点について、各種の国際的な宣言や、日本国内での理論史や実践史を紐解きながら、系統的に実践的に整理をしてみる。</p>	
栄養化学分野	栄養生化学特論	<p>これまで基礎栄養学、栄養化学を履修した学生は、糖質、脂質、タンパク質といった個々の栄養素の栄養学を学んできた。本講義では、穀類、豆類、野菜類といった食品ごとに栄養学をとらえた講義を行う。次に、生体調節機能に関わる栄養素、非栄養素について最新の情報を取り入れながら理解を深めていく。具体的には、食物繊維、オリゴ糖、構造脂質、ポリフェノールなどの食品中の分布や生理作用について文献情報を加えながら学習する。教科書は英文の最新栄養学の教科書を用い、各自が内容について事前に調べ、発表・討論する形で授業を進めていく。</p>	
	栄養生化学・細胞学実験	<p>(概要) 栄養生化学・細胞学についての実験の基本技術を修得し、研究課題を推進するための基礎を学ぶ。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(3 青江誠一郎/7回)</p> <p>小動物を用いた栄養生化学実験の手法の修得とその解釈について理解することを目的とする。特に、メタボリックシンドロームモデル動物の特性を理解し、どのような評価をしていくべきか実験を通じて理解する。実験計画、飼料設計、処置、分析、解析に関する一連の技術を学び、独自に研究課題を推進するための基礎を養うことを目標とする。さらに、ノックアウトマウスの代表的な動物について理解し、適切なモデル選択ができるように解説する。PCRと制限酵素を用いたGenotypingやReal-time PCRによるmRNAの発現を調べる手法についても基本技術として習得する。</p> <p>(26 田中直子/7回)</p> <p>培養細胞を使うことによって、具体的にどのような研究が可能になるか、また、実際に体の中にある細胞とはどのような点で異なり、どのような注意が必要かなど、培養細胞を利用した研究の実践について学ぶ。また、無菌操作の基本、細胞の継代、細胞増殖曲線の作成、細胞の代謝活性測定などの基本的な操作を経験することによって、細胞の性質を実感してもらおう。時間に余裕があれば、細胞に蛍光タンパク質の遺伝子を導入し、細胞が蛍光を発する様子を観察したい。</p> <p>(3 青江誠一郎・26 田中直子/1回)</p> <p>栄養生化学・細胞学実験総括</p>	オムニバス方式
	分子細胞学	<p>栄養成分や食品成分が、体の中でどのようにはたらき、また代謝されているのか、メタボリックシンドロームはどのような疾患なのか、細胞レベルさらには分子レベルでの理解が必須な時代となった。本講では、基本的な細胞生物学や分子生物学について学び、さらに、肝臓、腎臓、小腸、脂肪組織といった主な臓器中で機能する細胞の特徴を多面的に理解できるようにする。また、研究レベルで多用される分子生物学的手法や、糖尿病の分子生物学などに関する最新のトピックスも紹介する。</p>	

食品・機能学分野	食品機能学特論	日本や中国の一部では、今なお、自然発酵法による食品の製造が伝統的に行われて、これら秘伝とされている方法を聴聞により再現すること、また、現地での発酵食品を採取し、これに関与している微生物を単離同定して、その特性を明らかにすることは、今日の食生活の諸問題を考察する上でも重要であると考えられる。修士課程では、論文を仕上げるために必要な方法論を体得する。内外の学術雑誌から適切な論文や総説を選択して、論述、考察する。研究事例として、有機合成研究、食品呈味成分、フレーバー成分、呈色成分、発酵科学研究等を対象とする。	
	材料機能学特論	プラスの電荷を持った物質とマイナスの電荷を持った物質とが互いに引き合う相互作用が、多くの自然科学現象の駆動力となっている。これらを理解することで、様々な分子間相互作用を正しく解釈することができる。この当たり前の現象も、高分子が絡むと独特の興味深い挙動を示す。具体的な例を挙げながら、その典型的な挙動を学び、さらに高分子間のイオン複合体を用いた様々な生体機能材料への応用例を説明し、高分子イオンコンプレックスの基礎、利用の現状、様々な問題点とそれに対する取り組みを解説する。	
	食生活安全学	食品の安全性を確保する上で問題となる危害因子として(1)ダイオキシンや有機水銀など有害な化学物質の混入による化学的因子、(2)ガラス片の混入や放射能汚染による物理的因子及び(3)病原微生物に汚染された生物的因子が挙げられる。中国産冷凍ギョウザ事件やメラミン混入事件等により、消費者の食の安全に対する信頼は大きく揺らいでいる。そこで、本授業では、食の危害因子である有害化学物質や、現実に食の安全を侵している原因の過半を占める病原微生物について学ぶと同時に、食の安全制確保は如何にあるべきかを考える。	
	食品微生物学特論	日本や中国の一部では、今なお自然発酵法による食品の製造が伝統的に行われ、これら秘伝とされている方法を聴聞により再現すること、また、現地での発酵食品を採取しこれに関与している微生物を単離同定してその特性を明らかにすることは、今日の食生活の諸問題を考察する上でも重要であると考えられる。内外の学術雑誌から適切な論文や総説を選択して、論述、考察する。研究事例として、腐敗、変敗、発酵などの過程における微生物制御とその機構を対象とする。	
	食品・機能学領域実験	(概要) ヒトがこの世に誕生して、最初に行う目的行動は「食べる」ということ。本授業ではそのライフステージ全体にわたっての「食」を科学し、「食」と「ヒト」の関係性(機能性)について明らかにする。(オムニバス方式/全15回) (4 大森正司/8回) 食品成分の有機合成実験、分離実験、機能性測定実験を行い、理論と共に実験科学的に比較検討する。 (6 市川朝子/6回) 数種類の食べ物を対象として、パネルによる官能評価を行い、それらの食べ物の適切な物性測定条件をレオメーターで検索し、その結果から相互関連性を評価する方法を習得する。 (4 大森正司・6 市川朝子/1回) 食品・機能学領域実験総括	オムニバス方式
調理科学・食嗜好学分野	調理科学特論	調理操作によって生じる様々な食品の変化に関わる現象について、水と熱との関連性を踏まえて調理科学の立場から講述する。食べ物のおいしさは水、水の構造と性質・水の状態の捉え方、食品中の水・調理に及ぼす影響、水の三態と調理、溶媒としての水と調理、ゾルゲル食品と水の関わり、加熱調理と水、水溶性高分子の種類と特徴・調理への応用などのなかから学生の関心度、修士論文テーマとの兼ね合わせを考慮して内容を考慮する。	
	調理科学特論演習	調理科学特論で学んだことを基として、学生の修士論文テーマなどに関連のある分野の研究成果に対する理解が深められるよう、演習の前半は主に学生の修士論文で扱う食品の調理性についてFood Cookery を輪読し理解する。後半は学生のテーマに関連した研究論文を国内外の学術論文から検索し、その概要をまとめ発表することで、科学的なものの考え方、総合力を身につける。	
	食嗜好学特論	食物の物理的・化学的性質と、食べる側の人間の生理的・心理的状態、および、食物と人間をとりまく環境が複雑に関与し、食物のおいしさは決定される。ここでは、食物の特性であるおいしさの直接要因およびおいしさの知覚を講述する。また、食品の調理方法が食物のおいしさにどのように関与しているのかを講述する。食物のおいしさを科学的・心理的・文化的な視点から取り上げる。講義を通して、食物のおいしさとは一体何であるのかを学び、食物のおいしさを創出する調理方法を理解することを目的とする。	
	食嗜好学特論演習	食物の物理的・化学的性質と、食べる側の人間の生理的・心理的状態、および、食物と人間をとりまく環境が複雑に関与し、食物のおいしさは決定される。ここでは、食物のおいしさに関連する国内外の学術論文を輪読する。演習を通して、食物のおいしさを評価するさまざまな研究手法について学び、調理学あるいは食品学の研究を行う上で必要な知識を習得すると共に論文のまとめ方あるいは書き方を学ぶことを目的とする。	

医療・保健栄養学分野	病態・高齢者代謝学	豊かな食生活と便利な生活を背景として、先進諸国においては疾病構造が変化し、高血圧、虚血性心疾患、脳梗塞、糖尿病、動脈硬化症状などの生活習慣病が問題となっている。本授業では、これら生活習慣病や健康に問題を抱える高齢者について、高齢者の生理を基本に、疾患の原因、疾病の予防と食生活、さらに運動や日常生活のあり方を講義すると同時に、履修生と最近の高齢者の「食と健康」に関連する文献や専門書の精読も行う。	
	栄養疫学特論	健康的な地域づくりのためには、住民、行政、専門家を含めた関係者が具体的なイメージを描き、相互に確認し、実現にむけてそれぞれの役割を果たしていくことが必要である。地域保健活動に従事する医師、保健師、看護師、栄養士などの専門家は、自らの活動についてQOLや経済評価を含むアウトカム評価を行い、地域での予防活動や医療政策策定に結びつけることが必要である。本講座では、専門家として地域での活動の実施計画、評価に疫学的手法を取り入れることが出来るように、疫学に関する基礎的な知識の講義と実践例の紹介を行う。	
	栄養疫学特論演習	生活習慣病の一次予防には、遺伝要因や環境要因、食生活を主とするライフスタイルなど多種多様な要因が関連している。これらの要因と生活習慣病との関連についての疫学研究からの成果は近年急速に報告されるようになってきているが、データの収集、解析方法、結果の解釈が、必ずしも厳格に行われているわけではない。栄養疫学研究の研究状況について理解するために、疾病予防、栄養疫学、環境リスクをテーマとする論文を中心にとりあげ、最新の科学的根拠のある情報を得る力を習得する。また、実際に栄養疫学研究をデザインし、科学的研究方法を習得する。	
	公衆衛生学特論	アレルギー病は、先進国で患者が増加し公衆衛生上の問題にもなっている。本特論ではアレルギーについて基礎から疫学まで論ずる。 1) アレルギーとは—I型アレルギーと自己免疫疾患 2) 生活環境・行動様式の変化とアレルギーの増加 3) 清潔仮説の免疫学 4) アレルギーの疫学 5) アレルギーの疾病負担 6) アレルギー各論：室内塵、花粉、食物、職業アレルギー 7) アレルギーは予防できるか	
環境サイエンス分野	生命環境特論	地球上に存在する生命は実に多様であるが、その基本単位は「細胞」である。本講義では、細胞の基本構造を理解すると共に、それを構成しているタンパク質、遺伝情報であるDNAなどについて解説する。さらに、細胞と外界（環境）との関わり合い、細胞分裂や発生・分化のしくみなどを学ぶことにより、地球上の生命の持つ共通性と独自性を見いだし、生命のもつ面白さ、不思議さについて考えて行きたい。	
	生命環境特論演習	細胞生物学の分野、特に、細胞の分裂・発生・分化に関わる研究について、最新の研究並びに過去の価値ある研究の学術論文（英文を基本とする）を学生自ら読み解くことで知識を深め、さらに、その過程で、研究目的設定の仕方、それを実証するための実験計画の進め方、得られた結果の解釈の仕方などについて、習得することを目指す。	
	生活環境特論	環境にやさしい生活はどうあるべきかを考察することを目的とする。自然との共生について自然体験活動、グリーンツーリズム等をどうして考える。特に体験をどうして緑色植物の役割について学ぶ。環境にやさしい生活を提案し、実行するために障害となっている問題について検討する。主として、講義を中心とするが、3～4回はフィールドに出て体験活動を行なう。	
	生活環境特論演習	私達の便利な生活によって、環境が汚染されている実体を実験、調査することを目的とする。特に、水環境について水質調査を行ない改善策について考える。また森林の破壊について栃木県の足尾の松木村を中心に調査し、緑化運動に参加し、森林の役割についても考察する。	
	環境衛生学特論	本特論では水問題を取り上げる。今世紀は水戦争の世紀といわれている。水の豊かな日本では他人事として考えられるが、国際的には貧困の削減、健康状況の改善、災害の軽減、生態系保全などあらゆる問題に水は深く関わっており、水問題の解決が重要な課題となっている。このようなグローバルな状況を把握しながら、資源としての水、利用方法（仮想水など）、水と健康（微生物汚染や微量化学物質汚染）などの問題を取り上げていく。	
	地球環境特論 I	地球環境と人間・生物活動の関連を、地球の誕生から現在そして未来まで時系列で考究する。人類や生物は地球環境と密接に関連して共進化してきた。地球上における海洋の生成は生物の誕生を可能にし、地球の強い地球磁場の生成は、地表に到達する放射線を著しく軽減し浅海に光合成生物の誕生を可能にした。光合成による地球環境の酸素濃度の増大は、生物の進化に大きく寄与し、オゾン層の形成は陸上に生物圏の存在を可能にした。科学の発達は地球温暖化等、人間や生物の生存を左右するほど巨大となった。今後の人類と地球のあり方を論ずる。	

生活環境学専修	地球環境特論	地球環境特論Ⅱ	地球温暖化、オゾン層の破壊、内分泌かく乱物質による「化学汚染」、酸性雨、生物多様性の減少、森林の減少、砂漠化の拡大、食料危機、エネルギー危機などの地球規模の「環境問題」の歴史と現状、発現のメカニズムについて学ぶ。また、これらの地球規模の「環境問題」に及ぼす人間活動の影響について学ぶ。これらの「環境問題」の発現の原因を理解し、解決の道を探るために、化学や生物、地学や物理などの基礎知識を用いて科学的なアプローチを行う。		
		地球環境特論演習Ⅰ	人間生活科学特別研究と関連し、南極や北極域における環境変動と生物構造の変遷に関する研究、生物の生存にとって高温の極限環境である温泉や火山地帯における研究、湖底堆積物などによる環境変遷史や長期環境変動に関する研究および都市水域環境における人為活動による外因性内分泌攪乱物質（環境ホルモン）や石油関連物質の環境地球科学的研究に関連する英文を含めた著書や論文等の講読や演習を行う。これらの著書や論文と関連するガスクロマトグラフィ－・マススペクトロメトリーなどの分析方法についても検討する。		
		地球環境特論演習Ⅱ	地球規模の「環境問題」を科学的に理解するために、実験や理論科学的なアプローチを試みる。酸性雨や「環境ホルモン」の汚染などの現状を観測（測定）するとともに、地球温暖化の原因物質（温室効果ガス）といわれる二酸化炭素、「環境ホルモン」の原因物質といわれる DDT、BHC、ダイオキシンなどについて、分子模型や分子軌道計算を用いて科学的な理解を深める演習を行なう。これらの演習を通して、地球規模の環境問題を考える上での科学的な基礎知識を学ぶ。		
	環境マネジメント分野	環境教育特論	環境教育特論	環境教育の歴史をたどり、公害教育、自然保護教育、地球環境教育について整理する（第1期）。環境教育の今後の方向性やESD（持続可能な開発のための教育）について議論を進める。特にESDについては詳しく検討する（第2期）。さらに、環境教育の基盤となる自然体験について、アメリカに事例と日本の事例とを比較検討しながら、日本型自然体験の原型を探る（第3期）。	
			環境教育特論演習	環境教育の中でも、自然体験の理論とプログラム開発についての集中講義。長野県小諸市の施設で2泊3日程度の演習を行う予定。自然体験のプログラムづくりに重点を置き、学生が開発したプログラムをお互いに批評しながら、よりよいプログラムを作成する。時間に余裕があれば、地域の子供たちを招いてプログラムを実践し、改良を加える。	
		環境アセスメント特論	環境アセスメント特論	自然保護だけを論ずるのであれば、何もしないこと（Zero Option）が最善であるが、人間が居住する地域では、その対処法では問題の解決にならない。実社会では、どこかで人間活動と自然の存続との妥協点を見出す努力が必要になり、それが環境アセスメント（影響と評価）を実施する第一義となる。本論では、この環境アセスメントの重要性とその解析手法、さらに、この方法を社会化するための方法論を、具体例を以て理解する。	
			環境アセスメント特論演習	環境問題への意識の高まりにより、環境問題を社会経済的に評価したいという社会的要請がある。しかし、現在までの環境評価は自然科学的な評価に終始しており、開発か保護かという対立への解決策を未だ見出せない状況にある。そこで、本論では、環境の価値を評価する方法として考案され、使用され始めている、仮想市場評価法（Contingent Valuation Method）やコンジョイント法、一対比較法を用いて評価する方法を学ぶ。実際には、PC上でアプリケーションソフトを用いて計算し理解を深める。	
		環境政策特論	環境政策特論	この講義のテーマは、「環境と政策」である。講義の中心は、いかに環境の保全と利用を考えたらよいかといった環境の管理や利用をめぐる経済や経済法、さらに社会制度などの論点整理や評価手法を通じて経済政策の検討を主としながら、環境の適正な保全と利用の政策を探り学ぶ。特に、コモンプール（宇宙、大気、海洋、森林、水、野生生物など）の管理問題に焦点をあてながら施策の判断基準を探る。	
			環境政策特論演習	この演習では、環境政策について、コモンプールについての管理事例（宇宙、大気、海洋、森林、水、野生生物など）を踏まえながら、静態的・動態的に施策の判断基準を検証することを中心とする。特に、環境というミックス財の管理についての基本的な考え方とともに、私的財、クラブ財、共有資源、公共財といった人間の所有権からみた各財の特徴を踏まえつつ、持続可能な最適管理への施策基準を探る演習となる。	
環境思想史特論	環境思想が誕生した背景とその発展・多様化について歴史的側面から理解を深め、現代における環境問題解決への糸口を探ることを目的とする。授業計画は、日本における環境問題の歴史・欧米の環境思想史・江戸期思想家と環境思想・環境教育と環境思想である。江戸期思想家については、特に熊沢蕃山、石田梅岩、安藤昌益、を事例に行う。本特論は、講義、及び学生によるプレゼンテーションとディスカッションによって実施する。				

	自然学校特論	自然体験型の環境教育の拠点である「自然学校」の中でも、草分け的存在である財団法人キープ協会（山梨県北杜市清里高原）を訪問し、自然（森）の中での様々なインタープリテーション活動を体験しその考え方を学ぶ。その活動には「アート、サイエンス、社会科学、人間関係」などの多様な切り口がある。インタープリテーションという「伝える技術」は、広くコミュニケーションの手法として応用が出来る手法であり考え方でもある。一方的な講義ではなく参加体験型のワークショップ方式で行う。	
	野外教育特論	野外教育における歴史的背景・教育哲学・指導法を理解し、野外教育が現代社会にとってどのような意義があるかについて考察することを目的とする。授業計画は、野外教育の誕生と歴史・デューイとシャープの教育哲学・野外教育の指導法・わが国における野外教育の展開と事例である。本特論は、講義とショートプログラムの実際体験、及びディスカッションによって実施する。	
生活環境デザイン分野	衣生活材料特論	衣生活を支える材料に関する一般的ならびに最先端の知識の習得を目的とする。衣生活にとって基本的に何が必要か、加齢とともに変化する必要度を整理し、地球環境を考慮し、それに適した材料とは何かを考え、衣生活材料が今後どのように進化していくべきかを論じる。	
	衣生活材料特論演習	衣生活を支える材料の進化のあるべき姿を考え、それに応じた材料を開発するための基礎的な知見を整理する。さらに進んでこのような材料を生産・使用・廃棄することによる環境に対するインパクト要因を想定し、環境負荷を低減するための原料選定、生産システム最適化、環境リスク管理等をシミュレーションする。	
	生活環境機能学特論	我々人間を取り巻く環境の中で、人間に最も近接した衣生活環境を取り上げる。人間が、健康かつ快適な生活を続行するための諸要素について論説する。1. 生活環境機能学の意義と目的 2. 衣生活環境と機能 3. 衣生活環境と造形材料 4. 快適な衣生活環境 5. 外観・形態・機能の変化 6. 衣服気候を左右する要因 7. 温熱生理的快適性 8. 温かさの調節、涼しさの調節 9. 着衣性能とその特性 10. 生活環境とその特性 11. 生活環境の色とアビランス 12. 色彩と素材の効果性 13. 衣服と生活空間 14. ディスカッション	
	生活環境機能学特論演習	人間を取り巻く環境の中で、人間に最も近接した衣生活環境を取り上げる。人間が、健康かつ快適な生活を続行するための諸要素について、更に理解を深めるために、主として国内および国外の論文を輪読する。また、文献の内容によって、実験を伴う場合もある。	
	被服管理学特論	天然・化学繊維に、快適、健康、安全、ファッション性を追求した様々な機能性を付与した加工が行われている。この授業では、機能加工の特徴、加工方法、評価方法について講義形式で行なう。繊維の性質と機能加工、人間の生理作用や感性と機能加工、機能化繊維と機能化ウエアとの違い、機能性と人間・取り巻く環境との関係、地球環境負荷の少ない加工方法などについて講義する。この際、繊維・被服の加工の変遷を社会、経済、環境からの影響についても説明する。また、加工した繊維・被服の取り扱い方法、洗濯方法などの消費科学的な性能について講義する。	
	被服管理学特論演習	繊維・被服の機能加工は時代とともに変化し、加工剤が人間・取り巻く環境への悪影響が重要視されている。この授業では、環境にやさしい材料やその機能加工に着目し、材料の特徴と加工法に関する国内外の論文を調査して精読し、その内容やトピックスについて発表する。発表することによって、論文に関する知識が深まることのみならずスライドの効果的な作り方、プレゼンテーション能力やディスカッション能力を養うことができるよう指導する。	
	住居学特論Ⅰ	授業の目的：急速に進展する高齢社会や人口減少時代に対応できる都市の住居・住環境のあり方について、空間的および社会的両面から検討したい。特に住居系市街地（木造住宅密集地域および計画的開発地域）がかかえる諸問題を中心に、その形成過程と問題発生との関係や、住宅政策と住環境整備の効果について説明し、解決すべき計画課題について論考する。さらに、成熟化する都市において顕在化しつつある居住者の主体的な取り組みによる住宅・住環境改善や新たなまちづくりニーズについて検討し、その可能性について考えたい。	
	住居学特論Ⅱ	戦後の我が国の住居は、公団等で採用された住居計画理論が広く普及し現在に至っている。しかし、近年の少子高齢化・IT化等の社会的背景、ライフスタイルの多様化、環境に対する取組み等、住居を取巻く状況は急激な変化を迫られている。その中において風土に根ざし環境と共生しつつ、快適で、安全で、利便性が高く、健康な住まいはどうあるべきか？授業は、文献をはじめ、現存する住宅見学までを含め数々の事例をもとに特に1.住居と風土2.住居の変遷3.住居の機能4.住居の構成を中心に考究する。	

	住居学特論演習	都市における住居・住環境のあり方について、空間的および社会的両面から検討したい。特に住居系市街地（木造住宅密集地域および計画的開発地域）がかかえる諸問題を現地調査やデータ解析によって、計画課題を検討する。さらに、居住者の主体的な取り組みによる住環境改善や新たなまちづくりの実践に関与しつつ、その可能性を考える。	
	住環境特論	人間と住環境の関わりを文化の視点からとらえ、特に近代化の問題に注目し、伝統的住文化を見直し、環境と共生した暮らしのあり方を考える。現代社会における生活様式の本質を考察し、「豊かで美しい生活」を追求する。生活環境には、資料的環境、機構的環境、組織的環境、空間的環境、文化的環境などがあり、狭義の住空間だけではなく、生活環境全般を対象として学ぶこととする。文献資料の講読などを通して、研究の理論と方法論を学ぶ。	
	住環境特論演習	人間と住環境の関わりを文化の視点からとらえ、特に近代化の問題に注目し、伝統的住文化を見直し、環境と共生した暮らしのあり方を考える。現代社会における生活環境の利便性や快適性を問うことにより、様々な課題が見えてくる。資料的環境、機構的環境、組織的環境、空間的環境、文化的環境などの生活環境に関する今日的な課題を設定して、文献・資料調査や現地調査などを行い、現状を明らかにする。また、生活環境をよりよいものとするためのシステムを考察することを目的とする。	
	生活環境学特別講義	生命の誕生と生物圏の歴史を横軸とし、その進化に深く関連する地質学的物質循環や生物地球化学的物質循環を縦系とした生命誌を以下のキーワードを中心にして解説する。生命の創出・酸素の蓄積・二つの生物圏・色々な生態系の出現・ヒトの出現など。1992年のリオサミット以降、地球温暖化に代表される地球環境問題が顕在化した。環境研究の50年史・現状・これからの展望について野外観測、リモートセンシング、計算機科学の発展を踏まえて言及する。	
基礎教育分野	児童発達臨床学基礎理論	発達心理学では、子どもの発達を明らかにするために観察法、検査法、実験法、インタビュー法などのさまざまな方法論を駆使してきた。中でも、C. Darwinが1839年生まれの子を観察した日誌から発達のさまざまな側面を考察したことは、観察法の始まりとされている。観察法に焦点化し、内外新旧の文献による歴史、理論の解説と、観察技術、結果の分析、利用法などを含めた観察法の実践を行うことにより、観察法について掘り下げて考察する。	
	乳幼児発達臨床特論	乳幼児の発達とそれを支えていく育児や保育に関する臨床的な問題を取り上げて、その問題に関する基本的な論文を精読することを通して、乳幼児と保護者及び保育者に関する臨床的な研究方法と現在の研究の到達点について学んでいく。臨床的な問題として取り上げたいのは、特別な支援が必要な子どもたちへの支援、保育者と子どもの関係性の在り方、子どもたちの遊びの意義と支援の在り方、親子関係や仲間関係の成立過程と支援の在り方、子育て支援、就園や就学に伴う環境移行等である。	
	臨床教育学特論	現代日本の教育における大きな課題の一つは、臨床経験を「臨床の知」として昇華させていく方法が未成熟であることだとも言えよう。そのため、教育実践のノウハウの蓄積が不十分となり、結果的に教育の方法や教育効果について、実践レベルで様々な問題が指摘されている。特に、児童生徒の意識の急激な変化が、従来の教育方法への大幅な改革を迫るという現象も散見されるようになって来ている。このような現象への対応として、一種の「実地研究」の技法習得を含め、このような児童生徒とそれと向き合う教員の実践に学び、教育学を臨床的に深めていくことを目指す。	
	生涯発達心理学特論	人が一生涯に渡って発達していくプロセスを、環境との関係から捉えていく視点を理解することを目的とする。具体的には文献等の購読を通して乳児期から発達段階を踏まえた検討を進めるが、そこでは子どもの発達のみならず、日常生活において子どもに何らかの形で関わる大人との関係の変容にも着目し、社会的文脈に重点を置きながら生涯発達を考える。	
	保育臨床特論	保育実践を理解する視点の一つとしての保育臨床について具体的な保育現場での事例を通して検討する。その際に、保育者自身のあり方（保育者の専門性）と保育者間の同僚性についても重要な視点として検討する。	
	乳幼児発達保育研究特論	乳幼児期の「子どもが発達する」とはどういうことか。「乳幼児を保育する」とはどういうことかについて、受講生の興味・関心を切り口にしながら検討することを目的とする。そのために、関連する先行研究を読み込む、また、フィールドに出向いての保育観察を行うという方法を用いる。受講生それぞれの興味関心から出発し、最終的には乳幼児期の子どもの発達や保育を「子どもの最善の利益」という視点から再考察する。この作業を通して、乳幼児期の発達と保育を子どもの視点から丸ごと捉える方法についても研究する。	

幼児教育実践演習	保育所や幼稚園、特別支援学校などの保育現場に直接参加することを通して、幼児教育の内容と方法そして展開について実際にふれ、具体的な実践体験を基に理解を深める。保育現場に出る際の諸注意や観察の仕方、記録の取り方とまとめ方、保育者の援助の見方、保育者間の連携の見方等を学び、自分が保育実践を通して幼児教育について考えたいことを明確化する。その後各自で保育実践の参加観察を実施し、保育実践を通して幼児教育について観察したことについてレポートを作成し、それらのレポートを基にして各自が提案者になって実践における幼児教育の内容や方法について報告し話し合うことにより学びを深めていく。	
学校教育実践研究特論	幼稚園・学校教育（小・中・高を問わず）について、学校という社会的制度・装置の枠組みの内外で、ひとはこどもにどのような学びを提供してきたのだろうか。本講義では、さらにその実践をいかに「記録」（記憶）してきたのか、その知的枠組みを問う。主として、実践記録についての方法論と歴史研究の知見から、文献購読と資料（映像を含む）読解を中心に、受講者の希望する学校種別・領域などを加味して焦点化し、輪読とディスカッションで進める。	
小学校教育実践演習	小学校における教育活動全般に視野をおき、実践的にその目的、内容、方法を総括的に明らかにする。特に現代の小学校教育が抱えている問題に迫るためには、何をどのように解決することが学校現場として求められるのかを検討できる実践的な力を養う。そのために、小学校現場に継続的意欲はいることを通して、その現場が抱える課題を総合的にとらえていくとともに、その問題を引き出す背景を複数の学校現場への調査を通して具体的に明らかにし、その解決の方策を模索していく。	
初等理科教育演習	初等理科教育の教育方法学的な見地からテーマを定める。特に、我が国における初等教育の歴史を理科教育を窓口にして初等教育における教科教育のあり方をひもとくことを通して、理科における他教科との関連のもち方や他教科との指導方法の比較を探ることから、初等理科教育の特徴的な授業づくりのあり方を探究していくことを目的として演習を展開していく。その中でも特に、問題解決的な活動のあり方を演習の研究対象としていく。	
子育て・子育て支援演習	1.57ショックといわれる少子化問題。虐待や育児ノイローゼをきっかけとする育児の社会化に関する課題。パターンリズムからパートナーシップへという行政哲学の転換。今、こどもを巡る状況は大きく変化している。「子どもと家族を応援する日本」重点戦略会議の報告（2007.12）を受け児童福祉法も改正（2008）された。2010年度からは次世代育成支援後期行動計画も策定され実施されるようになる。本演習では今日的状況における子育て・子育て支援の現状と課題について認識を深めることを目的とする。	
学校保健学特論	児童期から青年期に至る間の健康に関する科学が学校保健学であるが、日本の学校保健は健康診断や救急処置などのルーティン化したサービス事業として受け取られがちであり、現代的な課題としても薬物乱用、保健室登校、校内暴力、学校危機管理などのマイナスのイメージと結びついている。しかし、本来の学校保健は子どもの健康を積極的に守り、増進するための様々なバリエーションを持ったダイナミックで楽しい教育活動であることを講義を通じて発見してゆきたい。この講義では、負の側面ばかりを取り上げてきた今までの学校保健のあり方を反省し、新たに積極的に学校教育全体に関与する学校保健の方向と方法論を紹介する。	
芸術教育研究特論	Artという言葉は本来的に〈技術〉を意味する言葉であるが、美術や音楽など身体を通して内なる心の世界と外的世界をつなぐ技術だということもできる。「芸術（art）」というきわめて多義的な言葉が語られるとき、その意味するものは語るひとりひとり、受け取るひとりひとりで大きく異なる。本授業ではそうした問いを出発点に、芸術と教育をめぐる諸概念を概観し、芸術教育の実践方法について考察するとともに、授業の中で造形制作の体験を試み、実際の指導に生かすことのできる教材研究につなげていく。	
特別支援教育研究特論	特別支援教育における理念・制度・実践をキー・ワードに、基礎的、概念的な理解を図るとともに、特定の課題に焦点化して研究ノートの作成と発表を行い、特別支援教育に関わる知見を深める。〈授業計画等の概要〉イントロダクション、特別支援教育の理念・制度の概説、特別支援教育の実践学Ⅰ；特別支援学校での取り組み、特別支援教育の実践学Ⅱ；通常の学級での取り組み、研究ノート作成と発表	
子どもに関する公共政策論	子どもの支援計画、つまり次世代育成支援対策推進法に基づく地域行動計画の後期計画が平成21年度中には全ての地方公共団体で出さるようになる。授業を通して鳴り物入りで策定される子どもの支援計画の光と影を描きたい。そのためには、事前に子どものための地域行動計画の意味や内容やあり方を講義で学び、その上で評価のための指標を協議・検討した上で、計画評価を行うこととしたい。また、その評価結果を社会に発信してゆくようなアクティブな授業としたい。	

	保育マネジメント特論	厚生労働省が平成20年3月28日に策定した「保育所における質の向上のためのアクションプログラム」は、①保育実践の改善・向上、②子どもの健康及び安全の確保、③保育士等の資質・専門性の向上、④保育を支える基盤の強化、を柱としており、これは新しい保育指針とも密接に関係している。そこで本授業では、同プログラムに盛り込まれた課題を手掛かりに、国の制度・政策の動向と地方自治体及び保育現場の関連を探りながら、これからの保育のあり方について考察する。	
	保育アセスメント特論	幼児のアセスメントをめぐっては発達の結果に注目するsummative assessmentと、発達のプロセスに即して行うformative assessmentがある。子どもの自発性を基点とする保育実践を進めるために必要不可欠な後者について、理論的かつ実践的にその内容をあきらかにするのが本講義の目的である。実践としては、ニュージーランドのアセスメント実践である学びの物語を事例として取り上げ、理論としてはそのバックボーンであるMargaret CarrとMary J. Drummondの著作を素材に概説する。	
心理・社会・文化分野	教育心理学特論	現在、われわれの社会は青少年の知的、情緒的発達に関して実に様々な課題を抱えている。それらの課題に対して、教育心理学を始めとする諸々の心理学はどのような理解と解決策をもたらすことができるのだろうか。このセミナーではそれらの諸課題を生み出す身体性、関係性、ことばの衰退を基本的視座に置いてみることから始める。そこから、今日的課題に対する教育・臨床心理学的な理解を試みると共に、現場での様々な取り組み実践例の意義を検討したい。自らの実践例、現場での体験も交換し考えたい。	
	臨床発達心理学演習	臨床発達心理学的な視点から子どもを支援することについて多様な視点から検討する力を養うことを目的とする。支援が必要と思われる子どもに対するアセスメントの実施、アセスメントにもとづいた所見の整理、支援の実施とその評価について具体的な事例を通して分析、検討を行い、適切な発達支援、及び家族を含めた生活支援の在り方やそのプロセスの特徴を理解する。	
	子ども家庭福祉学特論	子どもは家族の中で生まれ育ち、家族という育成集団に生活の基盤を置きながら、そこから保育所、幼稚園、小学校、中学校等社会集団に所属し、そこで人間として必要な事項を学習し、成長・発達する。本講義では、まずこの点（子どもの成長・発達についての基礎的理解）を踏まえ、さらに子どもが育つ環境としての家族についての理解を深める。その後、子どもの気になる行動、不登校、いじめ、自殺等子どもに関する具体的な事項を取り上げ、その概要、背景要因と、その対策について子ども家庭福祉学の立場から論じる。	
	社会学的臨床実践演習	本演習では、学生が取り上げた課題をテーマに進め、保育・福祉・医療・教育・行政等の実践現場で役立つ高度な専門知識と解決能力を持つ人材の育成を目指す。ここでは、近年注目を浴びている研究領域の臨床社会学を用い、地域社会が抱える多種多様な問題をマクロ・ミクロ的な視点から質量的に分析した後、その対応策や支援方法を社会学的に論究する。	
	子ども史研究基礎演習	近世近代の子ども史を研究するうえで、基本となる文献・絵画資料および人形玩具など実物資料等の調査・整理をしたうえで、その有用性を検証する。授業計画は江戸期の随筆・浮世絵などにみられる資料の紹介とフィールドワーク。明治期の子どもの生活文化に関する諸資料の紹介と精読。明治期の幼稚園関係資料及び教材等の紹介とフィールドワーク。これらの資料を活用し、受講者各自の問題意識に基づき、それぞれの立場からの報告。まとめ。	
	音楽表現演習	授業では幼児・児童に特に好まれる童謡、民謡、アニメソング等を研究対象とし、それらの歌詞と音楽を分析してその作品の特徴を把握する。さらにその作品が好まれる要因について探究し、討論した上で理想的な童謡を創作することを目標とする。主に既存の童謡等と季節感の関係について、また楽譜作成や実践に必要な基礎的な音楽理論、歌唱法、伴奏法を扱う、最終的に作成した楽譜および創作課程に関するレポートの提出を義務づける。	
	社会精神医学特論	精神疾患の成因、治療、支援を考えるには、脳という臓器の病気としての「生物学的視点」、心理的要因を考える「心理学的視点」、社会状況や生活環境などに注目する「社会学的視点」の3つの見方が必要である。本講ではこのうち「社会的視点」からの精神医学を理解することを目標とする。導入として代表的な精神疾患についての遺伝・環境要因などの成因仮説を概観し、次いで個々の事例を通して学校保健、福祉、家族問題、精神保健福祉法などについて触れていく。また、事例検討、論文講読など、学生と議論をしながら理解を深めていく。	

<p>高度な専門性を目指す分野</p>	<p>インディペンデントスタディ</p>	<p>学生が本専修で開講されている授業での学びを基礎に、より高度で専門的知識・技術を身に付けるため、自分の研究課題とその内容に関してより高度で専門的な指導が受けられる教授を選び、学ぶために開講したものである。しかし、実際の開講にあたって初年度(平成22)はその基本理念を堅持しつつ、学生の動向を見極めるため、この授業を企画した松本(平成23年以降は、学生が選んだ教授が開講する)が担当する。初年度は、保育者(もしくは教師)の専門職としての質的向上にとり不可欠と考えられる発達と臨床に関する諸理論と専門的知識・技術(M. Richmondの理論)を身に付けるための方法について論述する。具体的には、専門職としてふさわしい人格の変容をめざし、受容と共感、傾聴と問いかけ等対人関係における適切な援助法について、臨床福祉学の立場から論述する。</p>	
<p>指 研 導 究</p>	<p>人間生活科学特別研究</p>	<p>(概要) 各指導教員が学生に対し、研究計画の策定を支援し、修士論文の作成に向けて指導を行う。</p> <p>(2 大澤清二) オンジョブトレーニングによって、実際に研究の計画の立て方、データの収集方法、データの整理方法、データの加工方法、グラフの描き方、解析の仕方、解釈の仕方、投稿論文の書き方について指導を行う。</p> <p>(3 青江誠一郎) 穀類あるいは乳製品中の有効成分として品種改良された麦類、各種食物繊維画分および素材、乳由来カルシウム、乳清タンパク質ならびに未知の有効成分などから研究対象を選択し、消化管機能、ホルモン応答、脂肪組織の形態変化と機能変化の及ぼす影響とメカニズムについての研究指導を行う。</p> <p>(4 大森正司) 食品の風味生成におよぼす微生物の役割、食品機能の効果発現機構、食の起源探査に関する遺伝子的研究を行う。</p> <p>(6 市川朝子) 食品の物性と食味が調理過程においてどのように変化するかについて、ある一定の食品を対象として研究指導を行う。</p> <p>(7 明渡陽子) イギリスの健康格差問題と肥満問題の現状分析と、それらへのNHSや政府の対策を調査し、イギリスの健康増進政策の在り方、予防への国家的な取り組みについての研究指導を行う。</p> <p>(8 井上栄) 東京圏在住サラリーマンのエネルギー消費量を携帯用活動量計を使って電車通勤群とクルマ通勤群とを比較し、電通勤時のエネルギー消費量が健康に及ぼす影響を考察し研究指導を行う。</p> <p>(9 西成典子) 環境応答、あるいはヒトの安全、健康に関する環境問題についての研究指導を行う。</p> <p>(11 井上源喜) 極限環境の南極や熱水地帯(温泉・火山)、湖底堆積物コアによる環境変遷史、都市水域環境、地球温暖化とそれらの影響等を中心に研究指導を行う。</p> <p>(12 生田茂) 「地球規模の環境問題」の発現の原因を学ぶとともに、実験や理論科学的な手法を用いて科学的な基礎知識を体得し、教育実践活動に用いる教材についての研究指導を行う。</p> <p>(13 岡島成行) 環境教育の中でも特に自然体験活動を中心に研究指導を行う。</p> <p>(14 櫻井四郎) 疫学的手法を用いて、環境調査と健康調査を行い、両者の関連についての研究指導を行う。</p> <p>(15 黒沼吉弘) 環境政策、特に自然環境と人間社会に係わる経済政策や社会制度からのコモンプール管理に関して、自然科学の知見を踏まえつつ、行政、生産者、消費者、さらには国民といった観点も考慮した経済政策領域における研究の指導を行う。</p> <p>(16 阿部栄子) 生活環境機能学分野について、関連文献を精読し研究指導を行う。</p> <p>(17 松本暢子) 都市における住居・住環境の空間的および社会的なあり方ならびに住居・住環境計画について研究指導を行う。</p> <p>(18 柴崎正行) 乳幼児期の発達や保育そして子育て支援や特別支援に関する内容についての研究指導を行う。</p>	

(19 阿部和子)
乳幼児期の子どもの育ちや保育、それを取り巻く環境など、広く保育の問題を多角的に検討し、保育の日常におけるの子どもの発達経験の意味などに関して研究指導を行う。

(20 金田卓也)
子どもの造形的表現を豊かにするための芸術教育に関して、多元文化的なアプローチによる研究方法について指導を行う。

(21 松本寿昭)
子ども自身の問題や子どもを取り巻く環境としての親や保育者、教師のあり方を小集団(家族、保育所、幼稚園、学校、児童福祉施設)のあり方の問題と関連させて研究指導を行う。

(25 堀江正一)
使い方を誤れば化学的有害因子の一つとなる食品添加物、農薬、動物用医薬品の有用性とリスクについて研究指導を行う。

(26 田中直子)
生活習慣病やアレルギー疾患をとりまく様々な現象などについて、細胞レベルで調べ、細胞生物学的、分子生物学的手法を用いた研究指導を行う。

(27 細谷夏実)
海産無脊椎動物の生殖細胞、原生動物細胞などを用い細胞分裂や発生・分化に及ぼす様々な環境要因・環境中の毒性物質の影響を検討することを主な課題として研究指導を行う。

(28 松本美鈴)
食品を食物に変換する調理の視点から人間の食を探究することを目的とし、調理操作に伴う食品の物理的・化学的・組織学的変化を物性測定・化学分析・顕微鏡観察・官能評価などにより科学的に把握し、調理操作と食物のおいしさの関わりについて研究指導を行う。

(31 田代和美)
保育学の分野、特に保育者の専門性に関する研究指導を行う。

(32 小林実夏)
日本人の食習慣を把握するための評価方法について検討し、辛味に対する嗜好性とその他の味覚・食嗜好との関連をについて研究指導を行う。

(34 水谷千代美)
環境にやさしい素材の機能性と消費性能、天然物による染色と抗菌・消臭作用、衣服の材料特性と感性加工などに関して研究指導を行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(人間文化研究科言語文化専攻(修士課程))			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	Developing Critical Thinking Skills	クリティカル・シンキングは他人の意見を批判的に見るのではなく、情報や知識を複数の視点から注意深く、かつ論理的に分析する能力である。哲学、心理学、教育学、社会学、文学のようにそれぞれ独立して発展してきた学問が、複合的な問題分析と解決案を要求するようになったことから学際的なアプローチが重要となった。本講では方法論としてのクリティカル・シンキングにとどまらず態度としてのクリティカル・シンキング力の育成も目指す。(講義での使用言語は英語である。)	
	Critical Reading and Writing	クリティカル・リーディングでは、テキスト理解のプロセスへの認知的参加が可能となる能力を育成する。そのために必要に応じて使い分けられるべきリーディングの種類、テキストの批判的分析方法を考察する。クリティカル・ライティングでは、説得力を持った論理展開ができる能力を育成する。そのためにargumentative essayの書き方のプロセスを例に、論理構造について考察する。(講義での使用言語は英語である。)	
	Fundamentals of Reading I	大学院生としてふさわしい英語の読解力を身につけることを目的とする。英語で書かれた文学作品を味わい、裏の裏まで読みこなす必要、あるいは文学以外でも英語の原資料にあたる必要がこれから生じる。しかし学部で学んできた英語の勉強だけではこの必要に応えられない。英米の名文家の散文にできるだけ多く接してそれらを丁寧に読むこと以外、英語の深さ、多彩さに順応できる基礎力は養えない。この科目では主にアメリカの名文を読む。アメリカ人の精神もまた同時に学べるはずである。	
	Fundamentals of Reading II	大学院に籍をおく以上、世界共通言語としての英語に通暁していることは前提条件である。当然のことながら、英語文学・英語学・英語教育の専攻者にとっては、生命線となる。でありながら、「英語を読む能力」が十全に身につけているとはいえない。量的にも不足だし、質的にも開発しつくされてはいない。この科目は、英米の名文家の散文にできるだけ多く接し、英語の深さ、多彩さに順応できる基礎力を養うものである。IIでは主にイギリスの散文を取り扱う。全体で15回、Samuel JohnsonからWalter Paterを経由してGeorge Orwellまでがその範囲となる。	
	Academic Writing I	(英文) To recognize and apply principles of academic research writing: A) Develop such conscious skills from critical thinking, critical evaluation of sources and writing examples. B) Develop skills of producing and writing through short manageable assignments aimed at realizing the intent rather than producing polished writing, leading to produce a substantial research work (an annotated bibliography) to be used as foundation for successful completion of Academic Writing 2, writeup of a possible academic thesis. (和訳) アカデミック・リサーチ・ライティングの原理の理解と応用を目指す。様々な原典を批判的に考察・評価することを通してライティングの能力を伸ばす。また、表現方法よりも論述内容に的を絞った課題を与え、論文作成を視野に入れた実体を伴ったリサーチ(注釈付き参考文献)の完成に導く。	
	Academic Writing II	(英文) To re-familiarize and re-equip principles of academic research writing, reviewing the first semester. To recognize and apply these principles also: A) To deepen critical thinking skills and evaluation of sources and writing, to realize research is ongoing and monitoring. B) To enhance skills of producing and writing through a steady stream of short manageable assignments aimed at realizing the intent rather than producing polished writing, leading to a substantial draft of an academic thesis worthy of presentation for successful completion of this course. (和訳) Academic Writing Iの発展として、さらにアカデミック・リサーチ・ライティングの原理の理解と応用を目指す。様々な原典を批判的に考察・評価することを通してライティングの能力をさらに伸ばす。また、表現方法よりも論述内容に的を絞った課題を与え、この科目の締めくくりとして実体を伴った論文のドラフトの完成に導く。	

	Professional English	「ニュース英語」に特化したProfessional Englishを勉強して欧米の英字紙・雑誌の読み方・書き方を会得する。国際化した現代ではTime, The New York Timesなどの英語で書かれた欧米メディアから刻々変わる世界情報を得ることが学生、社会人にとって不可欠となっており、このため時事的英文記事で読み方・書き方を学び、時局の適切な把握に務めることにする。また毎回当日の衛星放送CNN Newsを見聞し解説して生の英語にも触れる。	
	日本文学研究方法論	文化研究・ポストコロニアル批評以後の日本語文学研究は、研究方法レベルでの「新しさ」を追求してきた従来のあり方に対する厳しい反省を迫られている。ここでは、研究史上高く評価されているいくつかの文学研究・文学批評上の達成を取り上げ、何が・どんな問題が〈日本の文学〉にかかわるものとして承認され、何が排除されているかを批判的に検討していく。なお、担当者は近現代日本語文学を専門とするが、古典を専攻する学生にも配慮して授業を進めていく。	
	日本文学基礎演習	日本文学専攻出身者以外の院生を対象とし、日本文学を研究していくための基礎固めを演習形式で行う。古代から近代にいたる日本文学史の総体を把握するとともに日本文学研究方法論を理解すべく、与えられた課題について発表し、その内容についての指導を行う。具体的には、ある作品を読解した内容、その作品の文学史的意義、および、その作品についての研究方法などを報告することによって今後の研究計画の示唆が得られるようにしたい。	
	国際文化研究法	国際文化の研究方法においては、シングル・ケース法をはじめとする複数の方法がある。この授業においては、定量的な分析手法を用いた研究理論を学び、国際社会における多文化間の比較研究を行う。特に、表面上は全く異質なものと受け取られがちな複数の文化間の中に、類似性を見いだすことは、多様化する21世紀の国際社会を担ってゆくリーダーにとって不可欠な能力であるともいえよう。本講義では、世界の文化の中に複雑に絡み合う様々な性質を、定量分析手法を用いて、科学的な視点をもって文化の類似性と相違性を解き明かすことを試みる。	
共通科目	翻訳技術論	英文を日本語に翻訳するにあたっては、〈英文の内容を正しく理解すること〉と〈理解した内容を正しい日本語で表現すること〉という二つのプロセスを経なければならない。したがって翻訳者を志す者は常に英文解釈力と日本語表現能力をブラッシュアップする努力をつづけることを求められる。この授業では 伝記・コラム・小説などを取り上げ、じっさいに訳稿を作る作業を通して、翻訳のノウハウを実践的に学ぶことによって翻訳技術を向上させることをめざす。	
	児童文学論	「児童文学の王国」といわれているイギリス。この国で、かずかずの傑作をうみだした作家たちの中でも、女流作家の活躍に焦点をあてて考える。まずは、18世紀、最初の本格的な創作児童文学を書いたと目されるセアラ・フィールディング (Sarah Fielding:1710-68) の作品を読む。児童文学の発生から、イギリス児童文学の流れを概観し、社会の様相を見事に反映しつつ、名作を生み続けた、大人と子どもの文学の魅力を考える。	
	比較文学	近代文学(近代劇)の成立は、西洋の受容からはじまった。坪内逍遙の『小説真髓』は、そうした近代小説の原理論と技術論を初めて組織・大系化したものである。森鷗外のドイツや夏目漱石のイギリスもよく知られている。近代(現代)の作家たちの西洋の思想・文体の受容の形式を具体的に検討したい。	
	草稿・テキスト学	文学作品として自立する前段階としての草稿、自立した後の段階としてのテキストの改変・加工などについて講義する。草稿研究は、作品生成のメカニズムを明らかにする重要な方法である。いくつかの草稿を取り上げて、そこからいかにして作品世界として生成されていったのかを考えたい。また、テキストの改変・加工については、古代後期の物語『狭衣物語』に見られる多様な異本を資料として扱い、異本が成立する所以を問いつつ、テキストとは何なのかを考えたい。	
	文学と教育	文学言説の研究と教育現場における実践とが必ずしも有機的に節合しているとは言えない状況を踏まえ、主に教材開発・教材研究の場面で、これまでの日本語文学研究の蓄積がどのように活用できるかを検討する。具体的には、(1)「読む」行為それ自体の意識化・自覚化を目指した文化記号論的なテキスト分析の成果と問題点とを整理した上で、(2)現在中等教育の場面で教材化されている文章を取り上げ、実際の授業展開を意識した教材研究・教材開発へと接続していく。	
		古代文学演習 I	演習形式で、古代後期(平安時代)成立の『源氏物語』を取り上げて、作品の読解を試みる。演習発表者は、指定された部分に関して、レポートを用意して発表する。授業参加者は発表に対して質疑をし、発表者は的確な応答に心がける。したがって、授業は討議によって進行することになる。演習 I では、撰閣体制下の歴史的諸制度のうち、婚姻制度や通過儀礼のありようなどに着目して、そこから作品を理解するようにし、併せて、儀式書や古記録などにも親しむことになる。

古典文学分野	古代文学演習Ⅱ	演習形式で、古代後期（平安時代）成立の『源氏物語』を取り上げて、作品の読解を試みる。演習発表者は、指定された部分に関して、レポートを用意して発表する。授業参加者は発表に対して質疑をし、発表者は的確な応答に心がける。したがって、授業は討議によって進行することになる。演習Ⅱでは、撰閣体制下の歴史的諸制度のうち、年中行事や儀礼のありようなどに着目して、そこから作品を理解するようにし、併せて、儀式書や古記録などにも親しむことになる。	
	古代文学講義Ⅰ	古代以来の日本文学の中核であった和歌文学の伝統を理解することと、和歌作品研究の基本的方法を身につけることを目的とする。そのために平安時代中頃に成立した『道命阿闍梨集』を読む。『道命阿闍梨集』は三百余首からなり、冷泉家時雨亭文庫蔵本以下四本が知られている。歌風は俗界を脱した軽やかさに特徴があるうか。1時間2首の講義をする。本授業では前年度に引き続き91番歌から読み始める。道命阿闍梨（天延二年（九七四）～寛仁四年（一〇二〇））は、『蜻蛉日記』の作者を母とする藤原道綱の男子。赤染衛門・和泉式部とも関わり、『後拾遺集』以下の勅撰集に五十七首が入集する。	
	古代文学講義Ⅱ	古代以来の日本文学の中核であった和歌文学の伝統を理解することと、和歌作品研究の基本的方法を身につけることを目的とする。そのために平安時代中頃に成立した『道命阿闍梨集』を読む。『道命阿闍梨集』は三百余首からなり、冷泉家時雨亭文庫蔵本以下四本が知られている。歌風は脱俗的な軽やかさに特徴があるうか。1時間2首の講義をする。本授業では『古代文学講義Ⅰ』に引き続き122番歌から読み始める。道命阿闍梨（天延二年（九七四）～寛仁四年（一〇二〇））は、『蜻蛉日記』の作者を母とする藤原道綱の男子。赤染衛門・和泉式部とも関わり、『後拾遺集』以下の勅撰集に五十七首が入集する。	
	中世文学演習Ⅰ	中世軍記物語作品の内から『平家物語』を選択し、これの数ある伝本中でも、現在もっとも注目されていると言ってよく、また多くの研究発表が積み重ねられつつある、「延慶本」（大東急記念文庫蔵）を考察の対象として、直接に本文を解説し考証する演習授業をする。これの本文的特徴を明確にし、その内実を把握するためには、対比・対照されるべき他の伝本の本文があり、それらとの同文・異文関係の実態を明らかにすることも自ずから求められる。更には、『平家物語』が素材とした諸事件・合戦の事実に関わる記録類の解説も課せられる。	隔年開講
	中世文学演習Ⅱ	「中世文学演習Ⅰ」に引き続き、『平家物語』の「延慶本」（大東急記念文庫蔵）を考察の対象として、直接に本文を解説し考証する演習授業をする。これの本文的特徴を明確にし、その内実を把握するためには、対比・対照されるべき他の伝本の本文があり、それらとの同文・異文関係の実態を明らかにすることも自ずから求められる。更には、『平家物語』が素材とした諸事件・合戦の事実に関わる記録類の解説も課せられる。	隔年開講
	中世文学講義Ⅰ	中世軍記物語作品の内より、『曾我物語』を取り上げて講義する。曾我兄弟の敵討ち事件（建久4年5月）は、様々の形態で作品化されているが、それらの中で最も原態的で詳細な内容を保っているのが真名本であり、鎌倉時代始発期の東国武士社会の情勢を活写しているという点でも、文学的評価の高いものである。そこで、本授業では真名本曾我物語を直接の分析対象として、これの特質を論ずる。その過程で『平家物語』の記事内容や諸々の中世唱導資料を参照する。	隔年開講
	中世文学講義Ⅱ	「中世文学講義Ⅰ」に引き続き、「真名本曾我物語」の特徴・魅力を論ずる。曾我兄弟の敵討ち事件（建久4年5月）は、様々の形態で作品化されているが、それらの中で最も原態的で詳細な内容を保っているのが真名本であり、鎌倉時代始発期の東国武士社会の情勢を活写しているという点でも、文学的評価の高いものである。そこで、本授業では真名本曾我物語を直接の分析対象として、これの特質を論ずる。その過程で『平家物語』の記事内容や諸々の中世唱導資料を参照する。	隔年開講
	近世文学演習Ⅰ	『狂歌醉竹集』（享和2年（1802）刊）上巻を読む。四方赤良と何かにつけて比較対比されながら、その研究が大きく遅れている唐衣橋洲の家集『狂歌醉竹集』を、演習形式で読み解くことによって、その成立と歌風の解明に迫りたい。なお、本書には特製本と並製本があり、また刊本より所収歌数が多い尾州人による写本があるので、これらをも対比させつつ、各歌の初出書名をも突き止めた。	隔年開講
	近世文学演習Ⅱ	『狂歌醉竹集』（享和2年（1802）刊）下巻を読む。前期に続く演習科目で、最初の数回は授業担当者による上巻のまとめを行いつつ見本演習を行い、以後の10回は受講者が分担発表、最後の数回は授業担当者のまとめに充てる。	隔年開講

近世文学講義 I	近世狂歌史の研究—その1—。(a)近世初期狂歌について(7回分)。中世末から近世初頭にかけての所謂近世初期狂歌について、主として松永定徳の狂歌活動を中心に講義する。(b)近世上方狂歌について(8回分)。近世初期狂歌に続いて起こり、中部以西を席卷した所謂近世上方狂歌について、主として鯛屋貞柳の狂歌活動を中心に講義する。また両期における江戸表の狂歌活動は、所謂江戸狂歌とは呼べないものであって、いわばそれらの江戸店に相当するものであったことを解説する。	隔年開講
近世文学講義 II	近世狂歌史の研究—その2—。江戸狂歌について、(c)その発生から天明期まで。天明狂歌大流行に至る経緯を概説するとともに、寛政改革の功罪について講義する。(d)天明狂歌の地方伝播。尾張藩を中心に、江戸市民文芸であった天明狂歌が、なぜ地方に伝播したのかを考える。(e)天明狂歌作者の代々。浅草庵市人を初代とする浅草庵を中心に、その代々を講義する。(f)「天明狂歌」名義考。文学史用語である「天明狂歌」なる語が、いつどのように生まれて現在に至っているかを講義する。	隔年開講
近代文学演習 I	森鷗外の作品「雁」を取り上げ、注釈的に細かく読み進め、作品の時空間を丁寧に分析することをめざす。授業参加者が、作品の一章を担当し、語彙の注釈のレベルから文化の問題まで、各自の関心に沿った発表を行い質疑を重ねていく。	
近代文学演習 II	「近代現代文学演習 I」に引き続いて、「雁」を丹念に読み進める。徹底的に作品世界が提示する諸問題に向き合って考察していく。	
近代文学講義 I	昭和初期詩雑誌の流通と受容について研究します。昭和初期には、同人誌や投稿誌、その他の詩雑誌を媒介として、詩人のネットワークが成立していた。詩雑誌「銅鑼」「学校」を取り上げ、一号ずつ分析してゆく。後継する「歷程」と比較しつつ、本誌の担った詩史的意義を考察する。また、同時代の詩ジャーナリズムや詩人のネットワークのなかでの、本誌の意義を考察する。	
近代文学講義 II	昭和初期詩雑誌の流通と受容について研究します。昭和初期には、同人誌や投稿誌、その他の詩雑誌を媒介として、詩人のネットワークが成立していた。詩雑誌「銅鑼」「学校」を取り上げ、一号ずつ分析してゆく。後継する「歷程」と比較しつつ、本誌の担った詩史的意義を考察する。また、同時代の詩ジャーナリズムや詩人のネットワークのなかでの、本誌の意義を考察する。	
現代文学講義 I	現代文学を読解、考察するために必要な方法論について理解を深める。テキスト、読者、作者、語り、メディア、精神分析、脱構築、身体等をキーワードとし、文学研究に必要な批評理論について学ぶことを目的とする。阿部和重、多和田葉子、中上健次、松浦理英子、水村美苗など現代作家の小説を取り上げ、方法論を援用しながら読解する。	
現代文学講義 II	現代文学を読解、考察するために必要な方法論について理解を深める。ジェンダー論、セクシュアリティ研究、クィア理論、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロナ論等を中心に、文学研究に必要な批評理論について学ぶことを目的とする。李良枝、鹿島田真希、桐野夏生、笠野頼子、リービ英雄など現代作家の小説を取り上げ、方法論を援用しながら読解する。	
日本語学演習 I	日本語の語史について演習形式で授業を展開する。この授業では主に形容詞・形容動詞のうちから語を選び、その歴史について詳細に調査することを通じて、各文献の情報の確かな読み取り方、言語文化についての論理的思考力を養うことが目標である。具体的には、受講生が選ぶ調査対象の語について、先行研究や辞書の記述を収集し、その問題点について細部にわたり討議する。次にあらかじめ用意する文献リストに基づき、用例を採取しながら、問題解決のレポートにまとめさせる。電子化テキストも活用するが、その利便性と限界についても留意してゆく。	隔年開講
日本語学演習 II	日本語の語史について演習形式で授業を展開する。この授業では主に動詞のうちから語を選び、その歴史について詳細に調査することを通じて、各文献の情報の確かな読み取り方、言語文化についての論理的思考力を養うことが目標である。具体的には、受講生が選ぶ調査対象の語について、先行研究や辞書の記述を収集し、その問題点について細部にわたり討議する。次にあらかじめ用意する文献リストに基づき、用例を採取しながら、問題解決のレポートにまとめさせる。電子化テキストも活用するが、その利便性と限界についても留意してゆく。	隔年開講
日本語学講義 I	近年の日本語学の語彙研究を取り上げ、講義形式でそのテーマと研究手法について説明する。近年の日本語語彙の研究では、どのような問題が注目され、そこにはどのような研究手法と新しい発見が得られているのか。語彙研究の歴史の中に現在の研究動向を位置づけることによって、日本語をめぐる言語文化研究の様々なアプローチの方法について知見を身につけさせ、論理的な思考力を涵養することが目標である。研究論文の読解を進めながら授業を展開していくため、併せて言語研究での論文の技法についても解説を行うこととする。	隔年開講

	日本語学講義Ⅱ	近年の日本語学の文法・語法研究を取り上げ、講義形式でそのテーマと研究手法について説明する。近年の日本語文法及び語法の研究では、どのような問題が注目され、そこにはどのような研究手法と新しい発見が得られているのか。研究の歴史の中に現在の研究動向を位置づけることによって、日本語をめぐる言語文化研究の様々なアプローチの方法について知見を身につけさせ、論理的な思考力を涵養することが目標である。研究論文の読解を進めながら授業を展開してゆくとともに、併せて言語研究での論文の技法についても解説を行うこととする。	隔年開講
関連分野	語学文学特論Ⅰ	平安時代以降に男性貴族官人たちによって記された古記録と呼ばれる日記を読解することを目的とする。この日記は、正統的な中国の漢文とは違い、日本流に変容された変体漢文で書かれ、特有の書き癖や読み癖があって、それなりの習熟が必要となる。Ⅰでは、藤原行成の『権記』を取り上げて、この変体漢文日記に馴れ親しみ、読み下しができるようになることを目的としたい。古記録の読解は、当時の歴史や文学を考える際の有力な方法であり、十分な習熟に心がけたい。	
	語学文学特論Ⅱ	平安時代以降に男性貴族官人たちによって記された古記録と呼ばれる日記を読解することを目的とする。Ⅱでは、Ⅰに引き続き藤原行成『権記』を取り上げて、変体漢文のさらなる習熟を目指すとともに、記された内容の背景となる、政務・人事・儀式・行事・経済などのありようとその次第、あるいは、人間関係・家族関係などのありようを整理・理解することで、日記の記述に対する立体的・総合的な把握ができるようにしたい。古記録の読解は、当時の歴史や文学を考える際の有力な方法であり、できればその応用に及ばたい。	
	中国文学特論Ⅰ	中国最古の詩集である『詩経』の詩の読解を通じて古代の人々の発想や感性に触れ、古来儒家の經典としても重んぜられ続けてきた理由を探る。前期は、まず、『詩経』の詩の成立と特徴について概説する。次に、古注を代表する前漢の毛亨・毛萇による『毛伝』と後漢の鄭玄による『鄭箋』の注釈態度と、新注である宋代の朱熹による『詩集伝』の注釈態度について、詩を読みながら考えてゆき、上記二注の注釈態度の違いについての検討を加える。	
	中国文学特論Ⅱ	中国最古の詩集である『詩経』の詩の読解を通じて古代の人々の発想や感性に触れ、古来儒家の經典としても重んぜられ続けてきた理由を探る。古来、様々な注釈が施されており、代表的なものは、漢代の『毛伝鄭箋』と宋代の朱熹の『詩集伝』であるが、後期は『詩集伝』の注釈を中心に本文を読み、適宜、『毛伝鄭箋』や唐代の『毛詩正義』を参観し、注釈の違いについても考えながら、内容についての理解を深めてゆく。併せて、漢文における、注釈に基づいた本文解釈の方法に習熟する。	
	文学と理論（作者・テキスト・読者）	—New CriticismからNew Historicismまで— 20世紀後半の英米の文学批評と文学研究の際立った山並みをながめてみたい。それぞれの時点で、不易の部分と変遷する部分とを踏まえた上で、流行の部分が顕著な姿を見せることになるであろう。New Criticism, Structuralism, Reader Response, Deconstruction, Feminism, Psychoanalysis, New Historicismといった一世を風靡した（している）批評と研究の流儀を代表するような論文を大急ぎでおさらいし、それによって何をどのように批評し研究したらいいかを知る手助けとしたい。	
	文学と制度（ジェンダー・クラス・マイリテイ）	従来、社会学、政治学、フェミニズム、文化研究、そして、もちろん文学的視点から、ジェンダー、クラス、マイリテイは扱われてきた。まず、これらの問題を俯瞰する。翻訳も含めて多数ある批評理論書を数点あたり、問題の所在を概観しながら、次第に個別の問題を考える。＜分裂共生／統合強制＞というタームがあるが、これを使えば、文学はつねに社会に対して＜分裂共生＞を擁護することで、＜統合強制＞に対抗してきた。性同一性障害や、特殊なものとして、種同一性障害などについても考察を試みる。	
	文学と自然（風土・人種・母語）	文学は自然のくさぐさに影響されている。むしろ「自然は芸術を模倣する」というオスカー・ワイルド的逆説のうちに文学もまた収められるが「ことば」を操る使い手が自然の産物である以上、文学が自然から完全に遊離することはありえない。ただし、この場合の「自然」とは、使い手がその中で生きてゆかざるをえないもの、すなわち所与としての風土であり、人種であり、母語ということになる。ここでは、日本とカズオ・イシグロ、トリニダードとV. S. ナイポール、南アフリカとJ. M. クッツェー、スリランカとマイケル・オンダーチェなどの関係を取り扱う。	
	英米詩	英詩・米詩の優れた作品を解釈鑑賞するのではなく、両者の差異や交響を考える。問題を特定して、シェイクスピア（劇）詩がアメリカでどう受容されたかという問題を出発点にする。古典的な著として Michael D. Bristol, "Shakespeare's America, America's Shakespeare" (1990)があるが、Kim C. Sturgess, "Shakespeare and the American Nation" (2004)が加わったので、両者を読み比べつつ問題を再考する。シェイクスピアが依拠した無韻詩についても考えてみたい。	

英語文学分野

英米小説Ⅰ	英米の代表的な作家の短編小説を原文で味わう。目的とするところは「英語力」と「文学鑑賞力」を高めることである。そのためにテキストを読むにあたって、とりわけ次の3点を心がけたい。1) 一つ一つの英文の文法構造を正しく理解すること 2) 文字どおりの意味に加えて言外の意味をも考えながら想像力豊かに読むこと 3) 作品の文体・構成・技法・テーマなどを視野に入れて読むこと。	
英米小説Ⅱ	アメリカのアフリカ系女性作家アリス・ウォーカーの作品にふれて、その本質に近づきたい。エッセーと短編作品を読み、何を彼女が問題にしているのかを探る。この作家は歴史や社会に対する問題意識が強い。彼女の作品からは、20世紀後半から現在に至るアメリカの抱えるかすかすの問題が、またそれらに立ち向かわざるをえない黒人たちの複雑な内面が浮かびあがる。彼女は調和や愛の力を信じているようにも思える。見果てぬ夢として、希求しているだけかもしれないのだが。そのあたりまで見極めがつくといい。そして芸術性に富む英文を読むことで高度な英語の読解力をつけることも目的のひとつとしたい。	
英米演劇Ⅰ	演劇と英米の演劇に関する基本的な情報を提供し、一層の情報を検索する手順を教示するとともに、具体的な例として、主としてアメリカの戯曲をとおして、作家、時代的社会的な背景に関する文化情報を取り込んだアプローチの修得を指導し、実践する。言うまでもなく、原語による戯曲の精読は必須条件だが、併せて、対象とする劇作家によるものを含む他戯曲の日本語訳の使用も取り込み、ひろく演劇への接触を促し、理解を深め、視野狭窄の陥穽を排除する。	
英米演劇Ⅱ	アメリカ演劇のうち世界的なレベルに達したと言われる20世紀以降の展開と、代表的な劇作家に焦点をあて、研究する。オニール、ウィリアムズ、ミラー、オールビーなどの代表的な劇作家を対象とすることはできるが、特に現代的な諸問題を視野に入れ、差別、抑圧の構造をふまえた表現として、アフリカ系アメリカ演劇、女性劇作家による演劇に焦点を絞る。その代表格として、当面、アメリカの黒人の歴史を描き創出したオーガスト・ウィルソン、あるいはフェミニズムに深くかかわるスザン・グラスペルを扱う。	
英米散文	—散文の芸術— まず韻文が意識され、その余りがはじめて散文として意識された。先行するのは韻文で、たぶん、どの文化でも散文は遅れて確立する。小説、エッセイ、その他膨大な量の書き物が散文であり、今となっては世界ははなはだ散文的である。そういう散文のなかで、文学芸術として認証されていくにはどのような機制が働いているか。その観点から英米の散文の過去をおさらいしてみる。	
英語教授法研究	Grammar Translation MethodからAudio-lingual Methodを経てCommunicative Language Teachingへの外国語教授法の変遷と、その背景となる社会構造の変化、さらにそれに伴う学習心理学の進歩と共に考察する。これにより、英語教育に対する多面的、かつ包括的な視点を形成する。特に扱うテーマは、コミュニケーション能力の定義と構成要素 / CLTと英語教育の現状 / その他の教授法 (Notional-functional syllabus, Total Physical Response, Humanistic approach)	
英語教育リサーチ方法	専門性に優れた英語教師には、リサーチ・マインドが求められる。それは、教育実践で生じる課題を発見し、それを正しい手順で追及して自らの指導力を向上させる力となる。段階的に以下を指導する。先行研究の概観と仮説の設定 / 専門用語の理解と基本的概念の習熟 / リサーチ・デザインの設計 / 調査方法、データの収集方法 / 必要な助言を与えつつリサーチ・デザインに沿って調査推進 / 教育統計学の学習とデータの解釈 / 考察と今後の課題。	
スピーキング・ライティング指導演習	スピーキングとライティングのコミュニケーション能力を育成するための指導実践力の向上をめざす。この分野における最新の第二言語習得研究で明らかにされている知見を、いかに日本人英語学習者へ適用させていくかを考える。その際、指導論に加えて評価論、教材論、学習指導要領などの関連テーマを討議する。受講生は生徒が主体的に英語を使用できる指導技術を開発し、それをマイクロ・ティーチングで提案する。その後、全体で有効性を検討する。	隔年開講
リーディング・リスニング指導演習	リーディングとライティングのコミュニケーション能力を育成するための指導実践力の向上をめざす。この分野における最新の第二言語習得研究で明らかにされている知見を、いかに日本人英語学習者へ適用させていくかを考える。その際、指導論に加えて評価論、教材論、学習指導要領などの関連テーマを討議する。受講生は生徒が主体的に英語を使用できる指導技術を開発し、それをマイクロ・ティーチングで提案する。その後、全体で有効性を検討する。	隔年開講

英語文学・英語教育専修

英語教

こ 育 分 野	児童英語教育方法	様々な外国語教授法の中から児童英語教育を行う際に知っているのと役に立つ教授法に絞り、基本理念、理論的背景、教授法の特徴、実際の授業への応用について紹介する。具体的にはOral Method、The Comprehensive Approachの代表としてTotal Physical Response Approach、The Communicative Language Teaching、Content-Based Instructionを取り上げる。それぞれの教授法を概観した上で、日本での児童英語教育に適した指導法のあり方について考察する。（講義での使用言語は英語である。）	隔年開講
	児童英語コミュニケーション演習	児童が学んだ英語表現を実際に使う活動につなげるためのコミュニケーション演習について学ぶ。英語を使った活動をコミュニケーションのための活動ととらえ、インフォメーション・ギャップをつくり、新しい情報のやりとりをさせる状況を作る必要がある。また理解しやすい伝え方を考え、場面に応じた適切な表現を使い、英語活動をとらえてコミュニケーションのあり方も学べる演習の方法について考察する。（講義での使用言語は英語である。）	隔年開講
	児童英語カリキュラム研究	児童の実態に合ったカリキュラムのあり方について学ぶ。児童英語教育では、英語についての知識を系統的に学ぶことより、英語を使ってコミュニケーションを体験する観点からカリキュラムを作る必要がある。また児童期は外国語や異文化に抵抗が小さく、新しいものを体験する柔軟性を備えている時期でもあるので、これらにも配慮した児童の発達段階に応じた活動が可能なカリキュラムについて考察する。（講義での使用言語は英語である。）	隔年開講
	児童英語教材演習	英語の運用能力は繰り返し英語に触れることにより徐々に習得するものである。一度触れた言語材料に、様々な英語活動をとらえて何度も出会えるようなスパイラルな教材の配列及びその教材を使用する演習のあり方について学ぶ。児童の精神年齢の発達や興味・関心に応じた活動ができるような教材を工夫し、また同じ言語材料や内容でも、別の観点から扱った教材を準備し、無理なく段階的に演習を進める方法を考察する。（講義での使用言語は英語である。）	隔年開講
英 語 学 分 野	英語の構造	言語のどのレベルにおいても、構造（異なる要素間の関係）と範疇（同一の性質を持つ要素の集合）という概念は不可欠である。音のレベルでは、母音と子音は範疇を構成し、それらは音素配列という構造をなす。文のレベルでは、語は品詞という範疇を構成し、語順という構造を構成する。英語における構造と範疇の概念を明らかにすることを目的とする。	
	英語の意味	意味は、語彙・文・テキストという三つのレベルにおいて考察することができる。語彙のレベルでは、同義語、反意語、多義語などをあつかう。文のレベルでは、表現と意味との相違に着目する。テキストのレベルでは、結束性・丁寧さなどを扱う。言語の普遍性と相対性にも着目し、類型論的な観点から、日本語と英語の構文パターンの相違を観察する。	隔年開講
	英語の音声	英語の音声現象のうち、特にプロソディにみられる法則性を言語音声の普遍的性質に照らし合わせながら理論的・实际的に検討する。分節素（母音・子音）が音韻的条件のみによって作動するのに対して、アクセントやイントネーション等のプロソディは統語的要因（文構造や文法関係など）や語用論的要因（情報構造や発話態度など）と深く関わる。従って、プロソディとこれらの要因との相違を検討して行く。言語の音韻論的タイプロジーを考える上で、日本語との比較も随所に織りまぜてゆく。	
	発話の機能	関連性理論の枠組みに従って、コミュニケーションにおける言語使用の語用論的原理を把握する。人が発話を用いてどのようにコミュニケーションを行うのか、発話の生成と理解のメカニズムについて考察する。コミュニケーションに当たっては、どのようなメッセージをどのように伝達するかが鍵となる。話し手は、文脈効果が上がるように、また聞き手に不当な処理コストがかからないように発話の形式を整える。また、聞き手は、提示された発話を肉付けし、表意から含意を計算し、文脈的に最も関連性の高い解釈を引き出す。	隔年開講
	語法文法研究	特定の語の持つ、統語論上、意味論上、語用論上の個別的言語事実を記述することを目的とする。動詞なら、自・他の区分、目的語の数、進行形・命令形の可否などが記述の対象になる。他の動詞との意味的類似性・相違性、副詞と連語関係も、記述の対象になる。言語事実は、名詞の可算性、動詞の状態性など、2項対立的ではないので、精密な記述が必要である。	
	談話分析研究	ディスコースの構成要素である発話と、発話と発話の関係が作り出す構造に焦点を当てる。ディスコース（あるいはテキスト）は発話の有機的なまとまりである。発話は文字発話と音声発話の両方をカバーするので、ディスコースも文字と音声の両媒体を含む。また、ディスコースは通常発話連続から成るが、注意書きや標識等のように一つの発話から成る場合もある。このコースでは、ディスコースが単なるランダムな発話の羅列ではなく、ディスコースをディスコースたらしめている要因について考察する。	

	コーパス言語学	コーパス（電子化された大量の言語資料）を使った言語学には、コーパス準拠方研究とコーパス駆動型研究のアプローチがある。前者は、事前に仮説をたて、それをコーパス実例で検証する。後者は、コーパスのデータからもたらされた予想外の発見や問題意識に基づき、新しい仮説を立てる。両者の研究を実践し、言語に対する洞察を深めることを目的とする。	隔年開講
	テキスト言語学	テキスト（又はディスコース）の様々な様式と機能を観察し、特徴的なレトリックを検討する。まず、テキストを言語使用域の観点から眺め、テキストの場・媒体・スタイルに注目する。次に、テキストが十分なコンテキスト効果をもたらす表現性豊かなものとなるための様々な修辭を意味論的・語用論的観点から原理的に考察し、実際のデータの観察と分析を行う。具体的には、曖昧性、婉曲語法、強調と誇張、ユーモア、ナンセンス、アイロニー、メタファーとメトニミー等を取り上げる。	隔年開講
	アジア文化演習（中国） I	中国と日本の社会と文化を巡って、東アジア比較文化という視角の応用によって、在来の西洋との比較研究では見られないような斬新でユニークな問題提起や新思考の形成を目指す。1、東アジア比較研究の方法について、2、中国における世界像やナショナリズムの形成の分析を通じて、現在の人々の思想的精神的構造の由来を探る。3、中日の文化人の往来や交流から、両国の近代社会と文化との交わり方を把握する。4、東西文明へのアプローチのあり方を通じて、両国の文明的指向とそれの世界における意味合いをより明確に捉えてみる。5、中日両国の社会と文化との関係を考察し、その近代社会・文化の特質を明らかにする。	
	アジア文化演習（中国） II	中日両国の社会と文化に関連するさまざまな問題をめぐって、東アジア比較文化という視角の応用によってもたらすべく斬新でユニークな問題提起や新思考を、如何に新しい研究構想に生かすかを考える。（授業計画）学生各自がそれぞれ自らの研究構想について報告、発表を行い、それを巡って、参加者全員で、分析・討論を行う（具体的な人数や進展によって時間の配当をそのつど決める）。	
	アジア文化演習（朝鮮半島） I	本授業は、演習の形式を取り、近現代朝鮮半島の歴史を理解した上で、朝鮮半島が抱える様々な問題や日本と朝鮮半島の間に関わる諸問題を検証し、その解決方法を探ることが目標である。近現代の朝鮮半島に関する文献（日本語、英語、あるいはハングル）を輪読し、受講生がその内容に関連した発表を行い、討論を行なう。そして、朝鮮半島の人たちにとって、一体何が問題なのかを理解する「地域研究」の観点を養う。	
	アジア文化演習（朝鮮半島） II	本授業は、演習の形式を取り、目標は受講生各自が関心を持つ近現代の朝鮮半島に関するテーマを発表し、問題意識を研ぎすまし、修士論文へと発展させることである。発表者は、他の受講生にも予備知識を与えるため、自身の研究テーマに関する参考文献（日本語、英語、あるいはハングル）を事前に知らせておき、授業中は忌憚なく討論を行なうことで、回を追うごとに研究の質をより良いものへと高める。	
	太平洋文化演習 I	地球環境の変化を厳しく受けつつある南太平洋島嶼国は“楽園”のイメージに反して国家運営に大きな問題を抱えている。それが伝来の社会組織、ヨーロッパ列強の近代植民地主義、ポスト・コロニアリズムと如何なる関係にあるのか、ポリネシアを中心に考察する。文献講読、発表及び討論により問題意識を明確にする。	
	太平洋文化演習 II	ポリネシアを中心に考察する。当地域の多くのmicrostateでは伝来の土地保有制度と親族制度が経済的近代化や開発を阻んでいる。結果、周辺先進国への経済的依存により近代化を推進する途が避けられない。こうした現状と将来への模索を文化人類学的視点から考察する。文献講読、発表および討論により分析力を高めてゆく。	
	ヨーロッパ文化演習（イギリス） I	ヨーロッパ文化のなかで独特の位置を占めるイギリス文化を、歴史と教育、さらに法という視点から分析することを通じて、その特徴を多角的に理解するセンスを養うとともに、他文化と比較する際の陥穽を自覚させる。特に、安易な日英比較論が横行している我国ではこの自覚は重要である。欧米の中でイギリスに焦点をあてて、その文化的特徴を、①古典文化（ギリシア・ローマ文化）の受容と教育制度、②イギリス法（コモン・ロー）の特徴、③国際関係（旧植民地およびEU諸国との関係）、の三つの観点から分析する。	
	ヨーロッパ文化演習（イギリス） II	ヨーロッパ文化のなかで独特の位置を占めるイギリス文化を、歴史と教育、さらに法という視点から分析することを通じて、その特徴を多角的に理解するセンスを養うとともに、他文化と比較する際の陥穽を自覚させる。特に、安易な日英比較論が横行している我国ではこの自覚は重要である。受講者の研究テーマとの関係でイギリスがもつ意味を、個別的に検討したい。さらに、明治維新以来今日にいたるまで、日本文化論や日英比較論で登場する、種々の議論を批判的に吟味したいと考えている。	

地域文化分野

国際文化専修

ヨーロッパ文化演習 (フランス) I	アンリ・フォションの著作『形の生命』『西欧の芸術—ロマネスクとゴシックの中世』などを購読する。フランス語原文、日本語訳、英語訳を平行して文献購読を進めながら、個別の作品について理解を深め、フランスの美術・彫刻・建築を見る眼を養う。フォションの専門は中世研究であるが守備範囲は広く、西欧近代絵画、銅版画、仏教芸術、北斎版画などにも造詣が深い。この授業は学生が地域文化の知識を得ると同時に、研究の方法を知る場としたい。	
ヨーロッパ文化演習 (フランス) II	ヨーロッパ文化演習 (フランス) Iの講義内容を継続し、アンリ・フォションの著作『形の生命』『西欧の芸術—ロマネスクとゴシックの中世』などを購読する。フランス語原文、日本語訳、英語訳を平行して文献購読を進めながら、個別の作品について理解を深め、フランスの美術・彫刻・建築を見る眼を養う。フォションの専門は中世研究であるが守備範囲は広く、西欧近代絵画、銅版画、仏教芸術、北斎版画などにも造詣が深い。学生が地域文化の知識を得ると同時に、研究の方法を知る場としたい。	
ヨーロッパ文化演習 (ドイツ) I	ヨーロッパのなかのドイツ語圏の早い時代の文化・歴史の役割を探る。一方、ゲルマン民族の始まりから1701年のプロシア王国が成立するまでドイツ語圏の文化・歴史を概観する。また、院生の研究テーマ・関心のある時代の文化・歴史の発展に焦点を絞り詳しく調べる。時代ごとの歴史家の見解の変化と相違を分析する。現代ドイツ人の歴史観 (自分たちのルーツと文化発展の認識・解釈) と異文化へ対応の影響を調べながら、現代日本人の歴史観と比較する。参加者の言語能力によって、ドイツ語・英語の史料も使う。	
ヨーロッパ文化演習 (ドイツ) II	1701年のプロシア王国成立を出発点をして、ドイツと日本の近代化を比較する。両国の地理的環境と立地条件を考慮しながら、この戦乱の多い時代の歴史と文化の発展を分析して、周辺国々の政治的、文化的関係を調べる。共に第二次大戦の敗北者としてのその精神的打撃への対応、敗北からの立ち直りの共通点と違いを分析しながら、現代人の過去への関心、認識を探る。院生の興味・関心のテーマにスポットライトを向ける。参加者の言語能力によって、ドイツ語・英語の史料も紹介する。	
ヨーロッパ文化演習 (東中欧・ロシア) I	現在多方面から注目されている東中欧・ロシアを中心に、現代社会の国際化とグローバリゼーションの背景にあるエスニック・コンフリクト、および多文化的諸要因を分析するために必要な判断力、基礎的力量を形成することを目標として、ディベートやブレインストーミングを交えて演習形式で行なう。主としてナショナリズムと国家統合、エスニシティと文化変容、偏見と差別の形成過程を考察することによって、エスニシティの相互作用における分化と差異化ないしは選別機能の実態に迫っていきたい。	
ヨーロッパ文化演習 (東中欧・ロシア) II	当演習では I に引き続き、当該地域におけるエスニシティと文化に焦点を当てつつ論点をより明確にし、受講生の主体的取り組みを重視した授業をディスカッション形式で行なう。エスニシティの相互作用における分化と差異化においては、とりわけエスニシティの出自、階級、教育が社会的格差の拡大装置として機能しており、わが国における在日外国人などの社会・文化的課題との共通点も少なくない。当授業では、そのプロセスを具体的に明らかにすることによって、現実的課題を明らかにしていきたい。	
アメリカ文化演習 I	「アメリカ」は自由な国家だろうか。確かに憲法で自由が認められている。しかし、あくまでもそれは自由に振る舞える、あるいは自由な選択肢がある... などの可能性の大きさを示唆するもので、現実的には「自由が完全に保証されている」とはいえない。民族の歴史的背景、経済的格差、教育格差、地域間の差等が顕著で、アメリカは決して統一性の高い文化とはいえず、むしろ格差や多様性の高さが目立つ。そのようなアメリカ文化を多面的に理解するための最善の研究方法を、アメリカ文化演習Iではこれを検討していく。	
アメリカ文化演習 II	「アメリカ」は自由な国家だろうか。確かに憲法で自由が認められている。しかし、あくまでもそれは自由に振る舞える、あるいは自由な選択肢がある... などの可能性の大きさを示唆するもので、現実的には「自由が完全に保証されている」とはいえない。民族の歴史的背景、経済的格差、教育格差、地域間の差等が顕著で、アメリカは決して統一性の高い文化とはいえず、むしろ格差や多様性の高さが目立つ。アメリカ文化演習IIでは、このアメリカ文化のどの様相から切り込んでいくのか、十分に吟味する。例えば、人種構成、地域構成、歴史背景、差別など、学生諸君のオリジナリティを反映させた分析モデルを成立させ、今まで見えていなかった独自のアメリカ像を構築する試みをする。	
国際交渉論	授業の前半では、交渉論の基礎として、弁論術 (修辞学、レトリック) の基礎理論と歴史を概説するとともに、「国際」という意味を理解するために、古代ポリス国家から近代国家の成立を概観する。授業の後半では、受講者の関心を考慮して、特定のテーマに関する国際交渉のケーススタディ (例えば、環境問題、外国人労働問題、法制度支援など) を行う。	

国際分野	国際教育論	現代社会の国際化とグローバリゼーションに伴う教育の動向、および多文化主義と多文化教育の諸要因を分析するために必要な判断力、基礎的力量を形成することを目標として、講義形式で行なう。現代社会の急速な国際化はさまざまな教育問題を引き起こしており、わが国においても近年、国際化やグローバリズム、異文化間教育への関心が高まってきているが、当授業がたんなる文化の違いを学ぶだけの文化的教養主義に陥らないために不可欠な反人種主義、反差別の視点を、多文化教育の位相において分析・検討する。	
	国際関係論	本授業は、担当教員の講義と受講生による発表の両方を行ないながら、昨今国際関係にも大きな影響を与えている「ナショナリズム」に関する理論を考察する。受講生は、ナショナリズムに関する理論あるいは自らが関心を持つ地域の「ナショナリズム」やそれが引き金となって起こった国際紛争に関して発表し、討論を通じて解決策を探ることが目標である。	
	国際交流論	日本を中心として、国際交流の理論、現代社会における国際交流と歴史を研究する。「国際交流」の定義を出発点として、戦前と戦後の政治家の「文化外交」・「宣伝外交」と「パブリック・ディプロマシー」それぞれの意味・使い方を探る。次に現代日本政府の公式「国際交流政策」を他の先進国のそれと比較して、国際交流産業の実態を把握し、院生の将来の職業観や可能性を高める。終わりに、人間の国際交流の長い歴史のハイライトを概観する。	
	比較社会論	異文化理解の理論的支柱のひとつである文化人類学的認識法および研究方法を紹介し、諸社会事象の検討をする。非西欧社会の家族・親族論、ジェンダー論、贈与交換論を縦糸とし、エスノセントリズム、文化相対主義、文化相対主義のパラドックス、オリエンタリズム等を横糸として考察する。一方的講義ではなく可能な限り受講者による討論を行いながら進めてゆく。	
	比較思想論	比較思想の手順を Masson-Oursel, La philosophie comparee を指南として学ぶ。但しこの書の講義が狙いではなく、この書で引かれている諸思想の基本的な知識を習得し、且つ比較哲学の中でいかに扱われているかということを観察しつつ、具体例からより普遍的な方法論を学んでゆく。そのため要求される知識は多岐にわたり困難を覚えることがあるかもしれないが、その段階になってMasson-Ourselが個別的知識の量的問題についての懇切な助言の意義が了解できる。	
	比較文化論	中日比較文化研究の理論と実践を深く把握し、理解することによって、比較文化研究とは何かを追及し、その可能性を再確認する。 1、欧米の比較文化論。2、日本の比較文化論。3、中国の比較文化論。4、魏源と佐久間象山を比較する。5、中日両国の米欧訪問記録を比較する。	
関連分野	民族共生論	多民族社会における異なる民族の共生という課題が惹起する問題への理解を深めるために、事例研究としてアメリカ先住民の歴史と現状を取り上げ、「先住民」という存在が現在のアメリカ社会に投げかけている諸問題について講じる。また比較研究として日本の先住民であるアイヌ民族の問題を取り上げ、日米の「先住民問題」に見られる普遍的な課題について考察する。	
	言語文化論	コミュニケーション理論を用いて言語と文化の関係を研究する。一般的には、(1) コミュニケーションは文化である、あるいはまた、(2) コミュニケーションは言語的と非言語的メッセージよりなる、は正しい命題であるとされる。すると、(3) 文化は、言語的と非言語的な要素からなり、それぞれのメッセージを、人にコミュニケーションすることになる。(1) (2) (3) はそれぞれどのようなことを意味しているのであろうか。これを研究する。	
	表象文化論	ラファエロ、ピラネージから始まって17世紀のサーンレダム、18世紀のヴェネチア派、20世紀のキリコらまで、西洋には建築や都市景観を描く絵画の流れがある。個別の作家について具体的に作品を見ながら、空間認識の問題を考える。日本の遠近法といった問題も、比較考察の俎上にのぼることがあるであろう。	
		(概要) 各指導教員が学生に対し、研究計画の策定を支援し、修士論文の作成に向けて指導を行う。 (2 倉田実) 古代文学の作者や作品、および、その歴史的背景などについての研究指導を行う。 (3 稲葉二柄) 中世期の散文作品の研究についての研究指導を行う。 (4 石川了) 近世文学分野に関する研究指導を行う。 (5 須田喜代次) 小学校・中学校・高等学校の国語科教材の文学作品を取り上げ、国語科の授業の進め方について研究指導を行う。	

- (6 柏木由夫)
古代の和歌文学とその周辺（主として古代後期作品）についての研究指導を行う。
- (7 杉浦静)
近代文学分野に関する研究指導を行う。
- (9 田口孝夫)
シェイクスピアを中心とするルネサンス期の英文学、あるいは20世紀の小説について研究指導を行う。
- (10 小林史子)
アメリカ文学分野における研究指導を行う。
- (11 栗原裕)
英文学分野における研究指導を行う。
- (12 小林昌夫)
英米文学分野における研究指導を行う。
- (13 山名章二)
米文学分野におけるアメリカ流の段落構成の理念を採用し説得力のある論述を实践した研究指導を行う。
- (14 坂口明德)
20世紀始めから現在に至るまでのイギリス小説を中心に研究指導を行う。
- (15 伊東武彦)
英語教育学分野における研究指導を行う。
- (16 村上丘)
コーパスおよび最新の文法書を用いて類義語および語法の記述を批判的に検討し、新しい提案をすることを目的とした研究指導を行う。
- (17 河野武)
英語学分野における主要な文献、言語資料について研究指導を行う。
- (18 中野節子)
英米児童文学の分野における研究指導を行う。
- (19 松村茂樹)
中国都市文化研究 近現代日中交流研究について指導を行う。
- (20 馬場優子)
太平洋島嶼地域の社会・文化・歴史に関して受講者の問題関心に応じた研究指導を行う。
- (21 葛西康徳)
法制史（特に古代ギリシア・ローマ法）、西洋古典学（特にレトリック（弁論術））に関する研究指導を行う。
- (22 森岡修一)
各自の修士論文テーマに即しながら、言語文化学理論に対する理解を深め、ヴィゴツキーなどの社会・文化的アプローチに基づいた比較文化の観点から研究指導を行う。
- (23 松村恒)
比較文化に関する研究について、特に印欧語と古典語の研究書を用いた研究指導を行う。
- (24 銭国紅)
中日両国の文化と社会の本質特徴または両国の人々の相互認識の比較と究明を課題とする研究指導を行う。
- (25 持田公子)
地域的にはフランスとオランダ、分野的には絵画と建築を中心とする表象文化に関する研究指導を行う。
- (26 ボダルト・ベイリー)
ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーの考え方を採用しながら異文化について研究指導を行う。
- (27 黒山照子)
アジアの言語文化研究。具体的には、比較史的手法を用いて、特に東アジア（中国、日本、朝鮮半島）の女性、ジェンダーの課題の研究指導を行う。
- (28 平井一弘)
コミュニケーション理論を用いて、言語と文化の特殊的な局面の研究指導を行う。
- (29 今村忠純)
近代の国語辞典の第1号である『言海』に関して研究指導を行う。
- (30 安藤聡)
英国の現代小説における'Englishness'について考察し、現代作家のナショナル・アイデンティティについて研究指導を行う。
- (31 吉田光浩)
日本語学について演習形式で授業を進め、研究指導を行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(人間文化研究科現代社会研究専攻(修士課程))			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
科 基 目 礎	Developing Critical Thinking Skills	クリティカル・シンキングは他人の意見を批判的に見るのではなく、情報や知識を複数の視点から注意深く、かつ論理的に分析する能力である。哲学、心理学、教育学、社会学、文学のようにそれぞれ独立して発展してきた学問が、複合的な問題分析と解決案を要求するようになったことから学際的なアプローチが重要となった。本講では方法論としてのクリティカル・シンキングにとどまらず態度としてのクリティカル・シンキング力の育成も目指す。(講義での使用言語は英語である。)	
	Critical Reading and Writing	クリティカル・リーディングでは、テキスト理解のプロセスへの認知的参加が可能となる能力を育成する。そのために必要に応じて使い分けられるべきリーディングの種類、テキストの批判的分析方法を考察する。クリティカル・ライティングでは、説得力を持った論理展開ができる能力を育成する。そのためにargumentative essayの書き方のプロセスを例に、論理構造について考察する。(講義での使用言語は英語である。)	
基 礎 理 論 分 野	社会情報研究基礎論	私たちが社会生活の中で認識している「事実」は、各種のメディアから伝達されてくる情報に依存している。その場合、常に「事実」というものは、その「事実」を語る者や聞く者の意識の作用を通して構成されている。この傾向は、情報メディアの発展とともにより濃厚になり、現代人はほとんどすべて、「見てから定義しないで、定義してから見る」状態に置かれている。本講では、今日における「事実」の基本的な構成メカニズムを、社会情報研究の基礎的課題のひとつとしてとりあげたい。	
	メディア研究基礎論	本講義においては、メディア研究の基礎となる理論についての講義を行っていきたい。その場合せまい意味でのマスコミュニケーション研究の成果について述べるだけではなく、メディアについて歴史的文化的背景からの考察を深めていくつもりである。そのために講義内容は、メディアの歴史について語る部分が多くなることが予測される。	
	コミュニケーション研究基礎論	CMC(Computer Mediated Communication)の研究についての基礎研究を行う。CMCを利用することにより、その場にいない遠隔地の相手とのコミュニケーションが可能になるというメリットを残したまま、デメリットである自分勝手な行動の増加を防ぐ方法としてSIDE(the social identity model of de individuation effect)と呼ばれる理論がある。SIDEモデルは、たとえ視覚的匿名性状況にあっても、自分がコミュニケーションを行っている相手との仲間意識が強ければ、自分勝手な行動は抑制され、まわりに合わせるような行動が増加するという理論である。SIDE文献を参照しながらCMC調査研究を行う。	
	社会情報の歴史	過去の人間が後世に伝えた膨大な史・資料は、ヴィジュアルなものやオーラルなものに分類されるが、それらのいずれもが「情報」という概念でとらえられる。種々の情報がそれぞれの時代・社会において果たしてきた役割を知ることの重要性と、情報を選択・分析・解釈する研究方法を習得する。	
	情報社会及び情報倫理特論	近年の情報化の進展によって人々のコミュニケーション・行動様式が大きく変化し、倫理・道徳・法も抜本的に変わらざるをえなくなっている。そこで、この授業では、情報社会論の教科書を用いた受講者の発表と討論を中心にして、情報化による社会の変化を多面的にとらえる。次に、情報化によって発生する社会的諸問題として、データやプログラムの不正コピー・使用等の知的所有権問題、コンピューターウイルス被害などのセキュリティー問題をとりあげ、これらの問題に対処するために倫理・道徳・法がどのように変わるべきかを考察する。	
	新聞特論	17世紀ヨーロッパのコーヒー・ハウスに端を発し、長い歴史と伝統を誇ってきた新聞は、今、存続の危機に立たされている。インターネットの登場で、経営基盤が根底から揺らいでいるばかりか、市民の「知る権利」の代行者という新聞ジャーナリズムの根幹に深刻な疑問が突きつけられているためである。紙媒体から電子媒体に移行する時、培われたジャーナリズム精神の蓄積をどう継承させ、根付かせていけるのかを追求する。	
	放送・通信特論	通信産業及び放送産業は、インターネットの進展とこれに伴う制度変更によって、大きく変化している。本講義では、日本や海外の両産業の構造変化とその要因を分析し、根本的な変化の潮流を把握することを目的とする。授業は、予め複数の書籍や論文を読んだ上で、解説、議論をするという形態で進めていく。産業の変化を理解するためにも、ある程度の量の文献を読むことになる。	

マスコミ言語特論	新聞・雑誌・テレビなどマスメディアが使用する言語は、紙面的・時間的な制約から事象を簡略化する。ニュース性を強調する心理が働き、「白か黒か」「善か悪か」の二元論的解釈に短絡する傾向がその一例である。メディアはまた、客観性を装うため、しばしばある種の無人称表現を使用する。本講義では新聞・週刊誌・月刊誌の活字メディアを中心に言語・文体の歴史の変遷をたどり、現代マスコミ言語の特徴と問題点を明らかにする。講義は文献購読と資料調査・分析を並行して進める。	
災害情報特論	過去の災害事例をもとにした災害情報のケーススタディーを行い、現代社会がどのような変化の中にあるのかを探る。授業では毎回テーマを設けて、内外の災害事例をもとに、災害時に情報の発信や伝達にどのような課題が見つかったか、またその対応策はどうすればいいかなどを考察し討議する。	
世界経済情報特論	現代世界経済の核心となるテーマを取り上げた書物をテキストにして、世界経済論の基礎学力を底上げしていく。具体的には、前半の授業では、第二次世界大戦直後から世紀の転換期に至る約60年間の世界経済の歩みを跡づける。後半には、世界経済の現況、つまり市場のグローバル化を契機とする国際経済秩序の転換の具体的な姿をフォローしていく。また、今回のアメリカ発の世界的不況の実相にも肉薄するはずである。	
日本経済情報特論	日本経済の現状分析を、主流をなす産業・財政金融等からではなく、その影響を強く受けて苦境に立っている農業・地域・生活の面から分析する。具体的には政策論的なアプローチを採用し、地域農業における集落営農や地域農業支援システムの展開、地域内循環型経済の構築、福祉国家から福祉社会への移行をとりあげて論じる。三者の共通項としての人々の協同に注目する。	
地域再生システム論	今日、大都市圏、地方都市、中山間地・離島等の条件不利地域は、治安の悪化、人口減少・高齢化、産業衰退等の地域問題に直面している。このような地域を、安全・安心で、安定した生活ができる地域へと再生するには、地域内外で多様な主体が連携して地域活性化に取り組むための「地域再生システム」が必要とされている。この授業では、地域再生システム論の教科書を用いた受講者の発表と討論を中心に、地域問題を多角的にとらえ、地域再生を可能にするシステムづくりのために何が必要かを考察する。	
ソフトウェア特論	情報を創造する力は、情報を表現する力に比例する。本講では、多様な情報のコンピュータ言語（VB）を用いた具体的な表現技術について学び、幅広い情報創造力の涵養を目指す。VBについての知識は前提としない。情報の基本的操作から始め、図形の静的操作、動的操作および処理の基本的なアルゴリズムについて扱う。毎時間テーマを決め、具体的なプログラム作成を通じたコンテンツを作成して理解を深める。	
学習科学特論	人間の学習のプロセスには、理解、判断、問題解決、意思決定、推論、創造などの高次の認知活動がすべて含まれている。この授業では、学習効果に特に影響するいくつかの認知的要因についてディスカッションや最近の研究事例の文献講読を交えて学習する。これらの要因を踏まえた上で最新のテクノロジー（パソコン、ゲーム、インターネット、eラーニング）による新しい形態の学習についての長所・短所を具体例を交えながら考察していきたい。	
情報ネットワーク特論演習	現在のネットワークの主流であるインターネットの仕組み、特徴などに関して基礎的な知識の取得を授業の目標とする。まず、ネットワークの基礎知識として、プロトコルとOSI参照モデルとの関係、各種ネットワーク機器の特徴などについて演習を交えて学ぶ。次にインターネットの主要なプロトコルであるTCP/IPについて、その特徴、IPアドレス構造とクラス概念との関係、サブネットなどについて勉強する。最後にLANについて、Ethernetの特徴、CSMA/CDとトークンリングなどを講義する。	
情報システム特論	コンピュータによる高速・正確な情報処理は、社会情報の研究においても基本である。ここではコンピュータを利用できる最低限の知識・技能を前提として、情報の効果的な利用ということから、情報科学の基礎概念と、高度な情報処理技術を身につけさせることを目的とする。それにはまず情報理論における情報量の概念、ならびに、情報のモデル化、構造化、効果的な情報処理方式などを学ぶ。	
マルチメディア特論演習	「Web 2.0 時代の到来」と言われる時代の、米国を始めとする国々における情報環境、情報教育の現状を、最新の情報技術やマルチメディア技術・コンテンツ制作の観点から概観し、技術の恩恵とともに抱えている課題を明らかにする。また、最新のソフトウェア・ハードウェア技術を活用し、画像や動画、音声や音などを素材としたマルチメディアコンテンツの制作と情報の発信を通して、情報社会、Web 2.0 時代の情報技術の現状を学ぶ。	

	情報処理特論	情報処理の数学的基礎とシステム分析の数学的基礎及びその適用事例について講義する。まず、計算機の基本論理モデルであるチューリング・マシンについて講義し、計算機の動作及びその限界について基本的な知識を習得することを目標とする。次に、システム分析の手法であるネットワーク理論に関する講義を行い、システムをネットワークとして記述するための手法について学習する。併せて、企業間関係の特性を、ネットワーク理論を使って分析した事例について解説し、数理的な社会分析の事例について理解することを目標とする。	
	コンピュータグラフィックス特論演習	今日では3次元情報の表現として3D-CGが日常的に使用されている。3D-CGにおいて他者と情報を共有するためには、表現のルールを理解することが大切である。この演習では、3D-CGによる演習を併用しながら、まず、投影の概念を理解した上で実際の手法を表現対象に応用することで3次元形状の2次元表現について理解を図る。また、光の特性を理解した上で、同様にCGに応用することで立体の見え方について理解を図る。これらの演習からリアリティのある空間表現と情報の共通理解について議論していく。	
	情報と職業特論	現代の高度情報化社会についての捉え方は多様であるが、本科目は情報科（高等学校教諭専修免許状）の免許取得に必要な科目の一つでもあるので、「情報通信技術（ICT）があらゆる職業分野に浸透し、個々の職業分野での労働がICTを用いたシステムとして展開している社会」という定義に基づくこととしたい。この観点から、本講では、高度情報化の展開過程における産業構造の変容、それに基づく職業構造の変化、職業観・労働観と職業倫理の問題、グローバル社会における情報と職業などの主題について講じていく。	
	情報教育教材開発特論演習	本特論は、教材開発の背景にある学習観を基礎として、教材設計および開発の演習を通して教材作成方法の実際を学び、情報教育教材を設計・開発する専門家としての基本的な知識と技術の習得を目的とする。演習は、高等学校の教科「情報」の教材を取り上げる。教材は単元で一つのまとまりをもつ教材群を想定する。単元目標の設定、単元構造の設計、開発するメディアの選択、教材開発の実際、教材開発と模擬授業、教材の評価と改善等の一連の開発過程を取り上げる。	
生と死の臨床	ケアマネジメント論	（概要）ケアマネジメントの基本を理解し、利用者の力を引き出し、各種サービス提供者をケアチームとしてコーディネートする手法を実践的に学ぶ。授業は自立支援、利用者主体の基本理念を基礎に、インテークから終結までのケアマネジメントの過程を事例を使い実践的に学ぶ。（オムニバス方式／全15回） （20 是枝祥子／4回） ケアマネジメントの設立と背景、ケアマネージャーに求められる価値と倫理、介護保険制度に関する基本的について講義する。 （32 服部万里子／10回） ケアプランの目標設定、個別援助計画、リスク管理、モニタリングと記録、ケアマネジメントの作成演習等を行う。 （20 是枝祥子・32 服部万里子／1回） ケアマネジメント論総括	オムニバス方式
	ターミナルケア論	（概要）人生の最期をどのように過ごすか、癌の告知をどうすべきか、高齢者の人生の終末期においても、人間としての尊厳性と生活の質の向上について、死をめぐる自己決定や生命倫理の視点から授業を進める。また、欧米やオーストラリアにおけるホスピスと日本のターミナルケアの現状と課題を分析し、社会学、医学、介護・看護学の視点から今後の方向性を明らかにしていく。（オムニバス方式／全15回） （18 荒井芳麿／2回） 死に向かう準備の人類学「文化に組み込まれた死」（池田光穂）の比較研究とケア・プランニングにおける文化的要素advance directives に対する態度の人種・文化による類似と差異について講義を行う。 （24 佐藤富士子／2回） 特別養護老人ホームあるいはグループホーム等の福祉施設における認知症や老衰等による看取り介護における介護職・看護職の役割と家族への支援を検討していく。 （39 西嶋公子／11回） 開業医として30年間地域医療にかかわってきた経験と、この10年、欧米やオーストラリアのホスピスを視察してきた経験から、日本のターミナルケアの現状と課題を分析し、今後の方向性を明らかにしていく。欧米のホスピスの歴史にもふれながら本講義を展開していく。	オムニバス方式
	死と死別の臨床心理	今日的な意味での死や死別に伴う問題点を整理し、死にゆく人の心理と死別を体験した遺族のグリーフ（悲嘆）についての理解を深めてゆく。前半では講義を中心にするが、全体としては受講生自身の視座を確認しつつ対人援助についての洞察を深めていく。末期患者や遺族へのグリーフケアについて、事例研究などを通して考察していく。（1）今日の日本社会における「死」をめぐる状況の理解（2）死亡原因などによるグリーフの特徴（3）グリーフワーク（喪の過程）とグリーフケアについて。	

分野	ライフケア特論	半世紀の日本社会の経済的変化は生老病死のあり方を大きく変えてきた。生近代化の進行とともに専門職化が進む中で、生命の誕生も死にゆくことも医療化の対象となっていく。今日、家族が小規模化し少子高齢社会のなかで、医療費削減と医療の地域間格差が顕在化し、新たな展開が生まれつつある。この講義ではく性と生殖くリプロダクション政策く出産と子育てく病と看護くターミナルケアくという各テーマのもとに人の生命の誕生と終わりに焦点をあて、ケアするーケアを受ける、という社会的行為が起こる空間、相互作用、歴史性、文化について考察する。	
	老いと死の社会理論	社会の高齢化・成熟社会化を背景とする老いや死の問題を、私たち一人ひとり（全世代）が自らの生き方の問題として考え、それを社会展望につなげていくための理論と方法について議論する。エイジングや生涯発達に関する研究をはじめ、再帰的近代化論、ライフコース論、死生学、ライフストーリー論、生成理論、日本文化論などの知見を導きの糸とし、老いや死という人生後半の意味地平から「生（life）」を捉えなおしていくこととはどういうことなのか、その社会的意味を考えたい。文献批評や個人発表を契機とするディスカッション中心の授業となる。	
	医療福祉特論	医療現場で疾病構造の変化とこれに対応する医療技術の大幅な進歩をみる今日、障害を残す患者、難治性疾患に苦悩する患者、臓器移植の問題やターミナルケアなどさまざまな状況におかれた患者が存在する。医療機関に何故ソーシャルワーカーが必要なのか、その専門性は何か、固有な視点で実践をなすあるべき姿とは何かなどを中心にさまざまな状況におかれた患者の側に立脚した目で見つめることの出来る専門性について学ぶ。	
	生と死の臨床特別実習 (インターシッパ)	<p>(概要) この実習では身体および精神のターミナル期を支える場での実習をとおして、個人が最後まで尊厳をもって生き抜くことの重要性を学び、どのようにしたら、そのような生と死が実現可能なかを臨床の視点で学ぶことを目的とする。具体的な実習現場は、ホスピス有床診療所、病院緩和ケア病棟、特別養護老人ホームおよびグループホームである。多職種がどう連携することで尊厳ある個人の死が実現可能なかを学ぶ。演習を5回、実習を10回とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (19 大出春江/8回) 医療機関・在宅における生と死を中心テーマとしながら、あらゆる年齢層の死について検討します。 (24 佐藤富士子/7回) 老人施設における生と死を中心テーマとしながら、高齢者における死について検討します。</p>	オムニバス方式
分野	ジェンダーの社会学	ジェンダーに関連する社会構造全体と、そこから派生するジェンダー社会問題について、概略的な知識を持つことにある。授業形式はゼミ形式とし、「ジェンダーの社会学」に関連する基礎的文献を講読する。雇用・家族・社会保障・社会福祉に通例するジェンダー構造を明らかにする文献や、セクシュアル・マイノリティ差別・シングルペアレントファミリー問題・離婚・ドメスティック・バイオレンス・児童虐待・貧困など、ジェンダー構造に規定される社会問題を扱った文献の中から、参加者と相談し希望者が多い文献を共同で講読する。	
	ジェンダーと医療	<p>(概要) わが国の女性の平均寿命は85.6歳、健康寿命も77.7歳とトップクラスの長寿国である。老後も健康体で楽しい生活を送ることは誰もが持つ希望であり、高齢になって病気にかかったら治すという考えでなく、予防医学の知識を得て、若いうちから日々の生活の中で実践していくことで、その努力が一生涯の健康につながるという。女性の一生涯のライフサイクルごとに予測される健康問題やその解決法について、社会問題、家族問題、価値観の変化等の視点から問題を検討する。(オムニバス方式/全15回) (21 金澤章/8回) 女性とジェンダー、脳の形態と働き、女性ホルモンの働き、性周期、更年期、閉経、リプロダクティブエイジの健康リスク、高齢期の健康上の問題、喫煙と健康、メタボリックシンドローム、ダイエット、サプリメントについて講義と行う。 (24 佐藤富士子/7回) 介護の諸問題、高齢者の生活（福祉施設、自宅、地域住民）、高齢者のスピリチュアリー、心の病と介護上の注意点、女性と医療について講義を行う。</p>	オムニバス方式

ジェンダーとメンタルヘルス	メンタルヘルスの中でも、とくにジェンダーの関与する問題について考えていく。1) ジェンダーとトラウマの関係、2) 性暴力(性的虐待、レイプ、セクシュアルハラスメント等)やDV、デートDVなどの経験が被害者に及ぼす精神的影響、3) 望まない妊娠や中絶、不妊といったリプロダクティブ・ヘルス・ライツとメンタルヘルスの関係、4) 摂食障害(過食・拒食)、自傷行為、依存症(アルコール、薬物、買い物、恋愛、セックス等)などの背景にあるジェンダーの傷つき、5) マイノリティの女性と複合差別、6) 戦争・植民地化が男女にもたらすもの、7) 男性性と攻撃性や暴力、8) 「母性」や愛着をめぐる問題、9) 自己肯定とエンパワメント、10) 自助グループとつながりの快復、11) 精神医学や心理学のジェンダー・バイアス、12) 臨床現場のジェンダー関係、13) 回復と創造性について、関連文献を講読、議論する。	
ジェンダーと法律学	本授業では、法におけるジェンダー・バイアスの発見とその要因分析を通じて、日本社会の構造的な問題としてのジェンダー問題の理解を深めることを目的とする。日本におけるジェンダーと法について、女性に対する暴力(ドメスティック・バイオレンス、セクシュアル・ハラスメント、ストーカー、性暴力、子どもへの暴力)やジェンダー・セクシュアル・マイノリティの問題(性同一性障害、同性カップルのパートナーシップ)、人身売買などを取り上げ、法制度や裁判例、人びとの法意識などの多角的な検討を行い、ジェンダーと法の課題と問題解決の方向性を考察する。	
性暴力に関する調査と方法	性的虐待・搾取、セクシュアル・ハラスメント、DV、レイプ等の性暴力に関して、社会的関心は高まりながらも、日本では従来の一般的な社会調査の方法による意識・実態の把握が進まずにいる。若干の臨床調査は存在するが、性暴力の背後にある社会構造を分析するためには、十分とは言えない。そこでまず、海外での「性暴力に関する調査と方法」に関し、資料を収集することを通じて、その調査結果を日本社会の実態を把握する上での参考にし、日本の状況に合った調査方法論を確率をめざして研究する。	
社会福祉援助論(女性と自立支援)	社会福祉援助技術は、専門の援助者が現行の社会福祉制度・政策(ハード面)とともに福祉活動を実践化していくための方法である。今後増大する社会福祉サービス利用者に対する援助技術の基礎となる「技術論」は援助職者にとって必要不可欠な技術として幅広く理解する必要がある。本講は、まず人間尊重、権利擁護の観点を踏まえソーシャルワークの課題を理解することを目的とする。その上で、具体的な事例を基に、援助活動の基本的枠組み及び利用者の複雑多様化する社会福祉ニーズに対して、社会福祉援助技術活動が、どのように実践されるのかを学ぶ。	
ジェンダーと臨床特別実習(インターシップ)	実践経験が十分ではない受講生を対象に、ジェンダー臨床研究を進めるために必要な知識と経験を得るための実習(インターシップ)を行う。いかにして、女性の経済的・精神的な自立を支援することができるか、民間シェルター・婦人保護施設など現場で実践する専門家に学ぶ。	
アイデンティティ論	学部の「アイデンティティ論」を学んだことを前提に、グローバル化した社会における多様で多元的に錯綜する権力作用の結果として生じる《アイデンティティの政治》を考察する。「ジェンダー」、「エスニシティ」、「セクシュアリティ」、「階級」を軸に、〈身体〉×〈多文化〉×〈言語〉×〈制度〉×〈権力構造〉×〈表象〉×〈人間関係〉×〈位置〉×〈世界観〉×〈市民権〉×〈ハイブリディティ〉をキーワードとして、「アイデンティティ」を解体して分析研究する。「ポスト近代」の途上にある現代人の「アイデンティティ」、戦争・暴力・差別によるダメージと「アイデンティティ」の関連、異文化・多文化を生きる「ディアスポラ」と「アイデンティティ」等についても考察したい。	
宗教と社会特論	死をめぐる様々な問題(ターミナルケア、脳死問題、臓器移植、エンバーミング、葬送儀礼、火葬場問題、埋葬法、お墓をめぐる問題など)とその現代的展開について現在どのような議論が展開しているかを関連文献の講読を通じて明らかにすると同時に、それらの現象をフィールドにおいて臨床的に観察、体験し、記述することにより日本人の「死生観のエスノグラフィー」を作成し、さらに日本人以外の人々の死生観のエスノグラフィーと比較検討することで「死生観のエスノロジー」を受講者と共に目指す。	
現代社会理論研究	現代社会について論じている社会学者の理論を取り上げることにより、現代社会がもつ諸問題について広く考察してゆくことが、この授業の目的である。具体的には、アンソニー・ギデンズ、ウルリッヒ・ベック、ジグムント・バウマン、ジョック・ヤングの社会理論をとりあげる。とりわけ、グローバル化、個人化が進展しつつある現代における、人と人との関係や、連帯のあり方、個人と社会の関係、社会的排除の問題などに焦点をあてたい。	

現代社会理論・社会調査分野	リスク社会論	現代社会はリスクに満ちた「リスク社会」だと呼ばれる。しかし、いかなる意味で、どんな点において、現代社会は「リスク社会」なのか。この点についての理解を深めることが、この授業の目的である。具体的な授業内容としては、まず、ウルリッヒ・ベックやニコラス・ルーマン、アンソニー・ギデンズのリスク論を紹介し、次いで、教育、労働、家族、福祉社会といった分野において、実際にどんなリスクが生じているのか、そのようなリスクに対処するためにどのような方策が必要とされており、どのような対応が実際になされているのかを考察していく。	
	社会運動論	社会運動や集合的行為に関する諸理論を扱い、現代社会における社会変動を個人と集団との関連において分析していく手法を学習することを目的とする。具体的には階級理論、集合行動論や相対的剝奪、資源動員論、新しい社会運動論、イデオロギーや集合的アイデンティティ、フレーム分析、政治的機会構造などに関する議論をとりあげる。そして、国内外の社会運動や集合的行為に関する事例を扱った分析を参照しながら理解を深めていく。	
	地域文化論	特定の地域についての学際的な研究である地域研究 (Area Studies) の方法をベースに、受講者自身の研究テーマをフィールドのなかで具体的にどのような形で展開させたらよいかを指導し、かつ新しい研究の方法を共に考える。当該地域の言語、地理、歴史、文化、社会構造についての深い理解ばかりでなく、こうした理解に基づき、社会運動や開発など地域の抱える問題の解決や発展に対する援助を含めた行動する社会科学の在り方を探る。	
	ネットワーク論	現在社会を「ネットワーク」をキーワードとして読み解いていく。講義ではまず、ネットワーク論およびソーシャルキャピタル論の概要を説明する。次に、組織とネットワークについて議論し、その後、地域とネットワーク、家族とネットワークについて議論する。	
	調査研究方法	(概要) 社会調査を実践的に企画・設計し、分析・集計をおこなうための知識と能力の習得を目的とする。この授業は社会調査し認定科目 (【H】調査企画・設計に関する演習 (実習) 科目) として設定される予定である (オムニバス方式/全15回) (29 石田光規/8回) 実際に、テーマおよび仮説を設定し、調査票の作成、データ収集、分析をしてもらう。最後に、分析結果を踏まえて調査レポートを作成し、社会調査の一連の流れを実践的に学習する。 (36 松本康/7回) 社会調査に関する基礎的事項、調査倫理について講義する	オムニバス方式
	質的調査法	本特論の目的は第1に、質的データと量的データの特性および活用の適性を十分に理解した上で、質的調査のもつ全体性、歴史性、個別性について深く理解する。第2の目的は、質的調査の手法を用いて調査実践をすることである。最終的に調査を通して得られたデータに基づき、モノグラフを作成できる調査技術と知識を修得することを目標とする。その際に調査倫理に関しても十分に理解しておく。	
	多変量解析	社会調査における、多変量解析の手法に関する専門的な知識と技術を習得することを目的とする。具体的には多変量解析の考え方を講義し、特に重回帰分析、パス解析、因子分析、ロジスティック回帰分析などの統計的手法を説明する。また、サーベイ調査による統計データを用い、コンピューターとSPSS (統計パッケージ) を用い、それらの手法を使って、具体的な仮説の検証に関する課題 (分析) を行う。この授業は専門社会調査しに関する認定科目 (【I】多変量解析に関する演習 (実習) 科目) として位置づけられることとなる。	
	(概要) 各指導教員が学生に対し、研究計画の具体的な主題についての演習を行う。 (2 前納弘武) 情報化の進展に伴う社会情報の影響とその変化についての演習を行う。 (3 小谷敏) メディア研究の基礎理論について、リップマンの『世論』、マクルーハンの『メディア論』についての演習を行う。 (4 森義信) 権力者が都合の良い情報を捏造したり、情報を改竄して伝えたり、実在しないドキュメントを存在するかの如く宣伝したりすることにより、歴史の流れを大きく変えてきたとくに著名な事例をとりあげ、情報に対してとるべきスタンスについて演習を行う。 (5 松浦康彦) 「既存ジャーナリズムvs. ニュー・ジャーナリズム」という主題のもと、演習を行う。 (7 千川剛史) 地災害被災地の復興をテーマにした事例研究を行い、災害によって大きな被害を被った地域の問題について演習を行う。		

<p>現代社会研究特別演習</p>	<p>(8 藤吉洋一郎) 災害と情報に関してのテキストの読解を中心にした、ゼミ形式の演習を行う。</p> <p>(9 中野一新) アグリビジネス論やフードシステム論の基本的な文献を輪読し、国の内外における現代の農業・食料・農村問題を解明するための分析方法を習得させ、演習を行う。</p> <p>(10 田代洋一) 農業・地域・生活経済の分野、例えば食生活のあり方、地域格差の拡大要因、地域福祉産業の可能性等について演習を行う。</p> <p>(12 東明佐久良) 空間情報システムについて、その標準化、設計概念など考究させる。主な授業内容は、空間情報システムの分析、モデル化とその形式化、空間情報システムの設計などの演習を行う。</p> <p>(18 荒井芳廣) 特定地域の宗教社会的状況についてのフィールド調査をについて演習を行う。</p> <p>(19 大出春江) 高齢社会における生と死の問題を社会的に実証的な調査研究の対象として扱い、演習を行う。</p> <p>(20 是枝祥子) 介護の専門性、介護を取り巻く社会資源やかかわる多職種の連携など、現状を把握しながら演習を行う。</p> <p>(21 金澤章) 真の男女平等社会構築のために、各々のライフサイクルにおける「女性の健康」について検討し、またトピックスを紹介しながらゼミ形式の演習を行う。</p> <p>(22 鄭暎恵) “ジェンダー” “エスニシティ” “セクシュアリティ” “階級” “子ども” の五つのカテゴリーを軸に、暴力・差別によりダメージを受けた「アイデンティティ」「セルフ」が回復するために必要なものについて演習を行う。</p> <p>(24 佐藤富士子) 老年学や他領域の概念や理論を学ぶことを通して、老いについて死も含め多面的に考察し、健康と介護についての演習を行う。</p> <p>(25 丹野真紀子) 社会福祉学を中心に、法学・社会学・教育学・心理学・医学・看護学の視点を含めて、文献を購読し、演習を行う。</p> <p>(27 久保田滋) 政治社会学・都市社会学・社会調査などに関連した分野の演習を行う。</p> <p>(28 伊藤美登里) 英語ないしはドイツ語で書かれた社会学の文献を用い、論文の読み方、社会学の基本的な概念について演習を行う。</p>	
<p>指 研 導 究</p>	<p>(概要) 各指導教員が学生に対し、「現代社会研究特別演習」の成果のもと研究計画の策定を支援し、修士論文の作成に向けて指導を行う。</p> <p>(2 前納弘武) 情報化の進展に伴う社会情報の影響とその変化について研究指導を行う。</p> <p>(3 小谷敏) マスコミュニケーションの基礎理論および歴史的研究とともに、ポピュラーカルチャー、とりわけ若者や子どもの文化に関する領域について研究指導を行う。</p> <p>(4 森義信) 現代社会における情報のあり方を、歴史的に比較・考察する視角のもとに考究し研究指導を行う。</p> <p>(5 松浦康彦) 「新聞特論」「現代社会研究特別演習」の成果はもちろん、激動する現代社会への理解を深め、研究指導を行う。</p> <p>(7 千川剛史) 現代社会の構造と変動過程を解明するためのキーワード（情報化、格差社会、リスク社会、地域再生、ボランティア・NPO等）の中から研究課題を設定させ、研究指導を行う。</p> <p>(8 藤吉洋一郎) 災害と情報に関して、研究指導を行う。</p> <p>(9 中野一新) 途上国への開発援助と南北問題の新たな展開、食料・水・土地資源の偏在とアグリビジネスによる食料支配、途上国における不平等の拡大と民衆の叫びを掲げて研究指導を行う。</p>	

<p>現代社会研究特別研究</p>	<p>(10 田代洋一) 農業・地域・生活経済の分野についての研究指導を行う。</p> <p>(12 東明佐久良) 空間情報が果たしてきた役割や機能を研究することとあわせ、これからの社会生活において情報というものに人間がどのようにかかわっていくべきかに関する研究指導を行う。</p> <p>(18 荒井芳廣) 社会学分野に関する研究指導を行う。</p> <p>(19 大出春江) 現代社会における生と死のイメージをより豊かにすること、すなわちいのちの文化の再生と創出にむけて、生と死の臨床に関わる領域のなかから、研究指導を行う。</p> <p>(20 是枝祥子) 介護分野に関する研究指導を行う。</p> <p>(21 金澤章) 「女性と医療」に関して、研究指導を行う。</p> <p>(22 鄭暎恵) 「ポスト近代」「グローバル化」の複合的で多面的な時代に、暴力・差別によってダメージを受けた「アイデンティティ」「セルフ」の回復をテーマに、研究指導を行う。</p> <p>(24 佐藤富士子) 老年学や他領域の概念や理論に関する研究指導を行う。</p> <p>(25 丹野真紀子) 医療福祉論及びソーシャルワーク論に関する領域での研究指導を行う。</p> <p>(27 久保田滋) 政治社会学・社会運動論・都市社会学・社会調査に関するテーマを中心に、研究指導を行う。</p> <p>(28 伊藤美登里) 社会の構造や変動（歴史的変遷）に関するテーマを中心に、研究指導を行なう。</p>
-------------------	---

授 業 科 目 の 概 要			
(人間文化研究科臨床心理学専攻（修士課程）)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
科 基 目 礎	Developing Critical Thinking Skills	クリティカル・シンキングは他人の意見を批判的に見るのではなく、情報や知識を複数の視点から注意深く、かつ論理的に分析する能力である。哲学、心理学、教育学、社会学、文学のようにそれぞれ独立して発展してきた学問が、複合的な問題分析と解決案を要求するようになったことから学際的なアプローチが重要となった。本講では方法論としてのクリティカル・シンキングにとどまらず態度としてのクリティカル・シンキング力の育成も目指す。（講義での使用言語は英語である。）	
	Critical Reading and Writing	クリティカル・リーディングでは、テキスト理解のプロセスへの認知的参加が可能となる能力を育成する。そのために必要に応じて使い分けるべきリーディングの種類、テキストの批判的分析方法を考察する。クリティカル・ライティングでは、説得力を持った論理展開ができる能力を育成する。そのためにargumentative essayの書き方のプロセスを例に、論理構造について考察する。（講義での使用言語は英語である。）	
臨 床 心 理 学 基 礎 分 野	臨床心理学特論	臨床心理学の基礎およびその実践に関する専門知識を体系的に講義する。具体的には臨床心理学の定義、歴史、倫理、日本における臨床心理学の現状と課題、心理査定、心理面接、地域援助、研究といった領域における心理臨床の内容について、具体的に触れる。特に、人間の健康な心から病理まで、連続性をもって考える精神力動的な立場から、人格の構造論、その発達やライフサイクル、心身を統合的に考える病態論、パーソナリティ論などについて学び、ひいては心理臨床の基本になるアセスメントとセラピストークライエント関係についての理解を深める。	
	臨床心理面接特論A	心理的面接の基本を身につけるため、毎週の授業を面接に見立てながら進める。毎回の授業では、事前に文献を読み、文献への理解についてレポートし、自分の考えや感じるところを表現し、メンバーからのフィードバックをもらう。毎回の積み重ねの中で、自分への理解と心理面接への理解を深めていく。また、授業の後半ではクライエント中心療法のシナリオロールプレイを行い、面接の基礎知識と体験を関連づけながら、面接の流れ（プロセス）を学ぶ。	
	臨床心理面接特論B	臨床心理面接は、臨床心理学的な援助を行う場合のもっとも基本的かつ中核的な方法である。技法論的にはさまざまな立場があるが、学派や対象を超えて共通に考慮されるべき事柄として治療構造論がある。授業では文献を輪読し討論を通して理解を深めるが、適宜、体験的な学習を取り入れて、より実践につながるようにする。授業の前半では治療構造論の基本を学び、後半では特に来談者中心療法および精神分析的な心理療法を比較を通して、治療構造論的観点から面接を明らかにすることを試みる。	
	臨床心理査定演習A	本演習では、授業の前半では、TATと知能検査を取り上げ、その施行および解釈について、大学院生同士のロールプレイを含めて体験的に学習を進める。TATについては、Cramer, Pをもとに基礎理論を学習し、要求-圧力分析、形式分析、かかわり分析、防衛機制、SCORSについて学ぶ。知能検査については、ウェクスラー検査を取り上げる。授業の後半では、テストバッテリーについて学び、それぞれの心理検査の特性を考慮して、心理検査と臨床像の統合、病態水準の現れの特徴などについて力動的な観点からの解釈を学ぶ。	
	臨床心理査定演習B	この演習では面接によっていかに心理アセスメントを進めていくかを実践的に指導することを目的とする。まずはDSMやICDなどの国際標準の精神医学的アセスメントと、生物-心理-社会モデルにさらにスピリチュアルな（いわゆる「人生の意味」などの）視点も加えたアセスメント、力動的アセスメントについて解説した後に、各主訴別に実際の事例に基づいたロールプレイによって、面接査定の実際について、実習していく。	
	臨床心理基礎実習	心理面接の基礎実習として、大学院生がクライエント役、セラピスト役を演じるロールプレイを行う。特に、来談者中心療法の基本的態度について体験的に学ぶ。実施時間を次第に延長し、前期後半では50分の面接を行う。いずれも実習後に、面接のプロセスを検討し、各人の問題点について検討する。この体験を元に、夏休みに他大学の大学院生と、スーパービジョンを行いながら3回の試行カウンセリングを行う。後期は、試行カウンセリングの振り返りを行い、ついで臨床事例を元にいろいろな臨床場面を想定したロールプレイを実施する。	

臨床心理実習	実際の臨床事例を担当し、それを緻密に振り返ることを通じて、心理療法臨床の実践力を養う。まず、学外の病院やクリニック、さらに児童関連施設や教育相談の現場などにおいての実習とその指導をおこなう。そしてそれと同時に1年次後期より学内の心理療法相談センターにおいて、センタースタッフが行う受面接への陪席、観察室からの観察や振り返りと指導、ついで幼児や児童への遊戯療法や、思春期・青年期の来談者への心理療法面接を実施したものについて、グループ・スーパーヴィジョンやケースカンファレンスなどによる指導を行う。	
臨床心理特別実習	院生が心理相談センターにて担当している事例に即して、心理臨床・心理療法の継続的な進め方について、より専門的な指導をおこなう。一つ一つの事例に関して、継続中に同時進行的にスーパーヴィジョンをおこなうことで、よりきめ細かい事例に即した指導をしていくことを目的とする。	
臨床心理学研究法特論Ⅰ (実証的研究法)	本講義では、臨床心理学における実証的研究法の習得を目指す。すべて講義によって行う予定である。授業計画は以下の通りである。まず、第1回目にガイダンスを行い、その後、2回～4回目で臨床にどのような実証的な研究が必要なのかについて述べる。5回以降は各論に移り、質問紙法、実験法、面接法について順次説明していく(5～11回)。その後、研究と実践における倫理の問題、論文の書き方・まとめ方、研究と実践がリンクした例について触れていくことにする。	
事例研究法特論	臨床事例を通して、力動精神医学的観点からクライアント理解、クライアントとセラピスト関係、治療技法についてグループディスカッションを中心にして学習する。特に、本学では、夏休みに大学院生にとって初めての事例体験となる試行カウンセリングを実施するが、この体験を知的に整理するために本講義は夏休みを利用して集中的に行う。	集中講義
心理統計学特論	本講義では、授業内容の学習を通し、受講生が独力で一通りの主要なデータ解析ができるようになることを目標としている。今日の心理臨床では、その実践的効果性を科学的に実証することが重要課題の一つとなっている。このことは、クライアントの幸福に資するのみならず、臨床心理士の高度の専門性を確立していく上でも必須となるはずである。本講義では、臨床心理学において実証研究を行う際に利用される主要な統計解析技法について、理論的概説と共に、統計解析ソフト(SPSS等)を用いたデータ解析演習を通して学んでいく。	
臨床認知心理学特論	本講義の目標は、抑うつや対人不安などの様々な臨床的問題を、認知心理学的視座から分析できるようになることである。そのため授業は、学術論文等の精読・討論による演習も取り入れながら進める。心理臨床は、悩みや問題を抱える人々の援助を通して、問題の本質的理解や改善・解決を目指す営みと言える。ただし、心理臨床的な人間理解においても、人の認知的過程に関する基礎知識は不可欠である。臨床現場におけるカウンセラーとクライアント相互の認知的過程やバイアスを理解することで、現象の多面的理解が促進されるものと期待される。	
発達心理学特論	生物学的存在として生まれた「ヒト」が人間社会で生活していく中で、「人間」として発達していく過程における諸問題を、発達心理学的に検討する。学生はレポーターとなって、テーマごとに発表を行なう形式をとる。テーマとしては、まず、脳の構造と機能の発達を概観する。その上で、乳幼児期における知覚・認知の発達、言語の発達、社会性の発達について、運動機能の発達との関連を検討する。特にピアジェの感覚運動期の意義を、触覚的探索の重要性の側面から検討していく。	
社会心理学特論	以下の3つの領域について論ずる。1つは、臨床心理学やカウンセリングの基礎としての人間理解を促進するため、対人関係について社会心理学的観点から検討することである。2つは、対人関係の具体的な研究領域として、ソーシャル・サポートをとりあげ、支える側と支えられる側とのやりとり注目した研究成果をふまえ、その問題と今後の課題を展望する。3つは、職場における人間関係の問題として、キャリア発達の観点から論ずる。	
社会心理学演習	社会心理学の領域における調査研究法(質問紙調査・面接調査・観察調査)、あるいは、実験研究法(実験室実験・質問紙実験・フィールド実験)に関する演習をおこなうことにより、実証的なアプローチによる研究について習得することを目的とする。そのために、受講者の興味・関心に基づくテーマを決め、研究の企画・計画・実施・分析・考察の一連の過程について演習を行うことから、上記目的の習得をめざす。	
臨床心理学専門分野 家族支援アプローチ演習	システム心理療法について学ぶ。具体的には、家族などの小集団をひとまとまりのシステムとして捉えるとはどのようなことか、システムと作業同盟を結び、システム全体の不具合に働きかけてゆくためにはどうしたらよいかについて、システム心理療法の理論と面接技法について修得することがこの授業のねらいである。より効果的な学習とするため、文献購読やグループ・ディスカッションに加えて、ロールプレイなどの体験学習を随時導入しながら授業を進める。この体験学習は、一つのグループ体験であり、集中的に行うことによって大きな効果があげられる。	

	精神医学特論	精神医学の基本的知識（統合失調症、気分障害、神経症性障害、発達障害、パーソナリティ障害、アディクションなど）、またクライエントの精神医学的評価、身体疾患との鑑別や医療スタッフとの連携の方法について学習する。	
	障害児心理学演習	身体的・認知的・社会的発達障害を持つ子供達が直面する諸問題を明らかにしながら、発達障害児の成長と発達を支援する心理学的実践工作を行い、その心理学的意義を検討する。具体的には相談センターに来所する発達障害児に対する教育実践を受講者全員で交代して行いつつ、その意義を理論的に検討する。学生は、毎回の実践のテーマを定め、課題を作成して実践に臨む。その企図と成り行きと考察をレポートして、問題点を共有し、よりよい実践活動を目指して心理学的な検討を行う。	
	臨床心理学研究法特論Ⅱ（投影法基礎）	Rorschach Testに関する基礎的な知識と技法を習得することを課題とし、片口法に基づく施行法・記号化法・量的分析法の指導を行う。	
	臨床心理学研究法特論Ⅲ（投影法応用）	査定演習A, Bで学んだ心理検査について、例えば、統合失調症、境界例や自己愛人格に代表されるような人格障害、発達障害など様々の病態水準の事例について、その典型例を通して、心理検査上の特徴を学ぶ。ここでは投影法であるロールシャッハ、SCT、描画法あるいは知能検査などのテスト・バッテリーから得た情報を統合して、病態のアセスメントをし、心理療法の適用について検討するといった、より高度な心理臨床の実践に触れるのと同時に、心理検査の所見の書き方なども実践する。修士1年生は、心理相談センターの内部実習の一つとして、これらの心理検査の施行を後期に初めて体験する。従って、本講義を後期の最後の段階で行うことは、心理検査の総まとめとなるため、集中講義の形式を取る。	集中講義
	心理療法特論Ⅰ（認知行動療法）	前半は認知行動療法の基礎となるレスポネン条件付け・オペラント条件付け・認知理論・の理解を主とし、理論解説・短い事例に基づく演習・用語と技法の解説・事例演習等を実施する。中盤以降は問題のアセスメントに不可欠な発達障害に関する知識や、認知行動療法の各流派への理解を促す。後半には認知行動療法の立場から事例をアセスメントし、対応を考える演習を行う。	
	心理療法特論Ⅱ（分析心理学）	C. G. Jungによって創始された分析心理学的な心理療法の理論と実際を身につけることを目的とする。まずは、分析心理学的な視点と理論について解説した後、箱庭療法や夢分析療法について実習と解説・振り返りを繰り返し、さらには絵画療法についても基本的な実践法と解釈枠組みを提供する。	
	学校臨床心理学特論	学校臨床心理学は、学校における心理臨床実践の基礎となる学である。課題設定を学校における児童生徒の心理支援を行なうための「ニーズを的確に把握し、その支援をいかに構築し実践するか」とし、アセスメントと面接の理論と技法を学ぶ。内容は、個人からコミュニティにいたる「システム」の発想と実際、個別心理面接から集団までの「関わり」のスペクトル」の「見立て」が含まれる。実践上の倫理やアドヴォカシーの問題も触れる。模擬演習やグループ討議を取り入れ、実際的な内容をめざす。	
	コミュニティ・アプローチ特論演習	コミュニティに心理臨床的な介入を試みる場合の視点をまず講義する。しかし、理論的な知識に裏付けられた実践を行うには、今起きている現象を観察し、その現象の意味を理解し、どのような方向性を目指していくかの見通しを定め、介入方針を立てなければならない。合宿を行い、合宿全体を視野にいたれた現象の観察・意味理解・介入指針を立て、介入するという過程を、体験的に学ぶ。体験とフィードバックと講義が交互に繰り返される。本演習は、合宿形式を利用するため集中して行う。	集中講義
指 研 導 究	臨床心理学特別研究	<p>(概要) 各指導教員が学生に対し、研究計画の策定を支援し、修士論文の作成に向けて指導を行なう。</p> <p>(2 西河正行) 臨床心理学に関わる諸問題について、事例研究・量的研究を含めて研究指導を行う。</p> <p>(3 深津千賀子) 臨床心理学の先行研究について、自身の研究目的を明確化して方法論を決定したうえで、研究指導を行う。</p> <p>(4 加藤美智子) 臨床心理学に関する学生自身が定めた問題意識に基づき、研究指導を行う。</p> <p>(5 向井敦子) 発達障害や社会性・認知の発達等の問題に関する研究指導を行う。</p> <p>(8 福島哲夫) 臨床心理学に関する量的・質的研究の視点と方法を身につけるために指導し、ケースフォーミュレーションに関する質的研究について、研究指導を行う。</p>	